
真・恋姫＋無双～紫雷の龍～

紫龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜紫雷の龍〜

【Nコード】

N0210P

【作者名】

紫龍

【あらすじ】

現代とは似て非なる世界で、敵の大将との激闘の末、討ち果たすも、自身も命を落としてしまう主人公 雷魔紫電。しかし、その世界の神に氣に入られ、「真・恋姫†無双」の世界に転生される。彼は、この世界で何を成し、どのように生きるのか？今、新たな外史の扉が開かれる！オリ主モノで、ご都合主義です。オリキャラも多数登場します。また、主人公は完璧超人です。シリアスは一応ありますが、最初の方ぐらいです………多分。更新は、不定期です。感想やアドバイス等も待ってます。でも、中傷的なことや、作品批

判はご遠慮願います。結構、傷つくので……。

序章一（前書き）

自分の処女作です。初めてなので、変なところもあると思いますが、温かい目で見守っていただけたら幸いです。

更新は、不定期になると思います。

これらのことを踏まえて、それでも良いと言う方は、お付き合いください。

序章一

とある城の玉座の間

ここに対峙する二人の男がいた。一方の男　冷王^{れいおう}は、いくつか傷があるものの、魔剣を肩に担ぎ、余裕の表情で、もう一方の男を見ている。もう一方の男　雷魔紫電^{らいましでん}は、腰にさしていた刀と銃剣を後ろに飛ばされ、自身も満身創痍であった。

「どうした、雷魔紫電？もう終わりか？」

冷王は魔剣を肩にトントンと当てながら紫電に話しかける。

「は！誰も終わりだなんて言っていない！」

そう言い、紫電は右手　手のひらに「封」と書かれている　を前に出す。

「これが俺の本当のメイン武器、大鎌『天竜^{てんりゅう}』だ！」

紫電がそう言った瞬間、何も無かった空間から大鎌が出現する。

「やっとその武器を出しおったか。だが、お前は満身創痍。我は、まだまだ余裕。この勝負見えたな」

冷王がフツと笑いながらそう言う。

「いいや。まだわからないぞ！……ハアア！」

紫電が気合を入れた瞬間、彼からものすごい覇気と殺気、それに闘気が発せられる。同時に、彼の体の回りに紫色の電撃が走り始める。

「フッフ……ハッハハハハ！それでこそ、『紫雷しらいのりゅうの龍』と恐れられた男！良いだろう。我も本気で迎え撃つまでだ！！」

冷王がそういうと同時に、彼からも凄まじい闘気が溢れ出る。

「いくぞ！覚悟、冷王！！」

「笑止！覚悟するのは貴様だああ！！」

ガギイイイイン！！

勢い良く魔剣と大鎌がぶつかり合う。

さらに、二人は何合も斬り合う。二人の身にまた多くの傷が付き出す。

「ハアアアアアアア！！！！」

「オオオオオオオオアアア！！！！」

雄叫びを上げ、さらに斬り合う。幾度も幾度も。自身の誇りをかける。

しかし、いつまでも続くかと思われた斬り合いは、鏖迫り合いになった後、お互いが離れたことで途切れる。

双方とも肩で息をしながら、相手を見据える。

「クククク……どうやら、お互い次の一撃が最後らしいな」

冷王が笑いながら、紫電に話しかける。そして、紫電もその整った顔に笑みを浮かべている。

「ああ…………どうやらそのようだな…………フフフフ」

そうしばらくの間お互いに笑い合う。

「では、決着といこうか」

「ああ。いいぜ！」

そういうや否や、両者とも今出せる最高の一撃のために構えを取る。

「我が最高にして最後の一撃！その身に刻み、冥土の土産とするが
いい！！」

「それはこっちの台詞だ！！」

そして、同時に切りかかる。

「死ねい！冥王冷波斬！！」
めいおうれんはざん

「ハアアア！龍霸雷光閃！！！！」
りゅうはらいこうせん

ドガアアアアアン！！！！

両者の奥義がぶつかり合い。あたりが強烈な光と振動にさらされ、煙が舞い上がる。

そして、煙が晴れて、二人の姿が現れる。

「フ…………フフフ…………流石…………『紫雷の龍』雷魔紫電…………良き…………

戦いで…あつたわ……………グハア！」

ドシヤア……………

冷王が倒れ、紫電が近づく。

「あんたもつくづく化けモンだったよ……………グッ！」

ドサ！

紫電が倒れる。

「チツ……………流石に、限界か……………王……………あんたの敵は^{かたき}……………とつた
ぜ……………流石に……………疲れた……………もう……………寝ても……………良いよな……………？
……………ハハ……………ありが……………とう……………よ」

そう言い残し、紫電はゆっくりと瞼を閉じ、冷王と共に深い眠りに
ついた。

その後、玉座の間に入ってきた紫電の仲間は、壮絶な戦いの後と、
その中央に倒れている紫電と冷王の姿を見、冷王が亡くなっている
事に歓喜の声を上げかけるが、同時に、紫電も亡くなっている事に
気づき、泣いたり、悔しがったりした。

その後、紫電はその功績を称えられ、手厚く葬られた。

そして、『紫雷の龍』と言つ名は、後世にまで語り継がれることになる。

序章一（後書き）

初めての投稿で緊張しましたが、これからも頑張って更新していきたいので、応援してください。感想やアドバイス等も待ってます。

序章二（前書き）

序章二つ目です。

今回は、異空間での神との会話です。

序章二

く光の空間く

「う……うっ……」

そこには、一人の青年　雷魔紫電と、らいましでん

「……………」

一人の初老の男が存在していた。

「う……あ……？ここは……………？」

しばらくして、紫電が目を覚ました。

周りを見渡すと、見たこともない白い光の空間にいることに気が付き。慌てて起き上がる。

「ふむ。気が付いたようじゃな」

そっという声がし、紫電は声のしたほうに振り向いた。

「……………あんたは？」

「ワシか？そうだのう。まあ、お主の居た世界の神といったところかのう」

……………

「……………は？」

男の突拍子も無い発言に、少々間拔けな声を上げる紫電。

「も、もう一度言ってくれるか？」

少々、焦りながら聞くが、

「じゃから、神じゃと言っておろつが」

「はあああああ！？」

再度の男の神発言に、驚きの声を上げてしまう。

「え？なんでその神がこんなところに……………？……………え？」

男 神の発言で少々パニックになってしまう紫電。

「とりあえず、落ち着け。ほれ、深呼吸」

「あ、ああ。スー…ハー…スー…ハー」

神の言葉で深呼吸をし、とりあえずは、落ち着きを取り戻し、話をする事になった。

「……………で、その神様が俺に何か用か？それから、ここはどこなんだ？」

「ふむ。そうじゃの……………まずは、こここのことから話をするかの」

そう言つて、神がこの光の空間についての説明を始める。

「ここはの、有体に言えば次元の狭間みたいなところじゃ」

「次元の狭間？」

「そうじゃ。ここは、色んな世界に繋がつておる」

「ふ〜ん。とりあえず、ここのところはなんとなくわかったから、俺がここにいる訳を教えてくれ」

周りを見ながら神の話を聞いていた紫電は、次に自身がここにいる理由を聞いた。

「それはの、ワシがお主を気に入ったからじゃ」

笑顔でそういう神。

「……………は？」

再度呆ける紫電。だが、さっきのこともあり、今回は早めに復活した。

「ええと、それで気に入つてここに連れて来て何させよう？つてか、今思い出したけど、俺って死んでるはずだよな？」

そう言つて、紫電は自分が目覚める前のことを思い出し、神に質問する。

「そうじゃの、お主は確かに「あの」世界では死んでおる。じゃが、

その魂を、ワシがここに連れて来たというわけじゃ。」

「なるほど。……で？さっきも言ったけど、俺に何させるつもりなんだ？」

神の理由を聞き、若干警戒する紫電。

「ほっほっほ。そう警戒するでない。とりあえず、お主に提案があるんじゃない？」

「提案？」

「そうじゃ。雷魔紫電よ。ワシの力で、そなたを別の世界へ転生させたいと思うんじゃないが、どうする？」

そう神が提案し、紫電は驚いた後、少し考え、

「…………ふむ。もうこの身は、あの世界では死んでるってことだし、新しい人生を楽しむのも悪くないかもな」

そう笑顔で言う紫電。

「ほう。では……………」

「ああ。その提案受けるぜ」

そう紫電が言い、神は笑顔になった。

「そうか。では、お主をワシが推薦した世界に送るとしよう」

「わかった……あ、でも、その世界ってどんな世界なんだ？」

「ふむ……そうじゃの。この世界のことについて少し説明しておくか」

そして、神によりその世界についての説明が行われた。

簡単に言うと、その世界は、「外史」といつて、誰かの手により作り上げられた、言わば、空想世界みたいなものらしい。

そして、これから送られる「外史」は、三国志を模した世界だが、有名な武将達がほぼ全員女性になっている世界らしい。

「ふゝん。三国志の武将達が女性になっている世界……ね」

あまり実感がわかないのか、少し考え込む紫電。そして、しばらく考えて顔を上げた。

「まだ、色々わかんねえことがあるが、その世界に行けば色々わかってくるんだろう？」

「まあ、そうなの」

「わかった。とりあえず、向こうに送ってくれ」

「了解した。では、気をつけてな。ああ、それと向こうに付いたら、赤ん坊になつとるからな」

「ああ。わかった」

神が右手を掲げたと同時に、その手から光があふれ、紫電を包んでいき、そして、紫電を完全に包み込んだ瞬間、彼の視界が暗転した。

序章二（後書き）

こんばんわ。前回に続き序章でした。

どうだったでしょうか？どんな評価されるのか、ドキドキです。

感想やアドバイスは、書いていただけると嬉しいです。

では、次回もお楽しみに。

第一話（前書き）

やっと書けました。

課題が溜まってしまつて少し時間がかかりました。

今回は、転生してから五年経っています。すみません。手抜きで、でも一応少しは生まれたときの様子も書いていますのでご安心を。では、楽しんでみてください。

第一話

そんなこと（前回の序章二を参照）もあり、無事転生をし、漢王朝のとある村の雷家に生まれた紫電。名前は、せいらい姓は雷、なま名は魔、あざな字は霸龍で、まな真名は紫電、となった。
両親が真名に「紫電」と名付けた理由は、生まれたその日に、紫色の雷が落ちたからだという。

そして、彼が生まれたのは、黄巾の乱よりも約二十年も前だった。

それがわかったときはびっくりしたが、それでも精神はそのまま受け継がれていたので、あまり動揺はなかった。

また、この件で、記憶も受け継がれていることが分かった。

しかし、再び赤ん坊として生まれた時は、色々不自由で、流石に戸惑ったが、それでも、優しい両親により、すくすくと育った。

そして、現在、紫電が生まれてから五年の月日が経っていた。

とある村の雷家の家

「しで〜ん！ご飯よ〜！」

「はい！」

現在、紫電は五歳、今は家で学問の勉強をしていた。
学問の勉強をしたいと両親に言ったときに、

「紫電。まだお前は五歳だ。なのに、なぜ学問を学びたいのだ？」

と、父親から聞かれ、紫電は、

「現在、漢はまだ安定していて、賊も少ないです。でも、いつ朝廷
が落ちるかもわからないのが、今の時代の摂理です。なので、いつ
でもどこでも仕官できるようになっておきたいのです。」

そう答えた。

この言葉には、流石の両親も驚きを隠せなかったようだが、それ
でも、紫電が学問を学ぶことを承知した。

そして、それからというもの。紫電は、一応近所の子供達とは遊ん
ではいるが、その後は、部屋にこもって、学問の勉強をしている。
幸い、この雷家は、村でもそれなりの富豪で、学問の本に関しては
あまり困らなかった。

（前に両親に言った通り、現在の朝廷はまだ落ちていない。しかし、
あと十数年したら、黄巾の乱が起きるほどに落ち込む。そうなる前
に、どこかに仕官して、態勢を整えるようにしないといけない。だ
からこそ、今からでも勉強はしとかなないとな）

そう考え、今夜も勉強に勤しむ紫電であった。

しかし、この村での、紫電の評価はあまり良いものではなかった。

原因は、真名の由来となった、紫色の雷であった。

雷の色が紫であったことなど今までなかったためである。

それに加え、実は、右の手の平に「封」いう文字が刻まれて生まれてきたので、そのことも踏まえて、呪われているのではと考える村人もそう少なくはなかった。

また、良く見ると、紫電の瞳孔は龍の目のように縦に割れており、そのことも、そう思われる原因でもあった。

そのことを知っている両親は、そんなときに変なことが起これば、紫電は村人から大変な迫害を受けるのでは？と思い、その時には自分たちが紫電を守ろうと決心した。

そして、紫電が先のことを考えてから一週間後。両親の心配は、現実のものとなる。

第一話（後書き）

どうだったでしょうか？

変な間違いをしてないか心配です。

さて、次回から少しシリアスが続きます。

それでも、頑張って書くので、応援よろしくおねがいします。

第二話（前書き）

第一話の続きです。

恋姫の世界での初めての戦闘です。

ちゃんと書けてるか不安ですが、どうぞお付き合いください。

では、どうぞ。

第二話

それは、ある曇りの日だった。

紫電は、いつものように家で学問の勉強をしていた。

そして、そろそろ休憩しようかと思い、机から腰を上げたときに、それが来た。

ワーーーーーーー！

突然外から色んな人の叫び声が聞こえた。どうしたんだと思い、外に出た瞬間。

紫電は言葉を失った。

それは、地獄絵図だった。

賊が、村に襲いかかってきており、村人たちを次々と殺している。そんな光景が紫電の目に入ってきた。

なんとか対抗する村人もいるが、そこは賊と村人、流石に力量の差が出たのか、次々と殺されていく。

「……………くっ！」

そして、紫電は、そんな光景に我慢できなくなったのか飛び出そうとした。

「紫電！何やってるんだ！家の中に逃げていなさい！！」

だが、紫電は飛び出せなかった。紫電の父が彼の肩をつかみ、家に引き入れようとしたからだ。

「でも、父さん！みんながやられてるのに助けないっていうのは僕には出来ない！！」

紫電は、そう父に言うが、

「駄目だ！ここは私が行くからお前は家に逃げていなさい！！」

そう言って、父　雷鳳らいほうは、賊の群れへと走っていった。

紫電は、しばらくの間、雷鳳の背を見送っていたが、後ろにいた母雷麗らいれいに振り返った。

「母さん……………」
「ごめん！！」

そう言って、雷鳳が走っていった方向へ勢い良く走り出した。

雷麗は、突然のことで呆けていたが、ハッとした時にはもう遅く、紫電の背中は見えなくなっており、彼女は紫電を止められなかったことで、悔しいそうに唇をかみ締めた。

場所は変わって、村でも一番広い場所で、村の自警団、それから紫電の父の雷鳳が賊と戦っていた。しかし、戦況は著しくなかった。

「くそっ……！賊の数が多すぎる！！」

その言葉をこぼしながらも、近くの賊を討ち取る雷鳳。

しかし、だんだんと疲れがたまってきており、注意力が散漫になってしまふ。

その隙を突いて、一人の賊が彼を背中から斬りかかった。

ザシュ！

「ぐわっ！」

賊の剣が彼の背中を斬ったが、彼は賊が背中から斬りかかってくるのが、気配でなんとかわかり、咄嗟に前に跳んだものの、それでも、浅くない傷を背中に作った。

と、そこに、

「父さん！！」

彼にとって、この場では聞いてはいけない声が聞こえ、その声の主

が、倒れそうになっている彼の体を支えた。

「な！？紫電！？なぜここに来た！？」

「だから、さつきも言ったじゃないか！みんなが戦ってるのに、自分だけ逃げていられないって！」

「馬鹿者！！子供のお前が来ても何も変わらないだろうが！！」

紫電が来たことに少し苛立っているのか、雷鳳の言葉遣いは、いつもより荒くなっていた。

その後、逃げながらも色々言い合っていたが、隠れるところに路地裏に身を隠し、とりあえず、息を整えるためにお互い黙っていた。

「ハア…………ハア…………まったく、心意気はいいが、さつきも言ったが子供のお前が来ても、何も並んだろっ」

「そう………………だけど……………」

そう言って頂垂れる息子を見て、少し苦笑いが出たが、息子の頭を優しくなでた。

その瞬間、彼らの上から影が落ちた。

「……！危ない！！」

紫電にその言葉が聞こえたと同時に、父が覆いかぶさってきた。それと同時に、肉を斬る音も聞こえた。

「……………父さん？」

自分に覆いかぶさったまま動かない父を不思議に思い、声をかけたが、

ドサ！

次の瞬間には、雷鳳が倒れこんだ。

「父さん！？」

流石に驚いた紫電は、雷鳳に近づいた。すると、彼の背中に新たな傷が出来ていることに気付く。

そして、背後から人の気配がし、振り向くと、賊が二人いた。

「こんなところにまだ人がいたぜ」

「ああ。結構運いいな俺ら」

と、下卑な笑みを湛えながら、紫電たちを見て、話をしていた。

紫電は彼らの持っている剣を見て、新しい血が滴っていることに気が付いた。

「……………俺の父さんを斬ったのは、お前たちか？」

いやに冷たい声音だったが、賊たちは昂っているのか、そんなことにも気付かない。

「ああ？なんだって？」

笑いながら、賊が聞いてくる。

「………… お前たちが斬ったのかと聞いている」

そして、その言葉に賊たちは、

「ああ。そうだよ。僕ちゃん。俺たちがそこに倒れている男を斬ったのさ。へっへっへ」

再び笑いながら言ってくる賊に、紫電の中の何かが切れた。

「そうか……………」

そう言つて、再度雷鳳に近づき、彼の安否を確かめた。彼の状態は、傷は深いが、息をしており、ただ気を失っているだけだとわかった。

「心配しなくても、僕ちゃんもその父親の後をすぐに負わせて上げるよ」

そう下卑な笑みを湛えたまま近づいてくる賊。

そして、その手に持っていた剣を振りかぶり、振り下ろした。

ギン！ザシュ！！

しかし、賊の剣は紫電を斬ることではなく、逆に剣をはじかれ、さらに首を一闪の下に斬り飛ばされた。

「…………へ？」

それを見ていた、もう一人の賊は目の前のことが理解できなかった。

確かに、さっきまでは目の前の小僧の手に武器なんてなかった。

しかし、今、その小僧の手には、大人の身の丈をも越える大鎌が握られていた。

「次は…………お前だ」

そう言われやつと、現実に戻った賊が見た小僧　紫電に恐怖を覚え、言葉にならない叫びを上げて、その場から、逃げようとした。

しかし、

ザン！

賊の胸が紫電の大鎌により、真つ二つになった。

紫電は、しばらくの間、真つ二つになった賊を見ていたが、すぐに雷鳳の方へ駆け寄り、彼の状態を確かめた。

「…………この傷なら、今のところは大丈夫か…………でも、すぐに手当てしないと…………」

そう言って、周りを見渡すと、

「あ、あそこに薬屋がある」

彼らがいる路地裏の目の前に薬屋があった。

「とりあえず、また見つかる前に移動しないとな」

そう言つて、彼は父の体を背負い。薬屋に向け走り出した。

しばらくして、一応の応急処置を施して、雷鳳の息が落ち着いてきたところで、安心して、ため息を吐いた。

「さてと、まだみんな戦ってるみたいだし、行かないと」

そう言つて、薬屋から出ようとしたが、いったん立ち止まり、眠っている父のほうを見て、

「いってきます」

と声をかけ、賊と自警団が戦っている広場へ走つていった。

その頃、広場では、賊と自警団が戦っていたが、何分数が違い自警団が押されていた。

このままでは、生き残っている村人まで被害に遭うと思い必死にな
って戦っていた。

しかし、彼らの背後からものすごい圧力を感じ、賊もその圧力を感
じ取ったのか、両者とも一時手を止め、その方向を見た。

すると、その方向には、見たこともない大鎌を持つ紫電がこちらに
ゆっくりと歩いてきていた。

そして、紫電はそのまま賊と自警団の方へ歩いていき、賊たちの前
に来るとその歩みを止めた。

「なんだ？このガキ」

そう言つて、紫電に近づき、その顔を見ようと覗き込もうとしたが、
逆に彼の顔が上がってきたので、それに合わせ、目を見た瞬間、

ゾワッ！

尋常じゃない寒気が賊の背中に走り、その場から飛び退いた。

紫電の目は……瞳孔が龍の様に縦に割れており、それを見た賊は、
まさに龍に睨まれたように感じたのだ。

「俺は……お前たちを許さない」

「は、ははは！俺たちを許さないってか。具体的にどうすんだよ？」

紫電から飛び退いた賊が、彼の言葉を聞き、下卑な笑みを浮かべ、
紫電に聞いた。

「戦うさ。戦って、お前たちを……殺す！」

ドンー！

紫電が「殺す」といった瞬間、彼からとてつもない圧力が放たれた。

「で、できるもんなら、や、やってみろや！このガキが……！」

賊の頭らしき男がそう叫んだ瞬間、何人かの賊が紫電に斬りかかった。

「ハアアアア……！」

ザシュ！ズバ！ザン……！

「ぐわ……！」

「ぎゃあ……！」

「へぶ……！」

ドサドサドサ……！

紫電が叫び、その手に持っている大鎌を一振りした瞬間、飛び掛った賊は、全員真つ二つになり、その場で絶命した。

その光景に、周りがしんとなった。

「……………はっ！何してやがるてめえら！次、かかれ！」

先に、呆けた状態から復帰した頭がまわりに叫ぶ。

しかし、紫電はその男を見定め、そして、その男に突撃して言った。

「ひっ！……くっ！嘗めんじゃねえ、この小僧！！」

頭は、剣振り上げ、紫電を迎撃しようとしたが、

ザン！！

気付いたときには、紫電は駆け抜け、そして、頭の首を斬り飛ばしていた。

そして、再び周囲が沈黙し、紫電はしばらく切り飛ばした頭の首の方を見ていたが、すぐに賊のほうに振り向いた。

「う、うわあああああ！！！」

それを見ていた賊の一人が、恐怖に駆られ、逃げ出した。すると、他の賊も次々に逃げ出し始めた。

しかし、紫電は、頭に血が上っているのか、逃げ惑う賊たちに次々と切りかかり、賊全員を切り倒し、全滅させた。その光景は、まさに地獄絵図であった。

そして、賊を全滅させ、紫電はしばらく突っ立っていたが、その体が

徐々に傾き、その場に倒れこんだ。

その瞬間、それを見ていた全てのものが、紫電の持っていた大鎌が彼の右手の平に消えていくのが、見えた。

その後、それを見ていた、母の雷麗が、心配になって近づき、気絶しているだけだとわかると、安堵し、他の村人の方へ顔を向け、彼女は愕然となった。

なぜなら、村人たちの顔には歓喜ではなく、恐怖の色が出ていたためである。

第二話（後書き）

以上です。

次回は、賊襲撃後の話です。

どうなるのか？お楽しみに！

第三話（前書き）

やっと出来上がったので投稿します。

賊襲撃から三日後くらいの話です。

この話は、前回の出来事の後始末と、今後の紫電の境遇が決まります。

紫電の母である雷麗の話の内容がちょっと変な感じしますが、それでもいいという方はどうぞお読みください。

どのような話になっているのか？

では、お楽しみください。

第三話

賊襲来から三日が経っていた。

紫電は、あの後、二日間眠り、その後目を覚ました。

そして、父の雷鳳は、翌日には目を覚まし、元気になってはいたが、傷が深かったため、しばらく静養する事になった。

そして、母の雷麗は、村長の家で行われる村の会議に顔を出していた。

「さて、皆を呼んだのは他でもない」

そう言つて、雷麗の方を向く村長。

他の参加者からも視線を受けるが、毅然としている雷麗。

「……………わかっているとは思うが、紫電についてじゃ」

村長がそういつた瞬間、他の者の目付きが変わった。

「さて、それでは、皆の意見を聞いていこうかの」

それからというもの、色んな意見がその会議で、飛び交った。一番多かったのは、やはり「追い出す」という意見であった。しかし、その中でも「紫電を残したほうがいいのでは？」という意見もあった。

それは、彼の武が途轍もない為という気持ちもあれば、純粹に彼が好きな者達の気持ちもあるということでもあった。

それから、しばらく会議が続いたが、それまで黙って見ていた雷麗が、話し始めた。

「村長、そして、皆さん。色んな意見が出てきましたが、私たちはこの村から出ることを昨日夫の雷鳳と話し合い、そして、決断しました」

その言葉を聞き、村長は目を閉じ、他の者は息を呑むものもいるが、皆黙って彼女の話を聞いていた。

「私たちは、常々、紫電に向けられる視線や感情を確認していました。そして、気付いたことがあります。紫電は、この村の多くの人に警戒されていると」

その言葉で、ほとんどの者が息を呑んだ。

「なので、もしこの村に何かあれば、紫電は生まれた時等のことを踏まえ、迫害されるのではと思いました。そして、そんな時は、私たちがあの子を守ろうと決心しました」

そこで、雷麗は一息入れ、そして、すぐにまた話し始めた。

「なので、私たちは、あの子を守るためにこの村を出ようと思います」

そこまでしゃべって、雷麗の話は終わった。

それを確認して、村長が雷麗に話しかける。

「雷麗。それは雷鳳も納得しておるんじゃない？」

その村長の問いかけに、雷麗はコクリと頷いた。

「……そうか。……では、紫電 雷麗に対する決定を言い渡す」

そこで、息を吸い、

「雷魔、そして、その両親の雷鳳、雷麗。この三名をこの村から追放処分とする」

その言葉で、会議は終了した。

その後、雷麗は家に戻り、事の次第を雷鳳に報告した。

「そうか……。まあ、その方が紫電のためになるだろう」

「そう………ね。 そうなのよね」

雷麗は、内心では納得しなかったのか、歯切れの悪い言葉を口にする。

その時、彼らがいる部屋の扉が開いた。

振り向くと、紫電がそこに立っていた。

「どうしたの、紫電？」

雷麗がそう聞くと、

「会議……………どうなったの？」

その言葉に、雷麗は黙り込んだ。

すると、

「私たち雷家は……………追放処分となった」

雷鳳がそう教えた。

「あなた……………！」

それを聞いて、雷麗が激昂しそうになったが、次に聞こえた紫電の言葉に驚きを隠せなかった。

「そう……………やっぱりそうだったんだ」

「！？」

驚いて紫電のほうを見ると、その顔はいつもと変わらないような顔つきであった。

「紫電………あなた、わかっていたの!？」

「うん。村の人のほとんどの視線が警戒だったから」

「そうか。だったら、今から出て行く準備をしておけ」

「はい」

紫電が出て行くのを見届けて、雷麗は雷鳳のほうに向き直った。

「あなた。あの子、ホントにわかったいたんでしょうか？」

「わからんが、本人がそういうのだから、間違いないんだろう。しかし、前から思っていたが、五歳なのに、あれだけの能力と精神力を持っているとは……………」

「ええ。流石に驚いたわ」

そう言つて、二人は紫電が出て行った扉をずっと見ていた。

それから、数日後。

雷鳳の傷も癒え、旅立ちの準備も整い、いよいよ追放の日がやってきた。

その様子は、追放と言うよりも、旅に出る者を送り出す送別会のようであった。

「村長。今までありがとうございました」

そう言って、村長に頭を下げる雷鳳。

「いや、雷鳳よ。頭を下げんでくれ。こちらとしては悪いことをしたと思っておる」

「そんな。村長は別に……」

「いいや、ワシがそう思うのじゃ。実際、村長の癖に紫電一人を守ることが出来んのだからな」

村長の言葉に雷鳳は、言い返そうとしたが、続く村長の言葉に、口をつぐんだ。

「それで、これからどうするんじゃ？」

村長の問いかけに、雷鳳は少し考え、

「ここから近い場所だと、長安なので、そちらに行って見ます」

「そうか。頑張って生き残るんじゃぞ」

「村長たちこそ」

そして、紫電とその両親は、村長が用意した馬車で長安へ向け、旅立った。

その追放の画は、追放とは思えないような感じであったという。

しかし、この後、^{のち}紫電たち三人に更なる悲劇が待っているとは、そこにいた誰にもわからなかった……。

第三話（後書き）

どうだったでしょうか？

流石に、ちよつと理由に無理があつたかなと思っています。
でも、投稿した限りは、自信を持とうと思います。

さて、次回。紫電たちは長安へ向かっている途中に、悲劇に遭います。

また、その時に、この作品の中心人物の一人が登場します。

それは誰か……？

次回をお楽しみに。

第四話（前書き）

出来上がったので投稿します。

今回は、前回言ったとおり、紫電たちに悲劇が降りかかります。
それどういったものか？

そして、中心人物の一人が出てきます。
それは誰か？

その答えは、物語の中に……。
では、お楽しみください。

第四話

紫電たちが村を出て、数日後。

その日は、雨が降っていた。

紫電たちは、とりあえず、雨宿りできる場所を探しながら、森の中を進んでいた。

「しかし、急に雨が降ってくるなんてな」

「ええ。こんなに降ると流石に、嫌になるわね」

そう雷夫婦が話をしていた。

紫電は、疲れているのかまだ眠っている。

馬車の馬の綱は、雷鳳が持つており、雷麗と紫電は、馬車の中で休んでいた。

??? Side

現在私たちは、この付近で出沒し、民たちに被害を与えている身の丈二丈（約六メートル）はある巨大な熊を討伐しに、森の中に入っていた。

この近くにある村で、待ち伏せていると、急に現れ、私たちと戦っ

た。

戦況的に、私たちが有利であったのか、熊はこの森へと逃げ込んだ。そして、現在至るわけである。

「ふむ。こんなに深いと手分けして探したほうが良さそうね」

私の言葉に、周りの兵たちが頷く。

「では、隊を五つに分ける。発見した部隊は、戦おうとせず、報告を優先しろ。

そして、移動したら気付かれずに後をつける。ある程度の部隊が合流し次第、攻撃を開始する」

「「「「「「は！」「」「」「」

そう言って、部隊を五つに分け、皆を散らし、最後に私の部隊が搜索を再開した。

しかし、発見したときにあんな光景を目にするとは、思いもしなかった。

??? Side Out

紫電 Side

紫電たちは、まだ森の中を進んでいた。

「そろそろ雨宿りできそうな場所が見えてきてもいいと思うが……」

雷鳳はそう呟いた。

雷麗は、紫電と同じく馬車の中で眠っていた。

すると、目の前に洞窟らしきものが見えてきた。

「お！やつとあった。おい二人とも、起きろ。洞窟を見つけたぞ」

雷鳳がその声をかけると、二人は目を覚ました。

「ホントに？これでこの雨がしのげるわね」

そう言って、背伸びをする雷麗。

紫電も目こすりながら背伸びをしていた。

その様子は、まさに親子で、雷鳳は、微笑んで見ていた。

そして、三人は洞窟へと入り、現在降っている雨をやり過ごすことにした。

しばらくすると、雨が止んだので、出発しようと外に出て、準備をしていたときである。

バキバキバキ！

突然、近くにあった木が倒れてきた。

紫電が何かな？と思い、近づいたらそこには、身の丈が二丈ある巨大な熊がいた。

「うわぁ！」

流石の紫電のこれには驚いたのか叫び声をあげた。

「どうした！？紫電！……………！？」

雷鳳が紫電の叫びを聞き、飛んで来た。そして、そこにいる巨熊に驚き、足を止めた。

すると、巨熊は、紫電の叫び声に驚いたのか、襲い掛かってきた。

ガアアアア！！

「！紫電！危ない！！」

紫電がぼうつとしている事に気が付き、彼に襲い掛かるうとしている巨熊から、助けるために、紫電に飛び掛った。

ドン！！バン！！

紫電は、自身にかかる衝撃と、そのすぐ後に聞こえてきた、音にハッと我に返り、音のしたほうに目を向けると、巨熊の一撃をもらいぐったりしている父の姿を発見した。

「うわあああ！父さん！父さん！！」

父に駆け寄り、その安否を確かめたが、彼はピクリとも動かなかっ

た。

「父さん！なあ、父さん！目を開けるよ！！」

紫電がそう叫ぶも雷鳳は何の反応も示さない。

そうしている内に、巨熊が紫電に近づいてきた。その気配に、気付き振り向くが、巨熊は、もうすでに攻撃の態勢を取っていた。紫電は、それを見ても動けずにいた。

ガアアアア！！

紫電は、思った。ああ、ここで終わりなんだと……………。
そして…………巨熊の爪が…………彼に振り下ろされた。

ザシュ！！

紫電は襲って来る衝撃に、目を瞑って待っていたが、どれだけ立っても痛みがないので、気になって目を開けると、そこには、自分がかばうようにして、覆いかぶさっている母の姿があった。

「な！？母さん！？」

そして、彼女に声をかける紫電。

「…………くっ…………し…………でん…………だい…………じょ…………ぶ…………？」

雷麗は優しく、紫電に声をかける。

「お、俺は大丈夫だけど！母さんが……………！」

そして、雷麗は優しく微笑んで、

「そう………よか………た………」

ドサー！

倒れこんだ。

「か、母さん？………母さん！？母さん！！」

紫電は倒れこんだ雷麗に必死に呼びかけるが、彼女は何の反応も示さなかった。

「……………くっ！母さん……………父さん……………」

そう言つて、涙を流しながら、両親の間から出た紫電。そして、二人のほうを向き、その後、顔をうつむけながら巨熊の方を向いた。

グルルルルル！！

巨熊は、再度攻撃するため、態勢を立て直していた。

紫電は、うつむけていた顔を上げた。

その瞬間、

ゴウー！！

熊に対して、強烈な突風が吹いた。と、熊は感じているが、これは紫電の氣の圧力による風である。

そのものすごい圧力を受け、熊は一瞬、後退さる。

「きさま……………」

そう言つて紫電は、右手から大鎌を取り出し、攻撃態勢と整えた。それと同時に、紫電の周りに紫色の雷が走り始める。

「貴様は、俺が殺す!!」

ダン!!

そう言つた瞬間、紫電は熊めがけて突っ込んだ。

紫電 Side Out

??? Side

私たちは、現在、部下の報告により、熊が進んだと思われる獣道を進んでいる。そして、しばらく進んだときだった。

グガアアアアア!!

「!!」

熊の叫び声が、聞こえ、その方向に部下たちと共に向かった。

そして、向かい始めてから、数分後。

私たちは、開けた場所に出た。そして、出た瞬間。

ズズウウウウン！！

熊が目の前に倒れてきた。すぐに身構えたが、良く見ると頭が割られており、部下に確認させると、死んでいるとのことなので、熊に近づいた。

そして、近づいたとき、熊とは間逆のところにある木の根元で、少年が呆然と何かを見ていることに気付いた。良く見ると、それは人間の姿だった。

確認するために近づいたが、徐々に近くなってくると、その人間の状態がわかり、思わず息を呑んだ。

それは、二人の男女の死体だった。「もしかすると」と思い、少年に近づいた。

「その君」

そう声をかけると、少年の肩がびくりと反応した。そして、その少年が振り向いたとき、私は言葉を失った。

その少年は、泣いていた。そして、それを見た瞬間、私は「やはり」と思った。

「その二人は、君の両親か？」

私がそう質問すると、少年はコクリと頷いた。

「そう………か」

そして、少年の隣に行き、しゃがみ込み、その二人の死体を近くで確認した。

「ねえ、君。よかつたら、何があつたか話して欲し……………」

ポス……………」

「んだけど」と続けようとしたが、私の右の腕に何かが乗ってきたので、見てみると、

「スウ……………」

緊張が解けたのか、眠っている少年の顔があつた。

「フウ……………」仕方がない。事情も聞かないといけないし……………。皆、熊の状態がわかり次第、村に戻る！」

そう隊のみんなに声をかけると、少年を他の兵に預け、自身は熊の状態を確かめる。

「しかし、こんな大きな熊の頭を割っているか。これを行ったのは、やはりあの子の両親か？」

熊の頭の傷を確かめつつ、少年の両親の死体の方に目を向ける。しかし、熊の頭の傷に会いそうな武器がなかったため、考え直すことにした。

??? Side Out

第四話（後書き）

はい、以上です。

ちよつと無理やり感があるかもしれませんが、以上が紫電たちを襲った悲劇です。

これから、紫電はどうなっていくのか？

そして、登場はしたものの、名前が出てこなかったこの人物とは？

次回もお楽しみに！

第五話（前書き）

出来上がったので投稿します。

さて、今回は、悲劇後の話です。

前回登場した人物の正体が分かります。

また、今後の紫電の立場やこの物語の大筋のルートが決まります。

どのようなことになっているのか？

どうぞお楽しみください。

第五話

（……………暗い。でも、なんだか暖かい）

紫電は、そんなことを考えていた。

（何で暗いんだろう？あ、そっか目を閉じてるからだ）

（でも何か忘れているような？何だっけ？）

そうして、紫電はさっきまで何があったか思い出した。

（そうだ！熊に襲われて。それから、父さんと母さんが……………）

そこまで思い出して、思い出すのをやめた。

（とりあえず、目開けないと）

そして、紫電は目を開けた。

「……………知らない天井だ」

そんなベタな発言をしつつ、起き上がると、

「お！目が覚めた？」

そう声が聞こえた。

声のほうに振り向くと、濃い桃色髪のとても綺麗な女性が立っていた。

「ええと、どなたですか？」

紫電がそう聞いている間に、女性は、部屋の中に入って来て、紫電が寝ているベッドのそばに来て、椅子に座っていた。

「私の名前？私は、劉宏りゅうこう。よろしくね」

「……………は？」

紫電は、彼女の名前を聞いたとたん、呆けてしまった。

「えっと、もう一度お願いします」

「だから、姓が劉、名が宏よ。ちゃんと聞いてた？」

紫電が確認のため、もう一度聞くと、やはりありえない名前が聞こえた。

そして、劉宏と名乗った女性は、紫電が聞いてなかったのかと思い、再度自己紹介をした後、膨れっ面になっていた。

「ええええええええ！？」

流石に、ありえない名前を聞き、紫電の驚きは途轍もなかった。

「いきなり叫ばないでよ。うああ……………耳がキーンしてるう」

（いやいやいや！なんで、次期皇帝の劉宏がこんなところにいるの！？）

紫電に叫ばれて耳鳴りがしている劉宏に対し、紫電は心の中で思いつきりツツコンだ。

「まあ、私の名前はいいとして。今度は、君の自己紹介をしてくれるかな？」

「（いいのかよ！？）え、ええっと、姓は雷らい、名は魔ま、字は霸龍はりゅうです」

戸惑いつつもちゃんと自己紹介をする紫電。

「雷魔君か。良い名前ね」

そういうと、それまで笑顔だった劉宏は、急に真面目な顔になり、紫電に質問してきた。

「それで、雷魔君。本題に入るけど、あの森で、何があったか聞かせてくれるかな？」

その質問に、紫電は少し暗くなった。

「話したくないだろうけど、一応、あそこで起こったことも把握して、上に報告しないといけないの。教えてくれないかな」

その劉宏の言葉の後、紫電は、しばし考えるようにして、黙っていたが、決心したのか顔を上げ、

「……………わかりました。お話します」

そう言って、これまでの経緯を劉宏に話し始めた。

それから、しばらくして紫電が話し終えると、劉宏はしばらく目を閉じ、考え事をしているようであった。

そして、劉宏は目を開け、口を開いた。

「そつか……そんなことがつたんだね」

紫電は、それらを思い出し、感傷に浸っているのか、顔を俯かせている。

「とりあえず……君に謝らないとね。……ごめんなさい」

紫電は、劉宏がいきなり頭を下げた意味がわからず、少し焦る。

「え？なんで、劉宏さんが頭を下げるんですか？」

「それはね……その巨熊は、私たちが討伐するはずだった熊なの……」

紫電はそれを聞いて、口をつぐんだ。

そして、今度は劉宏が、これまでの自分の経緯について、話し始めた。

それから、またしばらくした時、何かを考えながら劉宏の話を聞いていた紫電は、彼女に質問を投げかけた。

「劉宏さんは……………今回のこと、どのようにお思いですか？」

その質問に、劉宏は一瞬怯んだが、それでも毅然とした、それでいて申し訳なさそうに自分の気持ちを話し始めた。

「今回のことは、謝っても謝りきれないし、何より君が許すはずがないと思う。だって、自分たちが逃した討伐すべき猛獣が、偶々とは言え、そこにいた民間人に被害をこうむった。だから、私は君が謝ってほしいというなら何度でも謝るし、責任を取れというなら、何だって受けるつもり」

劉宏のその言葉を聞き、またしばらく考えるように、目を閉じ、俯く紫電。

そして、次に彼が顔を上げたとき、そこには、怒りはなかった。

「わかりました。では、今度は、僕の気持ちをお話します」

そう言って、姿勢を正し、しっかりと劉宏の目を見る紫電。

そんな紫電の様子に、劉宏も何故か背筋が伸びる。

「まず、最初はあなたの話を聞いた時は、怒りが沸々と沸いてきました」

その言葉で、劉宏は若干暗い顔をする。

「でも、あなたの素直な気持ちを聞いて、怒りは消えうせました」

続いた言葉に、劉宏の顔は少し明るくなる。

「でも、それでも、許すというのは、難しいです」

その言葉に、また顔を暗くする劉宏。

「なので、責任を取れとは言いませんが……」

そう言ってから、紫電は劉宏の顔を見る。

「何？なんでも言って」

「わかりました。できればいいです。僕には、今後行く所がありません。なので、あなたに付いて行っても良いですか？」

紫電がそう言くと、劉宏は、一瞬驚いた顔をするが、すぐに優しい笑顔になり、

「いいよ。実際、私も君を連れて行こうと思っていたし」

そう言った。

紫電は、その言葉聞いて、少し笑顔になり、

「ありがとうございます」

そう言って、深々と頭を下げた。

「いいの、いいの」

そう言いながら、劉宏は笑顔で紫電の頭をなでる。

紫電は、くすぐったかったのか、恥ずかしかったのか、体を少し竦めるも、素直に受け入れた。

「ところで、雷魔君を連れて行く理由なんだけど」

「はい？」

理由など気にしていなかったのか、紫電は少し呆けながら聞き返した。

次にあんな発言来るとは思っても見なかったのだろう。

「歳も近そうだからさ、義姉弟にならないかなって」

「え？ええええええ！？」

劉宏の爆弾発言を聞き、再度驚く紫電。

「ああ！いやなら別に良いんだよ。ただ、私としては、弟が欲しいって理由だから」

「え？いや、あの……」

まだテンパッている紫電。

しかし、しばらくして落ち付いてきたのか、少し考え、

「えっと、よろしく………お願いします」

と言った。

それを聞いた劉宏は、満開の笑顔になり、

「うん！よろしくね！」

そう言つて、上機嫌で紫電の手を握り、握手をした。

「さて、晴れて姉弟になったことだし、真名を預けなきゃね」

劉宏がそう言つて、紫電もそのことに気付いたのか、ハツとして、

「あ、そうですね。では、僕の姓は雷、名は魔、字は霸龍、真名は紫電です」

「紫電か。真名も良い名前だね。あ、私は、姓は劉、名は宏、真名は蒼華そつがだよ。これから、よろしくね。紫電」

「はい。よろしくお願いします」

ここに次期皇帝劉宏こと蒼華とこれから色んな運命を背負うことになる紫電の永遠なる契りが出来た。

この出会いが、紫電と蒼華の運命を大きく変えることになるのだが、それはまた別の話で…………。

おまけ

義兄弟の契りが完了して、数刻立った時。

「あ、そうだ。あの時の熊のことなんだけど」

「なんです?」

「あの熊をさ、殺ったのって、誰なの?」

「ああ。それは……僕が殺りました」

「……は?」

紫電の発言に一瞬呆ける蒼華。

「え?でも、君武器持っていないよね?」

「え?ああ、僕の武器ですか?あの時、熊を殺った武器は……」

そう言つて、紫電は周りを確認した後、右手を前に出し掲げた。

「?」

劉宏はなんで手を?と思つたが、次の瞬間、

「ハア!」

バシユウウウ!

「!?!」

いきなり、紫電の右手に大鎌が現れ、思わず身構えてしまった。

「僕の武器の大鎌『天竜』てんりゅうです。これで熊を倒しました」

「へ、へへ。そうなんだ」

劉宏は、いきなりのことでビックリして、動揺を隠せないでいた。

「……………やはりこんな力は、異常ですね」

「え！？」

急に暗い顔になった紫電に焦る蒼華。

「だって、蒼華さんの顔、相当動揺してますよ」

「え？ああ……………うん……………正直驚いた。でも、それも踏まえて紫電は紫電でしょ？」

「！？」

蒼華から意外な答えが返ってきたのか、紫電が驚いて顔を上げて、蒼華の顔を見る。

その時の蒼華の顔は笑顔だった。

「だから、そんなことで紫電のこと……………嫌いにならないよ」

そう言って、紫電を抱き、優しく頭をなでる。

「ありがとうございます」

そして、二人は兵が見に来るまでしばらくの間抱き合っていた。

第五話（後書き）

以上です。

なんと前回の人物の正体は、靈帝こと劉宏でした！！

完璧に、ご都合主義発動です（笑）

驚いてくれていただけたら、作者としての自分はとても気分がいいです（笑）

さて、今回のことでルートが決まりました。

お気付きの通り。漢ルートです。

完璧に、オリジナルルートです。

冒険に走りますが、頑張つて書きますので、どうぞ今後とも応援よろしくおねがいします。

ご意見、ご感想も待っております。

では、次回をお楽しみに！

第六話（前書き）

完成したので、投稿いたします。

今回は、ある意味幕間のようなものです。

話は、一気に飛んで、18年後の話になります。
すみません手抜きで……（汗）

でも、最初にそれまでの出来事などを書いているので大丈夫です。
では、どうぞお楽しみにください。

第六話

時は流れて、雷魔こと紫電と、劉宏こと蒼華の義姉弟の契りから十数年の月日が経っていた。

これまで色々な出来事が起こった。

まず、前帝の桓帝が亡くなり、蒼華が桓帝の皇后や当時の大將軍、そして、太尉により、擁立された。その後、町の肉屋の息子で、美形で有名な何氏を向かえ、その後、劉弁を生んだ。また、以前から皇后であつた王美人との間にも劉協を生んだ。

そして、次に紫電が十三歳で、軍入りをした。これには、蒼華が推薦しようかと話を持ち掛けたが、紫電は、「自分の力で、軍の上を目指したい」といったので、それに感銘を受けた蒼華は推薦せず、紫電が上がつてくる事に期待したという。

それから、二年の月日が流れ紫電が十五歳になったとき、それまでの功績や皇帝の蒼華との仲もあり、蒼華自ら、彼を自身の守護將に任命した。そして、その後、彼に配下が増え、自分の隊を持つことになった時、また蒼華自身がその隊の名を『天龍』と名付けた。

こうして、紫電は禁軍特殊警護部隊『天龍』の隊長として、日々活躍し、また、彼の武もその当時の後漢王朝の中でも、最強と称され、そして、彼の主な色が紫だったためと、彼が本気を出した時に見せた雷を纏った氣などの影響から、周りから『紫雷の龍』と呼ばれ、賊などからは恐れられ、民からは、絶大な人気を誇っていた。

しかし、それからさらに二年後。紫電が十七歳になったときに事件が起きた。

その年に十常侍となった張讓らに謀られ、謀反の疑いをかけられた。そして、これまでの功績や蒼華の計らいにより、死刑は免れたものの、洛陽から追放された。

『天龍』も解散させられ、『天龍』の仲間たちもバラバラに散らばってしまった。

その後、紫電は洛陽から遠くの山に山籠りをして、自身の能力の更なる向上を目指した。

そして、それから六年後の話から、この物語は再度紡がれていく……。

洛陽の事件から六年後。

くある荒野

「ハア……………良い天気だねえ。なあ、『白竜』はくじゅう そう思わねえか？」

ブルブル

腰に二本の剣を佩いた紫髪の青年 名を雷魔らいま、字を霸龍はりゅう、真名を紫電しでんが馬上で綺麗に広がった青空を見上げながら、彼が乗っている白く美しい毛並みを持つ彼の愛馬 白竜にそう問いかけると、白竜は人の言葉がわかるのか相槌を打つように一つ嘶いた。

蒼華と義姉弟の契りを交わしてから、十八年のときが流れており。彼も二十三歳になり、立派な大人である。しかも、結構イケメンだったりする。

「そうか。お前もそう思うかあ」

そう言って視線を白竜に落とす。

「しかし、あの事件から早六年か。それまで色々あったなあ」

昔を思い出しているのか、もう一度視線を上に向ける。

そして、感慨ふけるのはこれで終わり、と言うように視線を戻し、懐から精巧な漢の地図を取り出す。

「さて、現在はどの辺かなと……」

地図を広げながらそう呟き、現在の位置を確認し始める。

「確か、前に寄った町が西涼の武威だったから……ここから近いのは……天水か」

地図を見ながらこれまで通ってきた町と、ここまで来た時間を合わせて計算し、近くの町を確認した。

ちなみに、路銀は、軍に所属していたときに相当な額を貰っており、

洛陽を追放されるときに、それを持ってきたので、節約すれば、二年は大丈夫らしい。

まあ、それでも、途中で立ち寄った村などでは、賊や獣退治をしているが。

「天水と言やあ。最近、董卓とうたくが治めてるって話だったな」

そう言いながら、これまでに集めてた情報を確認する。

「結構、良い感じに治めてるらしいから、「あの」董卓とは別物かな？　そういえば、西涼の馬騰ばとうも女だったし。董卓もやっぱ女なのか？」

そう言つて、思考の海に沈む。ちなみに、彼の言う「あの」董卓とは、皆様もご存知の史実上の董卓のことである。

（あの時の神の言うとおり。三国志で有名になったほとんどの人物が女性化しているな。『天龍』の「あの四人」も女だったし。となると、董卓も女の可能性がある……か）

しばらくして、思考の海から戻ってきたのか顔を上げ、白竜に話しかけた。

「白竜。次は天水に向かうぞ。董卓って奴がどんなやつなのか見ておきたいしな」

ブルルルル

紫電の言葉に「わかった」言っているのか、また一つ嘶いた。

「よし。んじゃ、駆ける、白竜！風の如く！」

ヒヒーン！

そう言って、紫電は白竜と共に天水に向け地平線のかなたに消えていった。

これから、どのようなことが彼を待ち受けているのか？それは、誰にもわからない。

第六話（後書き）

いかがだったでしょうか？

おかしなところがあれば、すぐに言ってください。

紫電は、これから色んなところを放浪します。

そして、手始め……って訳ではないんですが、まずは、天水に寄ります。

そこで何が待ち受けているのか？

お楽しみに。

P・S・この後に主人公とその愛馬の紹介を投稿しますので、そちらもよろしく願いします。

主人公とその愛馬紹介（前書き）

紫電とその愛馬「白竜」^{はくりゅう}の紹介です。

能力値は、「真・恋姫＋無双パーフェクトビジュアル」を参考にしています。

主人公とその愛馬紹介

姓：雷らい

名：魔ま

字：霸龍はりゆう

真名：紫電しでん

前の世界の名：雷魔紫電らいましでん

性別：男

年齢：23歳

身長：192cm

体重：98kg（通常時）、78kg（大鎌出現時）

武器：黄竜じゆうりゅう（日本刀に酷似した刀剣）

飛竜ひりゅう（鍔無しの直刀）

天竜てんりゅう（大鎌）

愛馬：白竜はくりゅう

好きなもの：昼寝、警邏（という名の散歩）、白竜と遠乗り
嫌いなもの：悪人、蜂

能力値：武力5以上、統率力5、知力5、政治5、魅力5

現代とは似て非なる世界で、生きていた青年。その世界のとある国で、将軍として活躍していた。そして、敵国との決戦で、敵の大將（王）と一騎打ちし、勝利はしたが、相打ちとなった。しかし、その世界の神に気に入られ、その神の勧めにより、第二の人生として、恋姫の世界に転生される。

転生後、恋姫の世界のとある村で暮らしていたが、賊が襲ってきたときに起きた出来事が原因で、村を追われる。

その後、旅の途中、巨熊に家族共々襲われ、両親を巨熊に殺され

る。その時、熊退治に出ていた後の霊帝・劉宏に拾われる。

十三歳の時に軍に所属し始め、十五歳の時に禁軍特殊警護部隊『てんりゅう天龍』の隊長になった。また、漢王朝最強の武と言われ、その圧倒的な武や彼が通ったあとは必ず紫色の雷が残ることから『しらいのりゅう紫雷の龍』と呼ばれ、賊などから恐れられていた。

しかし、六年前の十七歳の時に、張讓の手により謀反の疑いをつけられ、洛陽から追放されてしまう。それがきっかけで『天龍』を解散させられた。

その後、六年間山に身を隠し、現在は、各地を放浪している。

性格

基本自由奔放だが、政務などはちゃんとこなす。その速さは、相応なもので、昼ごろにはほとんど終わっている。また、優しく人当たりも良く、面倒見も良いので民達や武文官に慕われていた。ついでに、『天龍』に所属しているときに劉弁、劉協姉妹にも懐かれていた。しかし、悪人や人を殺すことに何も感じていない賊などには容赦はしない。

容姿

長身で、筋肉質だが細く、顔も目つきが少しキツイが、端正な顔立ちをしている。髪の色は紫。目も濃い目の紫色をしている。また、瞳孔が龍の目のように縦に割れている。このことから、『紫雷の龍』と呼ばれているとも言われている。

ちなみに、作者的には、顔と髪型は「ナルト」の「サスケ」のような感じをイメージしている。

服装・装備

下に黒のアンダーアーマーみたいな服とそのうえから紫色の上着を着（首に近いところ以外は閉めている）、下は上着と同色の長ズボンをはいている。

戦闘時には、普段の服の上から首に口が隠れるほどのマフラーのような物を巻き、全体的に紫が主体の軽装の鎧と手甲と足甲を装備している。

実は、武器のひとつの大鎌『天竜』は、体内に封印されており、右の手のひらに「封」という文字が刻まれている。そこから大鎌を体内から取り出したときに彼の本気という証でもある（この時、大鎌分体重が減る）。そのため、仲の良い者達以外からは避けられていることが多い（妖術の類と思われるため）。

その他の能力

武は通常時でも呂奉先並みで、本気を出すと呂布より上。気配を消すことに長け、氣が使える、知略も『臥龍』諸葛孔明に、軍略も『鳳雛』鳳士元、『美周郎』周公謹の二人に勝るとも劣らないというレベルであり（強いて言うなら、現代で東大を余裕で、首席で卒業できるほど）、ある意味完璧超人である。

しかも、彼の扱う氣には、雷系の属性が付属している（前の世界で雷属性の技が使えたためという作者都合です）。また、指に挟んで投げられる程度の大きさであれば、それをクナイのように用いることもできる。さらに、情報収集能力も各国の隠密顔負けの実力がある。先にも言ったように、まさに完璧超人である。

・陣形

偃月陣、方円陣、魚鱗陣、鶴翼陣、峰矢陣

・奥義

LEVEL 1・『天龍』突撃令

突撃、味方士気＋、敵士気－

『天龍』の突撃はどんな者にも止められない。

LEVEL 2・龍霸雷光閃

突撃、迎撃、味方士気＋、味方攻撃＋

紫雷の龍の渾身の一撃。この一撃は、どんな万夫不当でさえ、
たちまち膝を地に付ける。

LEVEL 3・紫雷の龍

突撃、迎撃、味方攻撃＋、味方士気＋、敵攻撃－、敵士
気－

雷の如くの速さで駆け抜け、龍の如く敵を屠る。その姿、ま
さに天下無双なり。

・白竜 はくりゅう

普通の馬より一回り大きい白馬。紫電の愛馬。目と鬣 たてがみ、そして尻
尾は蒼く、体毛は白よりも白銀に近い美しい馬。紫電が『天龍』を
率いる事になった時に劉宏こと蒼華から送られた。史実の赤兔馬並
みの能力を有している。

紫電が洛陽から追放されたとき、張讓が自分の馬にしようとした
が、大いに暴れ、紫電が向かった方向に走り去っていったと言う。
その後、紫電に追いつき、彼の旅の供となっている。

紫電が旅をしている間の道中は一緒にいるが、町に入るときはそ
の周辺の森などに身を潜ませている。

主人公とその愛馬紹介（後書き）

こんな感じでムツチャ完璧超人です。

まあ、自分の妄想の産物なのですが……（苦笑）

第七話（前書き）

完成したので投稿します。

今回は、天水での話です。

では、どうぞ。

第七話

紫電が白竜と共に天水に向かつてから数日後。

彼らは、天水に着いていた。

白竜は、町の中を連れて歩くには目立ちすぎるため（主人公と愛馬紹介参照）、城門のすぐ傍の森の中に身を潜ませた。白竜は馬だが、そこらの獣や賊に遅れを取るような馬でもないので（赤兎馬並み）、町に入る時は、良く近くの森や林に潜ませている。

そして、紫電は、町の中を見てまわっていた。

「ここが天水か……結構賑わってるな。それに皆笑顔だ。董卓の政とつたくまつりごとが良い証拠だな」

そう言つて、すれ違う人々や店で客を呼び寄せてる店の者、その店の者に呼び込まれて物色している人などの顔を見て、董卓の政治が間違っていないことを確認する。

「最近は、洛陽を中心に、悪政管が増えてきているからな。こういつた良識な政治が少なくなってきたいやがる。やはり、あの時、十常侍を抑えておきや良かったか？」

昔のことを思い出しているのか、思考の海に沈む紫電。考え事しながらもすれ違う人々を避けながら歩くのは、流石といったところか。

しばらくして、思考の海から帰ってきた紫電が、ふと前のほうに視

線を向けた。
と、その時、

「キャアア!!」

「ん？」

突然、人ごみの中から叫び声が聞こえた。

「なんだ？」

叫び声が聞こえた方へ向かい、取り囲んでいる人の外からその様子を伺ってみると、二人の少女に刃物を突きつけて、銀髪の女性に対して何かを要求している男の姿が目に入った。

良く見ると、その男の刃物を握っている手とは反対の手に、金品や宝石が入った袋が握られていた。

ということは、この男は、強盗をして逃げている途中で、偶々通りかかった少女たちを人質に取り、追いついてきた銀髪の女性に逃走用の馬などを要求しているのだろう。

「ハア……………やっぱこんなに治安が良くても、こういうことする奴はいるんだねえ」

そうため息を吐いて、少し呆れる紫電。

そうしている間にも、男は今にも逃げ出しそうである。

「……………やばいな。……………仕方ない、助けるか……………っと、旅をするのに目立ちたくないからな。少し変装でもするか」

そう言って、路地裏のほうに入り、民家の屋根の上へ飛び乗った。
そして、荷物の中から、所謂、忍者の覆面の様な物を取り出し、それを被った。

「よし。それじゃ……………行きますか！」

そして、そのまま騒ぎの中心へ跳躍した。

「おら！早くしねえか！でないと、この二人を殺っちまうぞ！」

そう言って、二人の少女のうち深緑色の髪の少女の首に刃物を合わせる。

「ちい、すみません、董卓様。それに賈^{かく}駆……………」

「へう……………」

「くっ……………」

銀髪の女性は、そう二人に謝って、近くにいた兵に馬を持ってくるよう指示しようとした。

その時、

「金品を強奪し、女の子二人を人質にと取るとは、男の……………いや、人間の風上にも置けねえな」

そう言つて、両者の間に紫電が降り立つ。

「!?!? な、なんだてめえは!?!?」

そう言われ、紫電は男に向かつてこう答えた。

「俺は、通りすがりの『覆面戦士』だ」

そう言つて、紫電は男に近づこうとする。すると、

「と、止まれ!それ以上近づくと、この二人を殺すぞ!」

そう言われ、紫電の足が止まる。

そして、しばらく男の方を睨んでいたが、明らかに呆れたようにため息を吐いた。

「な、なんだよ!?!」

そう言つて、男は紫電がため息を吐いたのを、見て怒りをあらわにする。

「いや、救えねえなと思つて……」

「な、なんだと!?!」

「相手の力量もわからねえ奴が……」

その言葉と共に、紫電が消え、男は焦つて周りを見る。

「そう意気がるんじゃないやねえよ……」

男の背後からその声が聞こえた瞬間、男は首に強い衝撃を感じ、そのまま意識を失った。

紫電は、あの一瞬で男の背後に回り、男の首に手刀をくらわしたのだ。

男が意識を失ったことで、二人の少女が解放され銀髪の女性が二人に元にやって来た。

「董卓様！賈馱！ご無事ですか！？」

「え、ええ。なんとかね」

「へうう……怖かったですう」

そうして、銀髪の女性は二人の少女　董卓と賈馱の状態を確認して、助けてくれた者にお礼をしようと、さっきまでその者がいた方に視線を向ける。

「その者、董卓様を助けてもら………な！？」

しかし、そこには、誰もおらず、周りの者達もそのことに気付き、皆周りを見渡すが、その者　紫電を見つけることはなかった。

「？どうしたんですか？華雄^{かゆう}さん」

「？」

董卓と賈馱は、そのことに気付いていないのか、銀髪の女性　華雄に疑問の眼差しを向ける。

「……董卓様たちを助けた者がどこにも居りません」

「「え!?!」」

華雄の発言に二人は驚き、辺りを見渡すが、華雄の言う通り、どこにもいないことによりやく気付いた。

「へう………本当にどこにもいないですね」

「ホントね………でも、あいつはいったい何者だったのかしら?」

「わからん。しかし、もしかしたら、あの者、私よりも強いかもしれません」

その華雄の言葉に再度驚き、華雄の方に振り返る二人。

「それは本当ですか? 華雄さん」

「はい。先程、あの者が強盗犯に手刀をくらわせたときの動き……正直、見えませんでした」

その言葉に、さらに驚く二人。しかし、その言葉だけでも、あの者が相当強いと言うことがわかった。

なぜなら、華雄は、現在董卓に仕える者の中で、最も強い武将でもあるからだ。

「そうですか………でも、ちゃんとお礼をしたかったです」

「まあ、今度会った時でもいいんじゃない、月?」
ゆえ

「……そうだね……詠ちゃん」

そう言って、二人は華雄の護衛の下、城へと帰っていった。

その紫電はと言うと……。

「へえ。あれが董卓。そして、賈馱に華雄か……」

町の中でも高めの建物上から三人の様子を伺い、その三人の会話を読唇術で読み取っていた。

「なんか史実とは違って、虫も殺さないような子だな、董卓は。賈馱は、気の強そうな子で、華雄は、まさに武人って感じだな」

そう言って、三人の特徴を分析する。

「さて……欲しい情報も手に入っただし、早めにこの町から出たいんだが……」

そう言いながら、空を見上げる。そこには、茜色になりつつある空があった。

「結構、太陽が傾いてるな。これは、この町を出ても、夜までに次の町や邑に着けそうにないな」

そう言つて、屋根の上から路地へ跳び降りる。

「仕方ない。今日はもう宿をとって休むか」

そして、宿のほうに歩みを向けるのであった。

翌朝、紫電は城門が開いたと同時に町を出て、白竜を呼び、次の町を目指すのであった。

第七話（後書き）

以上です。

次回、紫電と白竜はどこを訪れるのか？

いろんなことを予想しながらお待ちください。

では、お楽しみに！

第八話（前書き）

や、やっと出来上がりました……。

遅くなった言い訳は、あとがきでいたします。

今回は、ある三人組との出会いです。

どのようなになっているのか？

ではどうぞ。

第八話

天水を出発してから二日後。紫電は、漢中に着いていた。

「ここが漢中か。ここも賑わってはいるな」

そう言いながら、漢中の町並みを見てまわる紫電。

白竜は、前にも言ったとおり、近くの森に身を潜ませている。

「さてと……そろそろ腹も減ってきたし、店にでも入って腹を満たすか」

そう言いつつ、近くにあった酒屋に入っていた。

??? Side

私たちは現在、漢中の街中にある一軒の酒家で、今後のことについて話し合いをしていた。

「……………それで、これからどうする?」

私 姓を趙、名を雲、字を子龍、真名を星と言う は、そう言
つて目の前にいる二人の旅の友に話を切り出す。

「そうですね。ここら辺は、もう粗方見終わりましたからね」

その二人の内、眼鏡をかけた女性　姓を郭^{かく}、名を嘉^か、字を奉孝^{ほうこう}、
真名を稟^{りん}が私の質問に答えた。

「そうだな……二人が良ければ、私は？州にある陳留というところに行ってみたいのだが……どうだろうか？」

そう言つて、私は二人に次の目的地を提案した。

「陳留ですか。確か、曹操という方が刺史をしているというところですね、星ちゃん？」

頭に人形を乗せた少女　姓を程^{てい}、名を立^{りつ}、字を仲徳^{ちゅうとく}、真名を風^{ふう}が
間延びした声でそう尋ねてきたので、私は酒を飲みながら頷いた。

「そうだ。風の噂^{かぜ}で聞いてな、どのような人物が興味が湧いてきたのだ」

そう言つと、目の前の二人　風と稟は、少し考え、

「風はいいと思います。稟ちゃんはどうですか？あそこには、まだ行つてないですし」

「そうですね。私も、曹操という人物には興味がありますから」

そう言つて、二人とも私の提案に賛成してくれた。

その後は、他愛のない会話で、盛り上がって、なごやかな雰囲気になったが。それを打ち壊す怒声が店の中に響いた。

「酒だ！酒をもつてこい！！」

声の聞こえた方に目を向けると、酒に酔った大柄な男が辺りに怒鳴り散らしていた。

周りにいた他の客は、迷惑な顔しつつも、その男と関わり合いたくないのか、その男から距離をとる。

そうしている内に、この店の店主がその男を諫め始めた。

「あの……他のお客様のご迷惑になりますので、少し静かにしていただけますか？」

しかし、その行動がかえって男を怒らせた様だ。

「ああ！？なんだてめえ！客の俺に意見しようつてのか！？」

男はそう怒鳴ると、店主の襟首を持ち上げた。店主の足が宙に浮き、苦しそうなうめき声を漏らし始める。

私は、それを見て、近くに立てかけてある私の槍『りゅうが龍牙』を取り、立ち上がった。

「行くのですか？」

それを見ていた稟が私に尋ねた。

「うむ。……ああいう無粋な輩を見ると、無性に腹が立つのでな。少々成敗してくる」

「その必要はなさそうですよ」

そう言う風の声が聞こえたので、私と稟は、風の方を見た。

「どういうことだ、風？」

「あれを見てください」

風にそう言われ、私と稟は、風が指差した方へ目を向ける。

するとその先には、一人の青年がいた。

その青年は、男に近づくとその男に声をかけた。

「おい、おっさん。そこまでにしてあげろよ。いい大人なんだから。ほら放してあげろよ」

そう言って、青年は男の手首をつかんだ。

「っだ!？」

そうすると、男は痛みの声を上げて、手を放した。

「店主。ここは俺に任せといてくれ」

青年が床に落ちた店主に声をかけると、店主は慌てて二人から離れた。

「てめえ！何しやがる!？」

そう言つて、男は目の前の青年に向かって殴りかかった。良く見ると、振り上げた腕とは逆の腕の手首に痣が出来ていた。

だが、青年はその男の拳を体を横にそらして避けた。

男は、避けられたことにより、態勢を崩し、そのまま盛大に床に転がった。

「あらら。大丈夫か？随分と酔つてるみたいだな。気をつけたほうが良いぞ」

青年がそういけしゃあしゃあと倒れた男に声をかけると、周りからは失笑が漏れた。

だが、私は見た。青年が、男の拳を避けたと同時にその男の足を自分の足で引つ掛けていたことを。

「て、てめえ……ぶつ殺してやる！」

笑い者にされた男は、酔いとは違う理由で顔を赤くし、立ち上がった腰に下げていた剣に手をかけた。

その瞬間、

「いい加減にしろよ…おっさん」

ゾクッ！

青年のその言葉と共に青年から殺気が放たれ、辺りの温度が下がったような気がした。

私でさえ、『龍牙』を握っている手が思わず強くなるほどだ。それを真正面からしかも至近距離で受けている男は、口をパクパクするものの、言葉が出ないようだ。

「それを抜くつてことは、冗談じゃすまなくなっちまうんだぞ？分かってんのか？」

さっきまでとは、打って変わって冷たい声音で男に話しかける。

「分かったんなら、さっさとここから立ち去れ……………それでも、分からねえんなら……………」

そう言つと青年は、スッと目を細めた。

「……………俺が相手してやるよ」

青年がそう言つた瞬間、さらに強い殺気が放たれ、私は冷や汗をかいた。

それを真正面から受けていた件の男は、すぐに身を翻し、店から出て行つた。

「……………ふう」

そつ青年が息を漏らすと、静寂に包まれていた酒屋の中で歓声が沸いた。

周りの人たちが口々に青年を賞賛しながら取り囲んでいく。

青年が少し気恥ずかしくしていると、今度は店主が近づいていった。そして、何度も青年に頭を下げていた。

それから、青年と店主がいくつか言葉を交わすと、店主は笑顔で頷いて店の奥、厨房の方へ姿を消した。

それを皮切りに、囲んでいた客も青年から離れて行き、青年も座っていた卓へ戻っていった。

「な、中々面白いものが見れましたね」

「そ、そうですね」

二人はそう言うてはいるが、先程の殺気のせいで動揺しているのが分かる。

だが、私は酒と自分の料理を持って席を立ち、先程の青年の座っている卓へ向かおうとした。

「……って、星？どこへいくのですか？」

そう稟が聞いてくる。

「なに、少し挨拶でもしておこうかと思ってな」

そう言うて、私は青年の卓に向かった。

「まったく、星ったら……」

「まあ、いいじゃありませんか。風もあのお兄さんに興味あります

し」

そう言つて、風も自分の料理を持つて、私の後ろを着いて来た。

「え！？風も！？ちょ、ちよつと待つて！」

そう言つて、稟も焦りつつ自分の料理を持ち、一緒に着いて来た。

趙雲 Side Out

紫電 Side

客や店長から解放された紫電は、自分の卓に戻り少し困っていた。

「やっちまったなあ。あまり目立ちたくなかったんだが……………」

そう言つて、酒を煽った。

「少し、よろしいか？」

突然、声をかけられ、そちらに顔を向けるとそこには酒と料理を持った、蝶の羽の模様を浮かべた袖に白い服着た女性がいた。

「……………なんか用か？」

「うむ。突然だが、相席をしてもらいたいのだ。よろしいか？」

「それは構わないが……………」

そう言つて、周りを見る紫電。

「座るところは他にもあるみたいだが？」

紫電の言つとおり、客の出入りこそは多いものの、座る場所に困るほどではなかった。

「確かに、座る場所なら、そこかしこにあるが、貴殿と話できるのはこの卓しかなかろう？」

紫電は、この女性は自分が目的でこの卓に来たことに気付いた。その理由は、先程の騒ぎを見て話したくなった、ということだろう。

「ふむ。そういうことなら別に構わないぞ」

「では、遠慮なく座らせてもらおう」

そう言つて、女性が紫電の対面に座ると、今度は頭に人形？のような物に乗せた少女と、眼鏡をかけた女性がやって来た。

「風と稟ちゃんも一緒に良いですか？」

「あんだたちは？」

紫電がそう聞くと、

「私の連れだ」

先に座っていた女性が教えてくれた。

「そうか。なら、どうぞ」

そう言って、紫電は二人にも座することを勧めた。

「「ありがとうございます」」

そう言って、頭に人形？を乗せた少女は紫電の隣に、眼鏡の女性は少女の対面に座った。

紫電は二人が座ったのを確認し、三人に話しかけた。

「……これで全員か？」

「うむ。……まあ、まずは自己紹介でもしとこうか」

そう言って、白い服の女性、頭に人形？を乗せた少女、眼鏡の女性の順に名乗りだした。

「我が名は趙雲しうんという」

「風の名は程立ていりつです」

「私は戯志才ぎしさいと名乗っております」

その三人の名を聞き、紫電は内心驚いたが、顔には出さず、次は自分の名を名乗った。

「俺の名は、雷霸らいはと言つ」

紫電は、この旅の途中、どこで洛陽を追いつかれた自分の名を知つ

ている者がいるかわからないため、あえて偽名を名乗っていた。

そして、そう名乗りつつも、頭の中では、三人のことを分析していた。

（へえ。この水色の髪の方が趙雲か。確かに、良い目をしてやがる。武も相当な物だな。そして、他の二人は、程立に戯志才か。……程立は、いかにも軍師のような感じだな。戯志才は、こちらも軍師だが、さつき「名乗っている」と言ったな。ってことは、偽名か。本名が気になるが、俺も偽名を使ってる分、あまり深入りしないほうが良いな）

これを名乗っている一瞬の間に考えた。

「ところで、先程この店の店長と何か話していたようだが」

そう趙雲が聞いてきた。

「ああ。それはな」

「へい！お待たせしやした！」

紫電がその内容を話そうとしたとき、横合いから威勢の良い声と共に大皿に盛り付けられた美味しそうな料理が運ばれてきた。

「雷覇殿。先程の話の内容はこれですか？」

「そうさ。あの時、どうしてもお礼がしたいって言うから、ここの料理で一番うまい物を食わしてくれって言ったんだ」

そう言つて、紫電は趙雲が聞いてきた内容の答えを教えた。

「そうですか……。それにしても多いですねえ」

程立の言つとおり、その大皿に盛られた料理はすごく多かった。なにせその頂点が紫電の視線とほぼ同じだったからだ。

「やけに時間がかかるなと思ったら……。残すのは……。勿体無いしなあ……」

食べ物にありつくのにも苦勞するこのご時世だ。残すなんていうのは駄目だろう。

恐らくこの店長が好意でやってくれたのだろうが、流石の紫電でもこれ全部を食べるのは苦勞しそうだった。

そう紫電が悩んでいると、趙雲たちが声をかけた。

「雷霸殿。よろしければ我々もそれをいただいても構わぬか？」

「ホントか？それは助かる。んじゃ、三人とも遠慮せずに食べてくれ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。では、雷霸殿も我々の料理をお食べください」

戯志才がそう言ったの聞いて、紫電は他の二人に「いいのか？」という視線を送ると、他の二人は頷いた。

「わかった。では、いただきます」

「「「いただきます」」」

そうして、四人は紫電の掛け声で食事に取り掛かった。

あれ程の料理も四人が食べれば何とか全部食べることが出来た。
食べ終わり。今は食休みといったところだ。

「へえ。じゃあ、三人も旅をしてるのか」

「うむ。私たちは見聞を広げるために諸国を渡り歩いている。雷霸殿も旅をしておられるのか？」

「ああ。俺も三人と似たようなもんだ」

「そうですか。ちなみに、どこから来たのですか？」

「俺は、最近長安から出発してな。その後は、涼州の武威、天水を通って、この漢中に着いた」

「ほう。長安から。それに武威と天水ですか」

「ああ。どこも結構な賑わいで、その領主が良い政治をしていた」

そう言っ、紫電は今まで回ってきた町の様子を三人に語り始めた。

しばらくして、紫電の話が終わると、趙雲はこの卓に来た目的の話を切り出した。

「ところで、雷霸殿。先程の件は見事でしたな」

「先程？ああ。あのおっさんのやつか。俺としては、単にムカついたからっただけで、それほど大したことじゃねえよ」

「ご謙遜を。あの時、貴殿が助けなければ、この店の主人はどうなっていたことか」

「そんな時は、あんたが助けていただろう？」

紫電がそう言っ、趙雲はまるで試すように聞いてきた。

「何故なにゆえそう思われた？」

「あんたが義に厚そうなのと、目がとても澄んでるからだよ」

「……………は？」

趙雲は後半に予想外のことを言われ、少しポカンとなった。

「人の目を見るとたいいていの事がわかるんだ。そいつがどんな人生を送ってきたか、がな。善行を積んでいる心優しい奴はホントに目が澄んでいる。反対に悪行ばかりしてきた奴の目は、暗く濁っている。ホントに人間か？ってくらいにな。実際、俺はそう言う奴を何人も見てきた」

そこで、一旦切り口に水を含み、再び話しかけた。

「だからこそ分かる。趙雲。あんたの目は、とても真つ直ぐで綺麗な目をしている。だから、あの時、俺が出て行つてなくても、あんたが助けていただろうと思ったのさ」

その言葉を聞いて、趙雲はしばらく呆然としていたが、不意に吹き出し、そして、笑い出した。

「ぶっ、ははははは！そうか！私の目が綺麗だからか！なるほど…くっくくくく」

そうして、ひとしきり笑うと、趙雲は目元の涙をぬぐい、居住まいを正した。

「いや、すまないな雷霸殿。貴殿が余りに嬉しい事を言ってくれるものだから、な」

「いや、喜んでくれたならそれでいいよ」

（まあ、以前にもこれを聞いて大笑いした奴がいたからな）

趙雲の言葉を聞きつつ、昔を思い出した紫電。

「お礼に貴殿には我が真名を授けよう。我が真名は星^{せい}だ。次からそう呼んでくれて構わない」

「……は？」

いきなりのこと頭が付いて言っていない様子の紫電。

そこに、

「おお！星ちゃんが真名を許すとは、お兄さん中々やりますねえ。ちなみに、風の真名は風^{ふう}ですので、よろしくお願いしますねえ」

「いや……あの……」

「二人が真名を許したとなれば、私も許さない訳にはいきませんね。正直、先程の言葉には感銘を受けましたし。私の本当の名は郭嘉^{かくか}、真名は稟^{りん}です。偽名を使っていたことには深くお詫び申し上げます」

そこまで来て、紫電は諦めたのか溜息を吐き、

「はあ……もう勝手にしてくれ……それなら、俺も教えねえとな。俺の真名は紫電だ。よろしくな、星、風、稟」

そう言って、自分の真名も名乗った。

「」「よろしく」（お願いします）（紫電殿（お兄さん））」「」

こうして、奇妙な三人組に気に入られた紫電であった。

それから、しばらくの間、この大陸の行く末や情勢、そして、現在の有力諸侯はどこかなど会議みたいなものをしていた。

しかし、気付いたら、どうやら、随分と長居してしまったようで、酒屋を出ると、もう辺りはうっすらと暗くなり始めていた。

「それで、紫電殿。貴殿はこれからどうするつもりだ？」

突然、星がそう聞いてきた。

「ん？どうするって……そうだな。今日はもう宿に戻って寝て。明日には、巴蜀の方へ行ってみるかな。星達のおかげで、この町で得たかった情報も聞けたし」

そう言って、紫電は星に聞かれたことに対しての答えを言った。

「そうか。では、我らとは逆の方向になるわけだな」

「ああ。だから、ここでお別れだな」

「そうですか。まあ、仕方ないですね」

「そうですね。でも、もう少しお話をしたかったです。紫電殿の話はとても興味があったので」

そう言って、稟の顔に少し寂しさが浮き上がる。

「……………ぐう」

いきなりの風の寝息で、ズッコケそうになる紫電。

「はぁ……風、起きなさい」

そう言つて、風を起こす稟。

「おお！稟ちゃんがあまりにも意外な感情を出したので眠ってしまいました」

「悪かったわね！意外な感情で！」

風の発言にほんのり頬を染めながら、言い返す。

「なあ、星。あれって風の癖なのか？」

紫電はそう星に聞く。

「ああ。いつでもどこでも寝てしまう癖が風にはあるらしい」

星のそれを聞き、何だその癖、と紫電は心の中でツツコンだ。

「さて、そろそろ宿に戻らないと、真っ暗になってしまうな」

その星の言葉に、言い合いをしていた二人もこちらに振り向いた。

「そうだな。んじゃ」

「どうしました？」

急に言葉を切った紫電に風が声をかけるが、紫電は通りの脇を睨むように見つめていた。

「星」

「ああ、わかっている」

紫電が、星の名を呼ぶと、星は頷いて『龍牙』を手に取った。

紫電も腰に下げていた二つの剣の内、左に下げていた方を右手で抜いた。その剣は、現代で言う日本刀の形に似ていた。

それだけで、他の二人はただ事ではないことに気付いた。

「隠れても無駄だ。出て来い」

そう言つて、先程よりも打つて変わつて冷たい声で、通りに向かって、短くそう言った。

しばらくすると、その通りから一人の男が現れた。

「ふーん。あの時のおっさんか………いつたい何の用だ？」

現れたのは、酒家で紫電に追い払われた大柄の男だった。手には剣が握られており、剣呑な雰囲気を漂わせていた。

「てめえ……あん時はよくも俺に恥をかかせてくれたな。ただじゃすまさねえから覚悟しやがれ！」

「それで？貴様一人では敵わないから、仲間を連れてきたのか？」

そう星が言うと、男は驚いて星の方を見た。紫電と星は物陰に隠れている不穏な気配を感じ取っていた。

「これで隠した積もりか？全然なつてないな」

紫電がそう嘲笑いながら言った。

「うるせえ！お前ら、出て来い！」

紫電の言葉と嘲笑いに喚き散らすと、男は辺りに呼びかけた。

すると脇の道からぞろぞろと男の仲間たちが出てきた。手にはボロボロの剣を持っている者もいれば、鍬や鎌を持っている者もいた。一目で農民崩れだと分かった。

それらがざっと、二、三十人ぐらい出てきたのを見て、紫電は呟いた。

「物陰からワラワラと……まるで油虫　所謂ゴキブリ　だな」

紫電がそう言ったとたん、女性陣の嫌な顔をした。

「……ああ、アレですか」

「確かに、言িয়েて妙ですね。一匹見かけたら二十匹以上はいるところなんかは特に」

「いや、こやつらと一緒にしたら油虫に悪いだろう。油虫は害虫だ

が、それでも人を襲ったりはしない」

（おお。星も結構ひどいこと言うな。まあ、同意するがな）

そんな油虫以下と言われた、男たちは、全員怒りに震えており、今にも襲い掛かってきそうだ。

「てめえら……やっちなえ！」

その大柄の男の言葉を合図に、全員が一斉に襲い掛かってきた。

「風、稟は後ろに下がってろ。星、暴れて良いが、出来るだけ殺さないようにな」

「心得ている！」

そう言つて、星は男たちに向かって駆け出した。そして、瞬く間に両方の距離は詰まり、ぶつかる。

「はああああああ……！」

星は、気合と共に一閃、槍を大きく横に振るつた。

ブォン！！

「くくくくはあああ……！」

その槍が薙いだ瞬間、星に押し寄せていた男たちが吹き飛んだ。

「はいはいはい……！！！」

そうやって、星は男たちの勢いを止めると、神速の突きを繰り出した。

ヒュンヒュンヒュンヒュン！！

「ぐっ！」

「ぎゃっ！」

「ぐはっ！」

「ぐわっ！」

その切っ先は、肩や膝、太腿を突き刺し、次々と戦闘不能にしている。その槍捌きを見れば、まさに趙雲子龍の名に恥じない者だと確信できた。

他の男たちはそれを見て、敵わないと思ったのか、数人が星の横を通り抜けて、紫電たちの方に向かっていった。

紫電が立ちほだかり、その手に刀を持っていると分かって、足を止めるが、その刀『じゅうごう黄竜』の刀身が細身だと気づき、力技でならいけると思ったのか、そのまま紫電に襲い掛かった。

そして、最初に紫電に近づいた男が、紫電に向け、剣を勢い良く振り下ろした。

しかし……………

キン！

その音と共に、男の剣は弾かれた。男は、そのことに驚き、手を止めてしまった

そして、紫電は、その男の腹の辺りに『黄竜』を持っている手とは逆の手 左手の平を当てる。すると……

「れっぱしやう烈破掌！！」

キュイイイン………バアアアアン！！

そう紫電が叫んだと同時に、彼の手の平で奇妙な音と共に何かが弾け、男は後ろに吹き飛ばされた。

それを見た、周りの男たちが再び足を止めた。

「こっから先は行かせねえよ」

紫電がそう言うと同時に消えたと思った瞬間、背後から声が聞こえた。

「次からは、心を入れ替えて、こんなことはやめるんだな」

その声が聞こえた瞬間、男たちにもものすごい衝撃が襲い、男たちは気を失った。

「ふう。やれやれ。これで終わりかな？」

紫電がそう言っ、周りを見渡すと、辺りには倒れた男たちで埋め尽くされていた。

紫電と星は、誰一人殺すことなく戦った。その為、周りからは呻き声が多く聞こえる。

「紫電殿。こちら片付いたぞ」

「ご苦労さん。怪我は……無さそうだな」

見た目的に怪我は無さそうなので、途中で訂正した。

「うむ。平気だ。それより、紫電殿はかなりの腕前だな」

「そりやどうも。星も、流石と言つべきか、大した槍捌きだったぞ」
そう言っ、お互いに先程の戦いを褒める。

そして、ふと倒れている男たちを見渡し、あの男がいないことに気付いた。

「そついえば、あのおっさんは？」

「あの男なら、仲間が全員やられたのを見て逃げて行きましたよ」

「一目散に逃げちゃいましたね」

危険がなくなっただけからか、二人が紫電と星に近づいて行った。

「ところで、紫電殿。さっきのアレは何だったのですか？」

「……アレ？」

稟の質問に少しわからぬのか疑問で返す紫電。

「ほら、奇妙な音と共に男を吹き飛ばしたじゃないですか？」

「ああ。アレか」

風に言われ、先程使った技『烈破掌』のことだと理解したようだ。

「アレは、単に手の平に氣の塊を作って、それを弾けさせただけだが」

その紫電の言葉に、少し驚く三人。

「ほう。紫電殿は氣が扱えるのか……」

星は感心したように呟く。

「ん？まあな。それなりに特訓したからな。星だって、特訓次第では扱えることが出来ると思うぞ。お前は、それなりの資質を持っている」

星はその言葉に再度驚くも、すぐに嬉しそうな顔をした。

「それはそれは。では、私ももっと精進せねばな」

そう言つて、自身の可能性を確認でき、星はとても嬉しそつだった。

「それよりも、どうします、紫電殿？太守に報告しますか？」

「いや、しなくても良いだろう……つていうか、しても無駄だ。きつと」

「どうしてですか？」

稟の質問に、紫電が答えると、その答えが不思議に思つたのか、風が尋ねて来た。

「だつて、考えても見ろよ。俺たちがこんなに暴れても警備兵が一人も来ねえじゃねえか」

そう言われて、気付いたのか、三人は辺りを再度見渡した。

「確かに、夜とはいえこれだけのことが起こっているのに誰も来る気配がないですね」

そう言つて、稟は紫電の言つた事に納得した。

「俺が思うに、ここの太守はあまり仕事熱心ではないな」

「でも、あの男がまた襲つてくるかもですよ？」

「その心配はないだろう。仲間を見捨てて自分だけ逃げるような奴に、人が付いてくはずもねえんだから。だから、ほつといても特に害はねえだろ」

「私もそう思う。そう言うわけだから。夜ももう遅い時間になってしまったし、宿屋に戻ることを、私は提案するが？」

「そうだな。俺も宿屋に戻るわ」

そう言つて、紫電は自分の宿屋のほうに体を向けるが、すぐに星のほうに振り向き、

「それじゃ、三人とも。短い間だったが、楽しかったぜ」

「我らも、中々良い話を聞かせてもらった」

「そうですね。紫電殿の考え方などはとても興味深かったです」

「また、機会があれば、色んな話をしましょうね」

「ああ。縁があつたら、またな」

「では、紫電殿お元気で」

そう言つて、お互いに手を振つて、星たちと別れ、紫電は帰路に着いた。

宿屋へ向かっている途中、紫電は空を見上げていた。

「星が綺麗だな。明日は晴れるかな？」

そう呟いて、視線を戻し、宿屋に向かっていった。

第八話（後書き）

以上です。

どうだったでしょうか？

この時期ならこの三人組とも出会ったろうと思った結果こうなりました（笑）

そして、次回はあの老sげふげふん……お姉さま方のお二人と、そのうちの一人の弟子をしている少女との出会いです。

ここまで言ったら分かりますかね？（汗）

とりあえず、楽しみにしていってください。

さて、ここからは言い訳タイムです……。

遅くなった理由は、教習所に通っていた事にあります。

2月頭に入所手続きをしたのですが……正式に入所したのは20日でした。

そこからは、学科や技能の教習を詰め込めるだけ詰め込み、3月23日に卒業いたしました。

そして、24に一回目の本免許学科試験で2点足らずで落ちてしまいましたが、昨日、合格いたしました。やっと免許を手に入れることができました。

しかし、教習中に詰め込みすぎたのか、書きはしていたものの、疲れのせいで中々話がまとまりませんでした。

そして、今日やっと最後まで書き上げて、追加した次第です。

まあ、こんな感じの理由で、更新が遅れました。

その辺り、どうかご了承ください。

では、また次回で！

第九話（前書き）

やっとできたので更新します。

今回は、巴蜀での話です。

どんな出会いがあるのか？

では、どうぞ……

第九話

蒼華 Side

私は今、洛陽にある宮殿の中庭の東屋で、お茶を飲んでいた。

「……はあ………」

そう溜息を吐きながら、私はお茶を啜った。

と、そこに……

「劉宏様……ここにいらっしやいましたか」

背後から声をかけられたので、振り向くと、赤い髪の女性が立っていた。

「火穂^{かほ}……もう。二人っきりの時は、真名で良いつて言ってるじゃない」

そう言つて、赤い髪の女性 姓を何^か、名を進^{しん}、字を遂高^{すいこう}、真名を火穂に真名を呼ぶように言つ。

「いえ、どこで誰が聞いているか分かりませんので」

火穂はそう言つて、真名を呼ぶことを拒否する。

「あら、そう」

前々から言っていることだが、いつも呼んでくれないので、私は適当に流す。

「なら、お茶を飲むのに付き合ってくれない？ 一人で暇してたのよねえ」

私はそう言っ、火穂をお茶に誘い、座るよう促す。

「は。では、お付き合いさせていただきます」

火穂はそう言っ、私の対面に座る。

そして、私は座った火穂にお茶の入った器を手渡す。

火穂はそれを手に取り、お茶を啜り始めた。

そうして、しばらく。お茶を啜る音と、風の音しか聞こえなくなつた。

「紫電達を呼び戻すための準備…… どれだけ進んでる？」

そう言っ、私は火穂に今現在、彼女が行っていることの進行度を聞く。

その言葉を聞いて、火穂は一度お茶を啜ると、話し始めた。

「一応、紫電様を迎えるための兵の準備は整いつつあります。また、その報を紫電様達に伝える準備も整っております」

「そう。あとは、紫電を呼び戻さなければならぬほどの出来事が

起これば……」

「はい。紫電様を正式にこの洛陽に呼び戻すことが出来ます」

「そうね。それまで、火穂には苦勞かけるけど……」

「そんなこと。紫電様のためならば、どんなことでもやってみせます」

「ふふ。そう。ありがとう」

「いえ」

そう言つて、お互いの顔を見て笑いあふ。

何進こと火穂は以前、紫電率いる『天龍』に所属していた武将四人の内の一人である。

彼女は最初、私の夫二人の内の一人の何氏のおこぼれで、將軍となつた。

その頃の彼女は、とても高慢で、いい加減な人物だったが、軍部で紫電に遭い、彼の武や人柄に惹かれ、改心していった。

そして、『天龍』が発足した時、自身から所属を希望し、紫電に認められ、『天龍』に所属することになった。

しかし、六年前の張讓により紫電が謀反の疑いをかけられ、紫電が

洛陽から追放され、『天龍』も解散させられた事件で、彼女だけが洛陽に残され、張讓の策略により、大將軍の地位に就かされた。

そして、現在、外部に能無しという偽の顔と張讓の傀儡という演技をしながら、紫電を呼び戻すための策を、私や、紫電と交流があった私の夫の二人、何進の弟こと何氏と王美人と協力し、張讓に気取られないように着々と準備を整えていた。

そして、残るは、紫電を呼び戻すに相応しい出来事……漢の危機に関する出来事が起これば、呼び戻すことが出来るところまで、準備は進んでいるのだった。

蒼華 Side Out

紫電 Side

そうやって、劉宏こと蒼華と何進こと火穂が、二人でお茶をしている時。

紫電は、益州が巴郡の永安という町に来ていた。

「ここが永安か。ここは確か、嚴顔が治めてるって話だったな」

そう言っつて、先程手に入れた情報を確認しつつ、町並みを見て回っていた。

「……………嚴顔か……………史実では、結構な歳だった筈だが…この世界ではどうなのかね？」

そう言つて、これまで出会つたり、見たりした、三国志で有名な武将達を思い出していく。

「馬超の親である馬騰が、あんなに若かつたから、もしかしたら、思つてるよりも若いかな……」

そう言いながら、色々考えつつ、色んな店を冷やかしながら歩いてた。

すると、前の方に二人の妙齡の女性と一人の少女が困つた顔で立っていた。

一人は、青味がかつた銀色の髪に、浴衣の胸元を大きく開き、少し着崩した様な感じの服装で、腰に酒が入っていそうな壺をぶら下げている。

もう一人は、紫色の髪に、大胆なほど大きくスリットが入っていて、胸元の開いた服装を着ており、母性あふれる顔立ちをしている。

最後の一人は、黒い髪に白いメッシュの入った前髪で、黒を基調とした服に、ホットパンツをはいている。

さらに、その三人の特徴に、「胸が大きくて美人」も追加される。

紫電は、そんな三人が困っている顔をしているのに気付き、なんとなくほおつて置けなくなり、その三人に近づいて行つた。

紫電 Side Out

??? Side

「どうかなさったんですか？」

不意に掛けられた声に、私は振り返った。

其処にいたのは、私の髪の色より深い紫髪青年だった。

表情や声音から、軟派ではないことがわかる。

「何だ、貴様は？」

「失礼。俺は旅をしている者で、名は雷霸と言う。なにやらお困りのようで……良ければ、お手伝い致しますが？」

そどこか高貴な雰囲気を漂わせた感じの声で、私たちの手伝いを申し出てくれた。

「……………ありがとうございます。実は

」

私は、少し悩んだ後、この青年 雷霸さんを信じることにし、隣で見っていた友 姓を蔵^{げん}、名を顔^{がん}、真名を桔梗^{ききょう}に目線を送り、彼女も異論がないことを確認した後、雷霸さんに事情を話した。

??? Side Out

紫電 Side

紫電は、三人に話しかけ事情を聞いた。

三人の名前が、黄忠^{いせいちゅう}、嚴顔^{げんがん}、魏延^{ぎえん}と聞き、内心すごく驚いた。

以前、馬騰と会った時も驚いたが、それでも黄忠、嚴顔の二人がこんな妙齡な美女とは思わなかったからである。

（それにこの時期に、こんなところに黄忠と魏延が居るとはな………）

色々と疑問はあるが、それはさておき、三人の話を聞くと、黄忠の娘さんが少し目を放した隙にどこかに行ってしまうて、三人で探したが見つからないと言うのだ。

ふと見ると、紫髪の女性 黄忠の手に赤紫色のリボンが握られて
いることに気付いた。

「それは？」

「娘が愛用している髪留めですわ」

愛用していると言う部分に少し考え、紫電は何か閃いたようだ。

「愛用していると言うことは、長い間身に着けていたということですよね？」

「そうじゃな。それがどうかしたのか？」

不思議そうに問う銀髪の女性　　敵顔の言葉に意味深な笑みを向けた後、黄忠に向き直った。

「それを少し貸していただけないでしょうか？」

「？構いませんが……どうするのです？」

「娘さんが愛用していたというこの髪留めに付着している氣を追います」

それを聞いて三人は少し驚いたような顔をしたが、すぐに黄忠は紫電にその髪留めを手渡した。

紫電は、それを受け取ると、己の氣を集中し、その髪留めについている黄忠さんの娘さんの氣を探り出した。

紫電　Side Out

敵顔　Side

儂は自分の目を疑った。

この目の前の青年が今やっているのは、己の氣で、璃々の微弱な氣を探っていると言うのだ。

その証拠に、璃々の髪留めを持っている手に紫色の氣が集まっている。

隣の親友　名を黄忠、字を漢升^{かんしょう}、真名を紫苑^{しおん}も、驚いている。

儂の弟子こと名を魏延^{ぶんちやう}、字を文長^{ぶんちやう}、真名を焰耶^{えんや}は、氣というものが珍しいのか、覗き込むように見ているが、あんまりわかつてはいないようだ。

しかし、儂らにはわかる。

こんなこと、並みの氣の使い手では到底出来ない。

暫し時間がたった後、彼が閉じていた目を開けた。

「この町には、居ないようです。きっと、あっちの林に居ると思われます（実際、その林から氣が途切れてるしな）」

そういつて、青年　雷覇は、歩き出した。

「お、おい！待てよ！」

驚いて固まっていた儂と紫苑は、その焰耶の声で我に返り、その声につられて、儂らも慌てて付いて行った。

巖顔　Side Out

紫電　Side

「なあ、ホントにこんなところに居るのか？」

「ご心配なく、だんだん近づいているから」

魏延の疑問に答えながらも、黄忠の娘さんの氣を追う紫電。

微弱すぎて、時々見失いそうにもなったが、何とか追って行く。

と、その時、

「た、たすけて〜!」

そういった子供の叫び声が聞こえた。

四人は、その声が尋常じゃないことを悟り、急いでその叫び声が聞こえた方向に向かった。

そして、しばらく走った紫電たちの目に入ってきたのは、今にも虎に襲われそうな少女の姿だった。

「璃々!」^{りり}

黄忠がそんな様子の自分の娘を見て悲痛な声を上げた。

「くそっ!こうなれば。ワタシが……………な!」

「!」

魏延がそう言った瞬間、三人の横から紫の風が飛び出して行った。良く見るとものすごい速度で走って行く紫電の姿だった。

そして、三人は見逃さなかった。

彼の通って行った場所に紫色の雷が残っていたことに。

そして、紫電は、

（あの虎は、それなりに大きい。と、言うことはそれなりの重さがあるか………なら、アレが良いか）

走りながら、そう考え、少女と虎の元に急いだ。

そして、虎が少女に飛びかかろうとした瞬間、

「獅子戦吼ししせんこう!!」

ドガアアアアン!!

紫電の突き出した両手の平から獅子の顔の形をしたものすごい氣が飛び出し、虎を吹き飛ばした。

「大丈夫か？」

そう言って、少女に近寄った。

「……え？う、うん……」

少女は、目の前で起こった出来事に驚き、しばらくぼうつとしていたが、紫電に話しかけられ、我に返った。

そして、紫電の走ってきた方から黄忠、嚴顔、魏延が走ってきた。

「璃々!!」

「お母さん!!」

そして、黄忠は自分の娘に近寄り、抱きつき、無事なことを確認した。

「璃々……璃々!! ああ、良かった……」

「ひつく……おかあさん……ご、ごめん……なさい……ふええええん! 怖かったのぉ!!」

そうして、二人が抱き合っている間にも、虎は起き上がり、警戒しながらこちらを伺っていた。

「まだ、やるか?」

紫電がそう言った瞬間、彼からものすごい殺気と覇気が噴出した。

そして、それを感じ取った虎と紫電以外の四人は、彼の背に龍の幻を見た。

「まだ、やるってんなら……」

そう言って、紫電はしばらく間を置き、

「この俺が相手になる!!」

ゴウ！！

彼がそう叫んだ瞬間、更なる氣の圧力が加わり、虎は一目散にそこから逃げさって行った。

そうして、しばらく沈黙が続いたが、紫電が溜息を吐き、黄忠たちの方に向き直った。

「娘さんの方は大丈夫ですか？」

紫電にそう聞かれ、その声で黄忠たちは我に返り、紫電に答えた。

「はい。あなたのおかげで、無事ですわ」

「そうですか。それは良かった。……それじゃ、俺はこれで」

そう言つて、紫電はその場から立ち去ろうとしたが、

「どこに行かれる？雷霸……いや」

「……『紫雷の龍』殿」

と言う、敵顔と黄忠の声に足を止めた。

魏延は、『紫雷の龍』という名を知らないので、頭に疑問符を浮かべ、頭を傾けていた。

「あらら。気付かれてましたか」

そう言つて、苦笑いのまま黄忠たちの方に向き直る。

「とりあえず、戻りましょうか。また、いつあの虎が来るか分からないので」

そう言つて、再び歩き出した紫電。

その後ろに、黄忠たちも続く。

そして、その途中、紫電は彼女たちに問うた。

「なぜ、俺が『紫雷の龍』だと？」

「まず、「彼の者が通つた後には、紫雷が残る」……これが一つじやな。先程、虎に襲われていた璃々の方に走つて行つた時、その後にはまさに言葉の通り、紫色の雷が残つておつた」

紫電の質問に、まず、厳顔が走つて行く時の状況を説明した。

「そして、次に虎に向き合つた時、少なくとも私は、あなたの背に龍を見ました」

黄忠がそう言つて、厳顔と魏延の顔を見ると、二人ともその言葉に頷いた。

「それに貴殿の名は、大陸全土に響き渡っていたからの」

「だから、少なくともこの場では、私と桔梗 厳顔の耳には届いておりましたわ」

二人の言葉に紫電はなるほどと思う。

そして、思った。自分の名には、自分が思っている以上の重さがまだ残っていたのだと。

「そこまで、分かっているのなら、隠している必要はないですね。そうです。俺の本名は、以前『紫雷の龍』と呼ばれていた、姓を雷、名を魔、字を霸龍と言います」

そう言って、四人に本当の名前を打ち明ける紫電。

「そんな仰々しいしゃべり方をせんでも良い。実際、御主は儂よりも地位は上……というか、義理とはいえ、皇帝陛下の弟君じやからの」

「それはそうですけど……」

厳顔の言葉に紫電は、黄忠の方を見るが、黄忠も厳顔の言葉には賛成のようで、笑顔でこちらを見ていた。

「わかった。これでいいか？」

そうして、諦めたのか、紫電は、そう言葉の調子を変えた。

「うむ。それで良い」

「ええ。何か自然な感じになりましたわ」

そう言って、二人は笑顔で答えた。

と、ここで、魏延は先程から疑問に思っていたことを口にした。

「あ、あの、桔梗様。『紫雷の龍』とは一体何なのですか？」

その言葉に、厳顔は魏延の方を向き、少し考えて「ああ」と一つ手を叩いた。

「そう言えば、焰耶は、まだその頃は小さかったの。なら、話したほうが良いのう」

そうして、厳顔が魏延に、昔、『紫雷の龍』がどのようなことをしたのか、話し始めた。

紫電は、それを聞いている間、昔のことを思い出していた。

しばらくして、厳顔の魏延に対する『紫雷の龍』の話が終わり、一行も町に着いた。

そして、話を聞いた魏延は、ふと疑問に思ったことを口にした。

「桔梗様。そうになると、こいつは漢の大犯罪者になるのでは？」

魏延がそう言うと、厳顔と黄忠は、少し難しい顔になった。

「形式上ではそうだが、実際はどうなのか？のう、雷魔よ」

そう言って、紫電に話をふる。

紫電は、しばらく考えた後、

「……とりあえず、俺は、その時、張譲に嵌められたと思った。なぜなら、その事件の以前から、張譲は、俺を洛陽から追放しようと色々やってたからな」

その言葉を、始まりとし、その時に何があつたのかを厳顔たちに話し始めた。

そして、その紫電の話が終わった時、話が分かっていない璃々と紫電を除いた三人は難しい顔をしていた。

「まさか、洛陽でそのようなことが起こっていたとはのう」

「ええ。流石の私も驚きましたわ」

「……………雷魔殿。そんなこととも知らず、先程は失礼な発言をした。すまん」

そう言って、魏延は頭を下げた。

「いって。実際、形式上だが、俺はある意味大犯罪者になってるしな」

紫電は、その謝罪を軽く流し、微笑みながらそう言った。

「雷魔殿よ……洛陽には、戻らないのか？ここで言うのもなんじやが。今の漢は廃れておる。そろそろ貴殿の力が必要になるのじゃあるまいか？」

「……俺は、今はまだ戻る時期ではないと思っている」

紫電のその言葉に、厳顔と黄忠は「え？」と言う顔をする。

「だが、いずれ絶対戻る。その為にも、今こうして各地を回って、色んな情報を手に入れなければならない。だから、諸国を旅して、色んな情報を手に入れ、洛陽に戻ったときに、それが役に立つようにする。それが今の俺の旅の目的だ。そして、時が来たとき。『紫雷の龍』は再び天へと舞い上がる」

「「！？」」

「っ……！？」

一瞬、最後のその力強い言葉と共に発せられた覇気に黄忠と厳顔の二人は見惚れ、魏延は、圧倒された。

特に黄忠と厳顔は、まるで女として強い雄に魅せられる、と言う様な本能的なモノが働いた感じであった。

そして、紫電はそれを言い終わると三人に振り向き、微笑んだ。

「ま、そんな気難しい話は、ここまでにしておこう。さて、そろそ

る陽も傾いてきたから、俺は宿に行くことにするよ。また、縁があれば会おう」

そう言つて、踵を返す紫電に、黄忠と嚴顔の二人が待ったを掛けた。

「まだ、娘を助けていただいたお礼をしておりますわ。ありがとうございます。うございました。そして、次から私のことは紫苑しおんとお呼び下さい」

「御主ほどに、立派な御仁は中々あらん。それに儂の親友の娘を救うてくれたし、今度会つたら儂のことも桔梗ききようと呼ぶが良い」

「……雷魔殿。先程の無礼の侘びといつては何だが、ワタシのこと、今度会つたら焰耶えんやと呼んでくれ」

三人のその言葉に少々驚きながらも、紫電は微笑みこつ言つた。

「わかつた。三人の真名預からせてもらつ。んじゃ、俺のことも紫電と呼んでくれ。それじゃ、また会おう。紫苑、桔梗、焰耶」

「はい。また、会いましょう。紫電さん」

「うむ。その時は、一緒に酒でも飲もうぞ」

「次に会つた時は、ワタシと手合わせ願いたい」

「バイバイ！お兄ちゃん！！」

そう言つて、四人は自分の帰る場所へ。

そして、紫電は宿に向け歩き出した。

焰耶 Side

去り行く紫電殿の背中を見送った後、ワタシは先程から震えて止まない自身の手を見つめた。

「あら？どうしたの、焰耶ちゃん？」

「ん？どうしたんじゃ、焰耶」

その桔梗様と紫苑様の言葉にハッと我に返り、ワタシは二人に思っていたことを口にした。

「…………桔梗様。ワタシは、自分の武は接近戦に持ち込めば、桔梗様ともいい勝負が出来ると思っていました。少なくとも力だけなら上回っていると思っていました。自分の武は、ある程度上位に入っていると自負していました」

そう言つて、私は目を瞑り、先程の紫電殿の言葉を聞いた場面を出す。

『そして、時が来たとき。『紫雷の龍』は再び天へと舞い上がる』

その時の紫電殿の、姿が、言葉が、覇気が、ワタシの脳裏に焼きついて離れなかった。

「初めてでした。覇気だけで、言葉だけで、姿だけで、こんなにも

気圧されたのは。自分との実力の差を思い知らされたのは……………」

「それで？」

「……………」

その言葉に、ワタシは少し考え、心の奥底から「自分はどうしたいのか？」を引き出した。

「今のワタシでは、足元にも及ばない。それどころか、目の前にすら立てない。だから、ワタシはもっと上を目指すために、もっと強くなるうと思います。いつか、紫電殿を超えられるぐらいに強く！」

そう言つて、ワタシは拳を握り、顔を上げた。

焰耶 Side Out

Another Side

（ほう！）

（まあ！）

桔梗と紫苑は、顔を上げた焰耶の目を見て、嬉しくなった。

最近の焰耶は、天狗になっているというか、自分の武に過信しすぎている節がちらほら見受けられた。

桔梗は、自分では治りそうに無さそうだったため、紫苑あたりにし
ばき倒してもらおうかと思っていたくらいだ。

だが、今回、紫電を見ただけで、こんなにも良い方向になってしま
うとは思ってもみなかった。

「（まったく、紫電殿には感謝してもしきれんのう）そうか」

「はい！」

「良い顔になったわね。焰耶ちゃん」

焰耶の変化に、紫苑と桔梗の二人はとても嬉しそうであった。

「ところで、焰耶よ。そう言えば先程、儂に接近戦ならば勝て
る等とほざいておったな？」

「……………え？」

少しドスの利いた声の桔梗に、焰耶はそんな恐れ多いことを言っ
たかと思つて、先程自分の言つた言葉を思い出す。

『ワタシは、自分の武は接近戦に持ち込めば、桔梗様ともいい勝負
が出来ると思つていました。少なくとも力だけなら上回っている
と思つていました。』

「（……………しまった……………勢い余つて、言つてしまつていた……………しかも、
かなりはつきりと……………あ、あのですね、桔梗様。あれは、なんと
言つか、言葉の綾と言つやつでして……………」

冷や汗をかき、しどろもどろになりながら、焰耶はその場を取り繕おうとしている。

しかし……

「ふふふ。そんな謙遜するな。帰ったらしつかり、みっちりと儂がなぐりあい接近戦を教えてやるからの」

（い、今、桔梗様が言った「接近戦」が、「殴り合い」に聞こえたのは気のせいだろうか？）

焰耶の努力むなしく、桔梗は目が笑っていない笑顔で、焰耶の言葉をバツサリと切り捨てた。

考えてみて欲しい。自分の武器『鈍砕骨』どんさいこつ並みの重さの武器を持ち、自分より軽やかに動き回り、武器に備え付けられている杭を打ち出し、それから生まれる反動に、連射しても耐えられる、握力、腕力、それに脚力もあり、長年培ってきた戦の勘もある桔梗と、最近までほとんど戦に出たことがなかった、ひよっこの焰耶が戦って勝てるのかと。

答えは、断じて否だ。

「い、いえ。しばらくは自分なりの鍛え方をしてから教わろうかなあ、と……」

だから、大量の汗をかきつつも、表面上は遠慮がちに、内心では必死になって断ろうとした。

「遠慮するな。そこら辺も踏まえて、儂と殴り合おうではないか」

だが、やはり容赦なくバツサリと切り捨てられた。

しかも、焰耶には、副音声で全く違う次の言葉に聞こえていた。

「うるさい。つべこべ言わずに殴らせろ」と。

「あ、あはははは………はい………（ワタシは、明日の陽を拝めるだろうか？）」

「ねえ、おかあさん。焰耶お姉ちゃん。真っ白になってるよ？」

「あらあら。焰耶ちゃんも大変ね」

「ふふん。楽しみじやのう」

桔梗の言葉を聞いた焰耶は真っ白になっており。

そんな焰耶を見て、璃々は不思議そうな目をむけ、紫苑は何か楽しそうであった。

このしばらく後、城に戻ってすぐに、焰耶は桔梗に、まるでボロ雑巾のようになるまで、しばき倒されていたのを、偶々、近くを通った兵に目撃されていた。

A n o t h e r S i d e O u t

紫電 S i d e

紫電は、紫苑、桔梗、焰耶の三人と別れた後、宿に入り、今後の道筋を決めていた。

（次は……ここからだ、成都と荊州という道があるが、成都はこの町の人の話によると、予想通りみたいだから……なら、荊州の方へ行くか）

そう考え、しばらく悩んだ後、納得がいったのか一つ頷き、地図を丸め、荷物の中に入れた。

そして、寝台に入り、目を閉じ、夢の中へと旅立っていった。

翌日、陽も高くなった頃、紫電は、永安の町から出て、指笛で白竜を呼び、乗った後、そのまま荊州への道のりを進んでいった。

第九話（後書き）

どうだったでしょうか？

今回は、熟じ（トストス）（汗）………み、妙齡な二人である紫苑、桔梗とブラックジャツ娘（？）（笑）と言われている焰耶との出会いでした。

また、洛陽でも少し動き始めました。

これからどうなっていくのかは、これからの話の中で……。

さて、次回は南陽での話になります。

どうなるのか？次回もお楽しみに。

オリキャラ紹介ー（前書き）

続いて、オリキャラの紹介です。

今回は、何進こと火穂と劉宏こと蒼華の紹介です。

では、どうぞ。

オリキャラ紹介ー

姓：何^か
名：進^{しん}
字：遂高^{すいこう}
真名：火穂^{かほ}
性別：女
年齢：26歳
身長：169cm
体重：52kg
武器：鷹翼^{おうえき}（長剣）

能力値：武力5、統率力4、知力2、政治2、魅力5

天龍隊が発足する少し前に、弟の可氏のお零れで軍に入り、將軍となった女性。その後、官位を上げていくが、その軍部で、紫電と出会い、彼の人柄と実力を目の当たりにし、彼の下に付き、『天龍』に所属することになった。

しかし、その二年後に起きた事件で、『天龍』が解散した後、十常侍の策略により、大將軍の地位に就く。『天龍』では、主に前衛を担当していた。

現在は、劉宏こと蒼華の助けの下、色々手をまわして、紫電を帰還させる準備を行っている。

容姿

ある人物には劣るものの、それでも相当な美人で、黙っていれば相当モテる。しかし、強気で勝気な性格が災いして、言い寄る男はそうそういない。あえて言うなら、彼女の本質を見抜いている紫電ぐらいである。髪は、黒みがかった赤色で、ウェーブがかかっている。

る。長さは肩にかかるぐらいの長さである。目は黒い。
体型は、グラマラスな体型である。

性格

周りには、傲慢で我侔という風に思われているが。これは、紫電が復帰するまでの偽りの顔として使っている。本来は、強気で勝気だが、心優しく、律儀で、何事にも一生懸命取り掛かることのできる性格である。

服装・装備

赤を基調とした物を着、下は現代で言うスカートの下にスパッツをはいたような格好をしている。

戦闘では、その服装の上から胴当てと籠手、それに足甲を装備して、長剣『鷹翼』を使って戦う。また、かなりの武を持ち、一人で何百人もの敵を相手にするほどの実力を持っている。その時の姿から『炎鬼』^{えんき}と呼ばれる。武だけでは、『天龍』では二番目の強さである。

・陣形

蜂矢陣、偃月陣、横陣

・奥義

LEVEL 1・何進の偽顔

計略、敵士気 -

敵が認知せし自身の顔は、全てにおいて偽計なり。

LEVEL 2・豪炎烈焦斬

突撃、火刑、味方攻撃 +

彼の一撃は、全ての敵を根絶やしにするほどの威力を持つ。

LEVEL 3・炎鬼の突撃

突撃、火刑、味方士気 +、味方攻撃 +、敵士気 -

炎鬼による『天龍』火の隊の突撃。この突撃は、火の如く全て飲み込む。

姓：劉りゅう

名：宏こう

字：なし

真名：蒼華そうか

性別：女

年齢：33歳

身長：149cm

体重：45kg

能力値：武力3、統率力4、知力3、政治3、魅力4

漢王朝第十二代皇帝。

紫電が家族共々、巨熊に襲われたときに出会った女性。恋姫の世で、一番初めに会った、史実での有名人物。紫電達が巨熊に襲われた日に、熊退治に近く村に来ていた。そして、そこで熊と戦い、逃してしまい、紫電の両親が亡くなってしまふ事になった。そのことに負い目を感じ、まだ、幼かった紫電を義姉弟として迎え入れ、一緒に生活することにした。その時の年齢は、十五歳。

その後、紫電に本当の姉弟のように接し、彼が部隊を持つとき等に、自身が手助けをしたりしている。

しかし、六年前の事件の時、張議に丸め込まれたが、一応、反論

し、紫電の計を軽くした。しかし、結局、紫電を洛陽から追い出すことになってしまう。この時に自身の力不足を痛感し、色々後悔をした。

だが現在、何進こと火穂と、二人の夫と共に、紫電を洛陽に帰還させるための計画を実行している。

容姿

綺麗な部類の顔立ちをしており、その中に、少し子供っぽさもある。髪は長髪でストレート、色は濃い桃色である。
体型は、スレンダーな感じ。

性格

明るく、上品だが無邪気さも備えており、動くことが大好きである。実際、皇帝になる前は、色んなところに遊びに言ったりしていた。

服装

昔、皇帝になる前は、動きやすい服装だったが、現在は、煌びやかな服を着て、皇帝の服装になっている。

オリキャラ紹介ー（後書き）

以上です。

天龍の仲間の四人の武将の内の一人は、何進でした。

これからも仲間のオリキャラを紹介していきます。

楽しみにしていってください。

では、また次回。

第十話（前書き）

できましたので、投稿いたします。

今回は、南陽でのお話です。

ここでは、どんな出会いがあるのか？

では、どうぞ。

第十話

けいしゅなんよう
荊州南陽。

ここは、現在袁術が治めている領土である。

そして、紫電は現在、この南陽の町に着き、宿屋を取って、町並みを見て回っていた。

例により、白竜は町の外で待機している。

「ここが、袁術の治めている南陽か………暴政とまではいかないが、ちゃんとした政治を行っていいそうには見えないな………モグモグ」

そう言いながら、あまり賑わっているとは言い難い町並みを見ながら、先程出店で買った肉まんを頬張っていた。

そして、しばらくの間、旅人として町の人から袁術の評判などを聞きまわった。

「やはり、袁術の評判は高くないな。しかし、やはり外史だからなのか、もうすでに、孫堅が死亡していて、孫策が袁術の客将になっているとはな」

そう言っつて、先程町の人々から得た情報を整理していた。

「しかし、美羽のやつ、麗羽共々、あれだけ学問を教えてやったの

に全然活かせてないじゃないか」

そう言っつて、昔のことを思い出しつつ、文句言っ紫電。

彼は、昔、両袁家の親に頼まれ、袁術こと美羽と袁紹えんしょうこと麗羽に、一時的だが、『天龍』の仲間と一緒に、学問を教えた時期があった。その時に、美羽と麗羽の両方から、真名を許してもらっていたりしていた。

「やはり、教えた期間が短すぎたか？」

そうして、教え子のだらしなさに、色々考えつつ、町を回っている
と……

「……なの……うう……ぐす」

震える声と共に、金髪の少女が前の方から歩いてくるのが見えた。

「あれは……美羽じゃないか。なんで、町に出てきたんだ？」

その少女は美羽だった。

町の民によると、美羽は、あまり街に出てこないらしい。なので、その情報のこともあり、不思議に思い、紫電は美羽に近づいていた。

「なののお……どこじゃあ……？」

その間にも、誰か 多分側近 の名前を呼びながら、右往左往して、美羽は泣きそうになっていた。

「おい。どうしたんだ？」

「ぴいつ！？」

突然話しかけられたことに驚いたのか、変な声を上げこちらを見上げてくる。

「な、何じゃお前は！？お主の様なものが……わら……わ……に……」

そう最初は強がった風に言う美羽だったが、紫電だと気付いたのか、最後の方は言葉がなくなっていた。

「よう。美羽。元気だったか？」

「……せ……先生……？」

紫電は、片手を挙げ、軽い挨拶をした。美羽の方は、まだ驚いているのか、未だに呆然としている。

「どうしたんだ、美羽？町の人の話だと、余り城外には出てこないって話だった……」

ドンー！

「……つと」

紫電が言い終わる前に、美羽が紫電にぶつかって来た。

「先生！先生！！ホントに先生じゃな！？幻ではないのじゃな！？」

そう言つて、泣き叫ぶ美羽を少し驚いた顔で見下ろす紫電。

それを聞いて、周りの人たちが「なんだ？なんだ？」と集まり始めた。

「ああ。そうだよ。とりあえず、落ち着けるとここで話そうか」

そう言つて、美羽の頭を撫でつつ、移動することを促す紫電。美羽は、その言葉に一度頷き、紫電に手を引かれ、落ち着いて話の出来る場所へ移動した。

それから、少しして、ちょうど良い茶店があつたので、そこに入つてお茶を飲み、落ち着いたところで話をすることにした。

「……………で、あそこで何やってたんだ？」

「そ、それは……………」

紫電は、美羽がなぜあんなところで泣きそうになっていたのか気になり、彼女に聞いたが、彼女の返事は、ハッキリしたものではなかった。

ついでに言えば、目がものすごく泳いでいる。

「……………側近の誰かと出かけたは良いが、美羽自身が何かに惹かれ、その人から離れてしまい、余り城外に出たことのない美羽は、道に迷ってしまい、そして、そのことに気付き、側近の人を呼んだが、誰も来ないので、泣きそうになったところに俺が声をかけた……そんな感じか？」

「!？」

紫電のその推理に、「なんでわかった!？」と言った様な顔を向ける美羽。

「まあ、お前と麗羽は行動が読みやすいからな」

紫電は、美羽のその顔にわかった理由を教えた。

「わ、妾^{わらわ}と麗羽姉さまは、読みやすいのか……………」

そう言って、少し落ち込む美羽。

「まあ、俺は、そんな素直なお前らは、嫌いではないがな」

紫電は、そう言って、美羽の頭を撫でた。

美羽は、少し擦ったそうにしていたが、それを受け入れた。

それから、少しの間、穏やかな雰囲気 flowed。

「ところで、先生。なぜこの南陽に？確か、洛陽を追いつかれてからは、行方不明じゃと聞いたのじゃが？」

そう言つて、紫電に疑問の眼差しを向ける美羽。

「ああ。それはな……………」

そこから、紫電は美羽に、これまでの経緯を話し始めた。

それから、しばらくして、紫電の話が終わると、美羽は少し難しい顔をしていた。

「そんなことが洛陽であつたのか…………しかも、六年前とは。妾は、何も知らなかったのじゃな……………」

そう言つて、少し俯く美羽。

「良いんだよ。お前はまだ小さかつたんだから。知らなくても」

そう言いながら、再び美羽の頭を撫でる。

「それよりもだ。この南陽を見て思つたんだが…………美羽。なんで、昔教えたことが反映されてない？」

美羽は、その言葉を聞いて、暗い顔をする。

「そ、それはじゃな……………」

そう言つて、今度は美羽がこれまでの経緯を話し出す。

「……………そうか。袁逢殿が五年前に亡くなり。それから、美羽はその後を継いだが。お前の周りの老人たちが好き勝手している……………」

美羽の話聞き、その情報を整理している紫電。

「しかも、河北では、袁成殿も亡くなっているとは。これは、麗羽の方も、見に行かなきゃな」

そう言つて、しばらく考えていた紫電は顔を上げた。

「……………ところで、美羽。孫策を客将にしてるって話だが？」

「ああ。それはのう……………」

そして、今度は孫策を客将にした経緯を聞いた。

美羽の話によると、袁逢と孫堅は昔から交流を持っており、それなりに仲が良かった。しかし、袁逢が亡くなってからは、その交流も途絶えてしまったそうだ。

そして、孫堅が、劉表との戦いで、亡くなった時、美羽は、世話になった孫堅の娘、孫策を助けるために同盟を組もうと言う書簡を自ら書き、送ろうとした。だが、その書簡を、袁逢が亡くなってから、好き勝手していた文官のうちの一人の韓胤かんいんにより破り捨てられ、全く違う「傘下に入れ」と言う文に差し替えられ、それが韓胤の部下

により届けられたらしい。

最初、それを美羽は韓胤に問い詰めたが、韓胤は、これまでの経験を活かし、のらりくらりと言い逃れてしまったそうだ。

それから言うもの、美羽と韓胤との仲は、険悪な雰囲気になってしまい。実質、美羽は、政治などには手を付けさせてもらっていないと言うことだった

だが、謁見などは美羽がやっているため、美羽は阿呆の子を演じているという。

その話をしていた時、美羽は目に涙を溜めていた。

「なるほどな。だから、美羽は町にも出てこなかったと言うわけだな」

紫電のその言葉に、美羽は、俯きながらコクリと頷いた。

（……袁逢殿と袁成殿、それに孫堅の死は……何か裏がありそうだな……この三人は、漢の中でも力のある三人だ……しかも、袁逢殿が死んだのは、俺が追放された翌年か……ということは、誰かに謀殺されたか？そして、他の二人も……）

そうやって、紫電は思考の海に入り、しばらく沈黙が続いた。

すると、茶店の外から美羽を呼ぶ、声が聞こえた。

「美羽様～？美羽お嬢様～？どこですか～？」

その声を聞き、美羽と紫電は外に目を向けた。其処には、現代でいうバスガイドのような格好をした女性が辺りをキョロキョロ見ながら、美羽を探していた。

「七乃！」

美羽は、その女性を見て、そう叫んだ。そして、そのまま店の中から飛び出していった。

紫電は、その様子を見て少し微笑み。机の上に勘定の金を置いて、美羽の後から外に出た。

「七乃！！」

「！お嬢様！」

そう言つて、美羽は女性に抱きついた。女性は、急に抱きつかれて一瞬驚いたが、それが美羽だとわかり、抱きしめた。

「ああ、よかった。お嬢様が急にどこかに言つてしまわれて。七乃は心配したんですよ？」

美羽は女性にそう言われて、少しバツが悪そうな顔をした。

「そ、それは、七乃が悪いのじゃ」

そう言つて、見栄を張る美羽。

それを見ていた紫電は、少し苦笑いをした。

そして、女性は美羽が走ってきた方を向いて、やっと紫電に気が付いた。

「あ、あの。もしかして、あなたがお嬢様を……？」

女性にそう聞かれ、紫電は、居住まいを正して、自己紹介を始めた。

「はい。私は、雷霸と申します。先程、その子が迷子になっているのを発見して、一緒にあなたを探していたのです」

「そうですか。それは、どうもありがとうございます。私は張勲と申します」

紫電の言葉に、深々と頭を下げ間延びした感じの声でお礼を言う女性
性 張勲。

「美羽様を助けてもらったお礼がしたいので、どうかお城に来てください」

張勲にそう言われたが、紫電は断ろうとした。

のだが……

「そうじゃな。先生は妾を助けてくれたのじゃ。じゃから、城まで来て欲しいのじゃ」

美羽が言ったその言葉に、張勲が驚いていた。そして、紫電は退路を断たれた気分になった。

「……先生？」

「そうじゃ。先生は、以前洛陽に行ったときに、妾に学問を教えてくれたのじゃ」

続く言葉に張勳は何かを考え、笑顔で紫電にこう言った。

「それなら、尚更城に来てください」

そう言われ、紫電は逃げ道がなくなり、観念した。

「はあ……わかりました」

そうして、紫電は美羽と張勳に引っ張られるようにして、城に連れて行かれた。

それから、城に入った三人は現在、庭園の東屋でお茶をしていた。

「なるほど。あなたが六年前に行方不明になった『紫雷の籠』さんで、昔、お嬢様に学問を教えてくださいました方だったんですね」

そう言って、張勳 真名を七乃（話をしている時に許してもらった）は今聞いた話を整理していた。

「まあ、短い期間だったけどな」

そう言って、肩を竦める紫電。

「しかし、今の南陽は袁逢殿が治めていた時より、廃れているな」

その紫電の言葉に、先程まで笑っていた七乃の顔に影が差す。

「はい。全てはあの男、韓胤のせいです」

そう言って、俯く七乃。

「あの男は、前々からそのような気がありました。そして、袁逢さまが亡くなられた直後に――」

「好き勝手し始めたよ」

紫電の言葉にコクリと頷く七乃。

「それが本当なら、孫策は美羽のことを恨んでいるかもな」

その言葉に、それまで黙って聞いていた美羽の顔が曇った。

紫電はその美羽の顔を見て、少し考えた後、

「ふむ。そうだな。しばらくの間、俺がここに残り、これから美羽たちがどうすれば良いのか検討しよう」

紫電のその言葉に、七乃と美羽二人は驚いていた。

「と言っても、そんな長くいるつもりはない。そうだな……一週間。この期間の間、色んな情報を手に入れて整理しておく」

紫電は二人にそう言った。

その後、その提案を二人は快く受け、紫電は一週間の間、美羽の城で過ごすことになった。

第十話（後書き）

以上です！

どうだったでしょうか？

この話では、袁術こと美羽は、余りお馬鹿ではありません。
天然ではありますけど（笑）

なぜ、こういう扱いにしたのか……？

単に美羽が好きだからです（笑）

コホン。それはさておき。

期間限定ではありますが、美羽の許に居座る事になった紫電。

今回は、どんな事になるのか？

楽しみに〜

第十一話（前書き）

ふう……やっと出来上がりました！

いや……課題は溜め込むものではないですね（苦笑）

それはさておき、今回は美羽の城に滞在中に起きた出来事です。

それは何か？

では、どうぞ……！

第十一話

紫電が美羽の城に、一時的にだが、居座るようになってから四日目の事。

「ふむ……この区域ではこうか……ここは……韓胤の息がかかりすぎてるな……」

そうつぶやきながら、紫電は手に入れた情報を確認していた。

「……孫策の方は……やはり有力な情報は手に入れられないか……」

そう言つて、大きく溜息を吐いた。

その時。

「ん？……でかい氣が玉座の間の方に向かっているな……誰だ？」

そう言つて、氣を感じた方を見ながら、目を閉じる。

「……感じたことのない氣だな……行つて確かめるか？……内密にこの城にいさせて貰っているからな。玉座の間の天井裏から確認するか」

そう言つて、紫電は玉座の間に向かい、その前に来た瞬間に、天井裏へと入った。

紫電 Side Out

??? Side

私は今、袁術に呼び出されて、南陽の城の玉座の間へときていた。

「で？呼び出した理由は何？」

そう言って、私 姓を孫^{そん}、名を策^{さく}、字を伯符^{はくふ}、真名を雪蓮^{しうれん} は
目の前に居る袁術を睨みながら呼び出された理由を聞く。

「うむ。それはの……」

袁術は、そう言つと、呼び出した理由について答え始めた。

要約するところだ。

賊が現れたので、討伐してきて欲しいとのこと。

「ふゝん……まあいいけど……賊ぐらい袁術ちゃんの軍でもどつに
かなるんじゃない？」

私はそう言つが、袁術は……

「ふむ。そうなんじゃが、何が起こるかわからんな。精鋭な孫
策の軍ならあつという間にかたずけてくれるじゃろ、と思ったのじ
ゃ」

そう言つて、袁術は私たちに賊討伐を押し付けるような感じにして
きた。

「そうですよ。孫策さんの軍なら、賊ぐらい簡単にやつつけられますよ」

そう袁術の言葉に合いの手を加えてくる張勳。

ホント、この主従は救えないくらい馬鹿よね。

「分かったわ。引き受けましょ。このお礼は、いつかたっぷりさせてもらうから」

そう言っ、私は目を細めて、わずかに殺気を滲ませながら袁術に笑顔を向ける。

するとその瞬間

ゾクッ!!

いきなり私の背筋に寒気が走る。強烈な殺気が放たれた時のような寒気が。

「!?!」

私は、反射的に『南海霸王^{なんかいほう}』の柄に手をかけた。

「?どうしたのじゃ、孫策?」

そう言っ、何も感じていないように袁術が私に問いかけてきた。

私は、ハッとなって、袁術や張勳、そして、周りの袁術の配下共の様子を伺う。

周りの者達は、何も感じてないように思う。

そこで気がつく。この殺気は、私のみに向けられていることに。

そして、すぐにその殺気はなくなった。

「……なんでもないわ。じゃあ、準備があるから私はここで失礼させてもらっわね」

私は、そう言っつて、早々に玉座の間から立ち去った。

（あの殺気はなんだったのかしら？ 感じ的には、私や祭^{さい}以上の殺気だったけど。あの場には、私と袁術とその側近達以外誰も居なかった。なら、私の殺気に気付いて誰かが？ いえ、そんな様子、袁術や張勳、それに周りの者達から感じなかった。じゃあ、誰が？）

そう先ほどの殺気の正体を考えながら、自分の屋敷へと向かう。

（これは、袁術の周りを調べさせるしかないようね……）

そう思い、急いで自分の屋敷へと戻った。

孫策 S i d e O u t

紫電 S i d e

（ふむ。あれが孫策か……）

紫電は、天井裏からその謁見の様子を伺っていた。

そこには、薄桃色髪で、褐色の女性が美羽に対して、呼び出された理由を聞いている姿が見られた。

話の内容だと、その女性が孫策だということが分かった。

（なるほど。名に恥じぬいい覇気を持っているな）

そう思い、続けて観察していると、何か不服な事があったのだろう、賊討伐の件を了承し、顔は笑顔だが体から殺気が滲み出していた。

（……ちよつとした殺気でこの重圧か……さすがに美羽や七乃、それに周りの者達は気付いてないようだが……ちよつといたずらしてみるか）

そう言いながら、紫電はその顔をにやけさせながら、覇気を少しだけ混ぜた殺気を放った。

すると下に居た孫策は、その殺気を感じ取ったのか、反射的にいった感じに、腰に佩いている剣の柄に手をかけた。

その様子に、不思議に思ったのか、美羽が孫策に問いかけている。

（ふむ。やはり王でもあり、一流の武人。動作に無駄がないな）

そう思いながら、紫電は殺気を引っ込める。

そうすると、孫策は何もなかったかのように振る舞い。適当に言っ

て、玉座の間を後にした。

紫電は、それを見送ると、自分の部屋に戻り、玉座の間での出来事について考え始めた。

その後、美羽が紫電の許に来て、一緒に遊ぶようにねだり、紫電はそれを快く了承して、美羽と七乃と一緒にお茶をしたりした。

美羽が賊討伐のために孫策を呼び出してから三日後。

紫電、美羽、七乃の三人は南陽の城門まで来ていた。

「わざわざ見送りまでしてくれなくて良かったのに」

そう言つて、美羽と七乃を見る。

「いえいえ。お世話になったんですから、これくらいはしておかないと」

そう言つて、笑顔で答える七乃。

「そうじゃ。先生にはまた世話になったからの」

美羽も笑顔でそう言う。

「そうかい。さて、そろそろ行くつもりなんだが、その前に……」

そう言つて、真剣な顔になる紫電。その紫電を見て、二人も真剣な顔になる。

「俺が検討したことは、あくまでも予想だ。これからどうなるか、正直分からん」

そして、少し間を置く紫電。

「だから、もし、どうしようもなくなったら。俺のところに来い。お前達なら歓迎するよ」

そう言つて、紫電は少し笑顔になる。

「……………わかったのじゃ。どうしようもなくなったら、先生を頼るのじゃ」

「うん。よろしい」

そう言いながら、紫電は美羽の頭を撫でる。

「さて、んじゃ、そろそろ行くわ」

「うむ。また、会おうぞ」

「はい。また、いつか」

その二人の言葉を聞き、紫電は踵を返す。

その後、指笛で白竜を呼び、その上に跨つて、走らせた。そして、地平線へと消えていった。

そして、美羽たちは、城へと戻っていった。

それから、しばらくして、紫電は次の町への道を地図で確認していた。

「さて、次は……と。こつからだ劉表が治めている襄陽じょうやうが近い。孫策はあの時見たしな。それに美羽のところがあればと、麗羽の方も気になるな。これは北荊州から許昌、濮陽、そつから南皮に向かったほうが良いかもな」

そうして、紫電はしばらく考え、

「よし。その道順で行くか。なら、まずは襄陽だな。白竜。次は襄陽だ」

白竜にそう伝え。紫電は襄陽へと進んでいった。

そこで、私塾を開いているかつての仲間のことを思いながら。

第十一話（後書き）

以上です！！

美羽の城にいるならばこういうことも起こりますよね。

まあ、今回は隠れて見ていただけですけど（笑）

さて、ここで報告です。

10万アクセス……突破いたしましたー！！！！（ドンドンパフパフ）

……コホン。

さて、10万アクセスを突破したという事で、何か特別編を書きたいと思うのですが……二つのことで迷っています……（汗）

その二つのどっちを書くのか、一応アンケートをとりたいのですが……感想書いてくれてる人少ないんよなあ（溜息）

なので、こっちが見たいという人はできれば答えてください。

では、アンケート内容はこちらです。

Q・どっちが見たい？

1・他の原作とのコラボ

2・雷魔の過去話

この二つでお願いします。

さて次回の本編は襄陽にある一つの町でのお話です。

そこで「天龍」時代の仲間の一人と再会します。

それは誰か？

次回をお楽しみに！！

第十二話（前書き）

やっと出来上がりました！

今回は、襄陽近くの町での話です。

そして、そこである人物と再会します。

それは誰か？

では、どうぞ！！

第十二話

??? Side

その日、私はいつものように、私塾の生徒たちの授業をし、それが終わった後、教室の清掃などをして、買い物に出かけました。

天気が良くて好々（よしよし）です。

そして、しばらくの間、出店^{でみせ}などを見て回っていました。（ちなみに、彼女の隣を通った男性は全員振り返っております）

「最近、治安が悪くなつて、品物も少なくなつて来てますね……」

そうして、色んな店の品物の状況などを確認しました。

そして、最近のこの町の治安のことも考えました。

「やはり、劉表は前に、紫電様の言った通り、あまり良い君主ではないようですな」

そうして、この町を含めた、襄陽を治めている劉表の評価を眩きながら色んな店を見ながら町を歩きました。

子供達が近寄ってきたので、一緒に遊んだりもしました。

「それにしても、紫電様は今どこで何をしていらつしやるんですか？」

そう言つて、あのお方のことを想い、私は昔のことを思い出します。

私　姓を司馬^{しは}、名を徽^き、字を徳操^{とくそう}、真名を静音^{しんおん}　が、あのお方に会つたのは、私がまだ十七歳の頃です。その頃は、王朝が安定していたこともあり、賊が出ることは、余りありませんでした。

そして、そんな考えもあり、その時は、賊は出ないと高をくくつて、隣町まで買い物に出かけました。

行きは、私の予想通りなんともなくて好々だったのですが、帰りに賊に襲われてしまいました。

そして、捕まりそうになるも、何とか逃げ出して、賊から離れようとなりました。

でも、賊は馬を使い追つて来ました。

流石に、あの時は、もう終わったと思いました。

そんな時に、あのお方が部隊を引き連れやってきたのです。

そして、私に、近づいてきて、私の状態を確かめた後、引き連れてきた部隊の兵とともに、私を庇いつつ、賊を全滅に追いやってしまいました。

そして、再び私のところに来て、状態を確認した後、自己紹介を始めました。そして、私もそのお方　紫電様に名を名乗り、助けていただいたお礼をしました。

その後、いくつか話をした後、紫電様が「付いて来ないか」と言われました。なぜと聞くと、紫電様は、勘だと言って、微笑みま

した。多分その時です。その方を好きになってしまったのは。

一目惚れでした。その笑顔を見たたん顔が熱くなるのが分かりました。

その為、若干勢いで「付いて行きます」と言ってしまったのですが、自分にも家族がいることを思い出し、少し待つて欲しいと頼みました。

そして、その後、紫電様たちに護衛されつつ、村に戻ったあと、父や母に事の経緯を話しました。

私は、反対されるかと思いましたが、両親は、私の非凡な能力に氣付いており、快く旅立ちを許可してくださいました。

その後、五年間紫電様の下に付き、彼を支え続けました。彼との関係もそれから身体を許すところまで一気に進んでしまいました。

そして、『天龍』が発足したときに私は彼の副官となり、学問なども鍛えていたため、その隊直属の軍師となりました。その時は、まさに天にも昇る気分でした。ですが、私の他にも、紫電様を慕う人たちが増え、少し彼との関係も心配していましたが、彼は、そんな私達全員を相手にしてくれました。そして、仲間の人たちとも仲良くなり、私は順風満帆な人生を謳歌してました。

しかし、六年前のあの事件で、我等が主、紫電様が洛陽を追放処分になってしまい、私は、足元の地面が崩れた様な感じになりました。

そして、それが原因で、『天龍』を解散させれ、私は、色んなところからの誘いを全て断り、荊州に移り住み、今に至ります。

そんな昔のことを思い出しつつ、しばらく町を見回り、必要な物を買い、私塾でもある私の家に帰ろうとしました。

その時、

「た、大変だー！ー！ー！！」

町人の一人がそう叫びながら走ってくるのが見えました。

「ど、どうしたんだ？」

近くにいた町の人が、その走ってきた人に聞きました。

「……はあ……はあ……ぞ、賊が攻めてきた……」

その走ってきた人が言った言葉で、周りが騒然となりました。

「と、とにかく太守様に報告しないと！」

そう言つて、何人かの町人が城の方へと駆けていきました。

「……ここ最近、賊が多くなってきましたね。しかし、何でしょう。この嫌な感じは？」

私は、そう何か嫌な予感がし、急いで自分の家に帰り、昔使っていた自分の武器の双鉄扇『蝶舞扇ちようぶせん』を持って、町の中に戻りました。

私が戻った時、町の中は、大変なことになっていました。

何故かもうすでに、賊が入り込み、町の人たちを襲っていたのです。

「……先程の嫌な予感はいったい何だったのですか」

私は、目の前の現実が少し信じられませんでした。それでも、町人たちを助けるため、走り出しました。

そして、町人を助けているうちに、戦っていた兵などからこんなことを聞きました。

「この町の太守が、街を捨てて逃げた」

それを聞いた時、私は愕然としました。

なぜ、民を守るべき人が、誰も守らず、自身の保身のために、逃げるのかと思いました。

そして、そのせいで隙が出来たのか、近くによって来ていた賊に気付かず、その賊に、突き飛ばされました。

「へっへっへ。良い女じゃねえか。なあ、今から俺と良いことしようぜ」

そう言って、私を突き飛ばした賊は、嫌な笑みを浮かべながら、私に近づいてきました。

「……っ！」

私は手に持っていた『蝶舞扇』を思いっきり、横に振りぬきました。

ドガー!!……ドサアアアア!!

賊は、油断していたのか、私の一撃がモロに顔の側面に当たり、そのまま吹き飛んでいきました。

それを見ていた、何人かの賊が、私の周りを囲み始めました。

「……これ以上、やると仰るのなら。今から私、司馬徳操がお相手します!」

そう言つて、私は『蝶舞扇』を開き、構えを取り、賊達を睨みつけました。

「嘗めんな女!野郎共やつちまえ!」

一人の男がそう言つた瞬間、囲んでいた賊が一斉に襲い掛かってきました。

私は、その賊相手に、舞うように戦いました。

時には激しく、時には静かに、時には早く、そして、時には遅く。

そうやって、半刻近く戦っていると、相手の数も減り、いよいよ終わりが近づき、好々と思つた時、

「お、女!このガキがどうなつても良いのか!？」

そう言われ、声のほうに振り向くと、この町の子供が人質に取られていました。

「な！？…………くっ！！」

それ見て私は、色々考えましたか、周りを見ても賊しかいなくて、唇をかみました。

打つ手がないことを悟り、私は、『蝶舞扇』を地面に置きました。

「へ、へへへ。そ、そうだ。おとなしくしてりや、このガキも無事で済むぜ」

人質を取った賊は、そう笑いながら、私に近づいてきます。

このまま大人しくして、子供を無事に帰すまで、抵抗しないようにしようと思った時、

「子供を人質に取るなんて、やっぱり賊はカス以下だな……」

そんな懐かしく、愛しいあのお方の声が聞こえました。

静音 Side Out

紫電 Side

紫電が、『天龍』の仲間だった者の一人、名を司馬徽、字を徳操、真名を静音が私塾を開いていると言う町にやってきた時、その町は、賊に襲われていた。

「ちつ……最近賊が多くなってきやがったと思ってたら、こんなことになっているとはな」

そう言つて、紫電は白竜を、その町に急がせた。

そして、町に入り、白竜から降り、襲っている賊を腰に下げていた二本の刀を抜いて、賊達を切り倒していった。

右手には、以前も使った日本刀に酷似した刀 『黄竜』を握り、左手には、鐔が無い直刀 『飛竜^{ひりゅう}』を握っていた。

そして、しばらく賊と戦いつつ、町の中央の方へ向かっている時、この町を訪れる理由であつた、水色髪的女性 静音の姿があつた。

彼女は、自分の武器である『蝶舞扇』を地面に置き、じっとしていた。

よく見ると、賊が子供を人質に取り、静音を脅しているようだ。

「ちい……静音がなんで攻撃しないのかと思つたらそう言うことだよ！」

そう言つて、紫電は目にも留まらぬ速さで駆け抜け、その場に向かった。

そして、その場に着き、賊の背後に回りこつた。

「子供を人質に取るなんて、やっぱ賊はカス以下だな……」

そして、賊がそれを聞いた瞬間、賊に強い衝撃が与えられ、吹き飛

ばされた。

「大丈夫か？」

助けた子供はそれを聞いて、コクリと頷き、紫電はそれを見て、少し安心した。

そして、静音のほうに振り向き、

「よう。静音。なんかやばい状況だったようだな」

そう言って、再会の挨拶をした。

「し……でん……さ……ま？」

静音は、目の前のことが信じられないのか、まだ少し呆けている。

「何だよ？俺じゃないって言いたいのか？」

紫電はそう言って、悪戯をする子供のような笑みを浮かべた。

「ああ……紫電様……！」

静音はそう叫ぶと、紫電に抱きついてきた。

「久しぶりだな。静音」

そう言って、抱きついてきた彼女に何の動揺もせず、彼女の頭を撫でる。

「はい。お久しゅうございます」

そう言いながら、彼女は顔を上げる。

その目には、涙が光っていた。

「さてと、そんな感動の再会もここまでにして、そろそろこの状況を何とかしようぜ」

「御意に」

そう言つて、二人は離れ、紫電は二つの刀『黄竜』と『飛竜』を、静音は下に置いていた『蝶舞扇』を手に取り、残った賊を倒しに回った。

そして、半刻後、町の中にいた賊は、紫電と静音の二人により、全滅した。

「ふう……腕落ちてなかったんだな。これじゃ、あの時助けたのはなんだったんだろうって思うな」

「ふふ。あの時は、流石の私も動揺しておりましたので、子供を如何に無傷で解放させるかと言うことしか、考えていませんでした」

そう言つて、二人とも自分の汗を拭う。

「へえ。静音も動揺すんだな」

そう言いながら、ニヤリと笑う紫電。

「もう。私のことを嶺れいみたいな、鉄の女だと思っていたんですか？」

「あ、それ、嶺に会った時、言ってやろうかな？」

「う……流石にそれはやめてください……」

昔のことを思い出したのか、少し顔が青くなる静音。

そうやって、戦の後なのに、場違いのように笑い合う紫電と静音だった。

「ところで、紫電様。なぜこのようなところに？」

静音は、先程から気になっていたことを紫電に聞いた。

「ああ。それはな……」

そして、紫電はこれまでの経緯を静音に話し始めた。

「なるほど。それで、この襄陽に」

「ああ。まあ、襄陽ではなく。お前に会いたくて来たつてのもある

がな」

そう言つて、紫電は悪戯つ子の様な笑みを浮かべる。

「も、もう。紫電様ったら……………」

その紫電の言葉に顔を赤くする静音。

端から見ると、「なんだ？このバカップル」とツツコミたくなるような光景である。

「それにしても、なんで兵とか少なかったんだ？」

紫電のその質問に、静音は唇をかんた。

「……………この太守が……………敵前逃亡を図つたようなのです……………」

それを聞いて、紫電も苦い顔をする。

「やはり、朝廷は腐つてきているな」

「そうですね……………劉宏様や火穂も頑張つてはいるんでしょうが……………地方の太守となると……………」

「これはいいよ。あの時期が近づいているのか……………」

そう呟く紫電の言葉を静音は聞いた。

「あの時期？」

気になったので、聞くと……

「ああ。俺の予測だが、このまま行くと、民の一斉蜂起が起こるかもしれない」

その言葉を聞いて、少し驚く静音。

「そうですか……いえ、そうですね。紫電様は、以前も大体のことを予知してましたしね」

そう言つて、二人は顔を暗くする。

紫電は、前の世界の記憶がまだ残っているのか、ある程度のがことが分かつていた。

『天龍』にいた時も、ある程度のがことがわかつていた。それを仲間たちや蒼華は、紫電はある程度未来がわかると認識していた。

「だから、俺は、その為にも、各地を回ってるんだよ」

「なるほど。そう言うことでしたか」

「それよりも……だ。この町を何とかしないとな」

「そうですね」

そう言つて、二人は後始末をしている町の人達のところへ歩みを進めた。

後始末も終わり、夜の帳がおりた頃、紫電と静音は、静音の家へと来ていた。

「はい。お茶が入りました」

「おう。ありがとう」

二人は家の中で、お茶を飲んでいた。

「静音。私塾をやってるんだってな」

「はい。色んな生徒がいてそれなりに楽しいです。そのあたりは好々です」

「そうか。んじゃさ、その生徒の中に、名を諸葛亮^{しよかつりやう}、字を公明と^{こうめい}、名を鳳統^{ほうとう}、字を士元^{しげん}、それに、名を徐庶^{じょしよ}、字を元直^{げんちよく}という子はいないか？」

それを聞いた瞬間、静音は心底驚いた表情を、その綺麗な顔に浮かべた。

「な、なぜ、朱里^{しゅり}に雛里^{ひなり}、それに麗里^{れいり}のことを知ってるんですか！？」

「なにこれも、ちょっとした予知だよ。ってか、その名は三人の真名か？」

「あ、はい。そうです。……なるほど。紫電様の予知でしたか……」

そうして、静音は、紫電が三人のことを知っていた理由を納得した。

「そうか。真名を預ける仲なのか。ってことは、それなりにいい子達なんだな」

「はい。とても良い子達です。ですが、麗里　元直はまだこの私塾にいますが、公明と土元は、大分前に自分の主君を探す旅に出てしまいました」

そう言つて、少しさびしそうな顔をする静音。

「そうか。まあ、それは仕方ない」

それから、しばらく沈黙が近づいた。

「ところで、紫電様？」

「ん？」

「今日は、この後、どうなさるんですか？」

その言葉を聞き、紫電は少し考えた後、

「そうだな。もう今日も遅いし、宿にでも止まって、明日、ここを出るわ」

「そうですか。……で、でしたら、ここに泊まっていきませんか？」

紫電はその言葉に少し驚き、静音の顔を見た。

その静音の顔は、ほんのり頬が染まっていた。

「…………それは、誘ってるのか？」

「…………言わなきゃ…………駄目ですか？」

そうして、しばらくお互いを見詰め合っていた。

その後、二人は遅めの夕餉を取り、二人で一緒に寝た。

この時、何があったかは…………読者の皆様の想像に任せます。

その翌日、紫電は、静音に見送られながら、白竜に乗り、次の目的地である許昌に向かっていった。

そこで次に彼を待ち受けているものとは？

それは誰にも分からない。

第十二話（後書き）

あとがきは、次のオリキャラ紹介に書いております。

オリキャラ紹介二（前書き）

今回は、司馬徽こと真名を静音の紹介です。

オリキャラ紹介二

姓：司馬しば

名：徽き

字：徳操とくそう

真名：静音しずね

性別：女

年齢：27歳

身長：162cm

体重：48kg

武器：蝶舞扇ちようぶせん（双鉄扇）

能力値：武力3、統率力4、知力5以上、政治5、魅力5以上

『天龍』の仲間の中で、紫電が一番初めに会った女性。紫電が軍に所属し始めてしばらくたった時に、賊に襲われているところを紫電に助けてもらい、名を名乗りあつた後、紫電に付いてこないかと言われ、助けてもらった恩返しをするため、付いていくことになる。その時、紫電の笑顔に惚れた様である。その為、『天龍』の仲間の中でも一番紫電に心酔している。

その後、『天龍』が発足した時、紫電の副官兼軍師になる。『天龍』が解散させられた後、能力を買われいろんな所から誘いが来たが、全て断って、私塾『水鏡塾』を荊州にて開いた。

『天龍』では、主に後方支援に回っていた。

容姿

絶世の美女と言われるほどで、スタイルも出るところは出て、引込むところは引つ込んでいる。なので、多くの男性から告白され

まくっているが、紫電一筋なため、全て断っている。髪は長くストリート、色は水色。目は翡翠色である。

作者的には、顔は、「ティルズオブファンタジア」の「ミント」をイメージしている。

性格

お淑やかで、優しくお母さんのような雰囲気を持っている。なので、水鏡塾がある町の子供に懐かれている（歩いていると町中の子供達が近寄って来るほど）。また、口癖は史実どおり「好々^{よよし}」である。

服装・装備

着物を中華風にしたようなものを着ている。これは、紫電から贈られた服でもあるので、好んで着ている。色は青紫。

戦闘では、着物上から紫色の胴当てを付け、手には同色の手袋のような手甲を付け、蝶の羽のような模様が描かれた一对の鉄扇『蝶舞扇』を使い舞うように戦う。その美しい姿から『美妖蝶^{びようちよう}』と言われている。

また、紫電から柔術も習い、それもよく活用している。また、後の『臥龍』諸葛孔明と『鳳雛』鳳土元を育て上げることからわかるように、かなり高い知力を持ち、その『臥龍鳳雛』でも足元に及ぶか否かの知を有している。ただし、その知を使うことができるのは、紫電のみである。

・陣形

鶴翼陣、横陣、方円陣、魚鱗陣、雁行陣、偃月陣、衝輓陣

・奥義

LEVEL1・水鏡の教え

味方兵力＋、味方士気＋、奥義ゲージ＋

水鏡という名は、全ての知識の基である。

LEVEL 2・美妖蝶

味方兵力＋、味方士気＋、敵士気－

行う舞は兵への鼓舞となり、士気上昇もかなりのものである。

LEVEL 3・龍の右腕

計略、敵士気－、火刑、敵攻撃－

紫雷の龍のためにいかなる計略をも成功させ、敵の士気を削ぐ。

オリキャラ紹介二（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

「天龍」の武将、二人目は司馬徽こと静音という方でした。

このキャラは紫電の次に出来たキャラなので、結構気に入っていた
ります（笑）

さて、10万アクセス記念のアンケートの結果なのですが………0
票でしたorz（泣）

ということで、10万アクセスの内容は自分自身で決めたいと思
います。

なので、次回は10アクセス突破記念の話となります。

という内容になるか楽しみに！

では、また次回！！

P.S.

静音の口癖 「好々」を追加しました。

まあ、口癖というほど多く使わないかもしれませんが………（汗）

10万アクセス記念（前書き）

やっと出来上がったので投稿します。

今回は、紫電が率いる『天龍』ができて、余りたっていないころの話です。

そして、あるオリキャラも登場させます。

本編での登場はまだ先なので、今回は名前だけです。

では、どうぞ。

10万アクセス記念

これは、紫電が『天龍』を率い始めてから、それほどの日時がたっていないころの話。

現在、紫電が率いる『天龍』五千の部隊は、長安の視察に訪れていた。

そこで、太守と面会し、長安の情勢を聞きこれからの政治をどのようにしていくか議論していた。

そして、それも数刻程度で終わりを告げたので、ちょっとした休暇を楽しむことになった。

「ふむ。もっと時間がかかるかと思って、多目の滞在日数にしたんだが、ここ長安の太守が物分りが良くて、結局大幅に時間が余ってしまったな」

そう長安の城にある中庭の東屋でつぶやくのは、禁軍特殊警護部隊『天龍』隊長、そして我等が主人公の名を雷魔、字を霸龍こと真名を紫電だった。

「そうですね。でも、その分ゆつくりする時間が出来て好々じゃないですか」

そう湯のみにお茶を注ぎながら言うのは、『天龍』副隊長兼軍師である名を司馬徽、字を徳操こと静音である。

「そうだな。最近は、色々と忙しかったからな」

そう言いながら、紫電は静音からお茶の入った湯のみを貰う。

「ところで、紫電様。これから何か予定でもありますか？」

自分の湯のみにもお茶を入れ、静音は紫電にそう問いかけた。

「ん？ああ。ちよつくら長安郊外にあるとある村に二、三日ほど行ってみようと思ってるんだが」

「村……ですか？それは、この近くにあるのですか？」

紫電の答えに、そう聞きながら静音は少し首を傾げる。

「うーん……少し遠いが、白竜だと今日中には着くだろう」

「そうですね。あの……なら、私も付いていってもよろしいでしょうか？」

静音はそう言いながら、紫電に子犬のような目線を向ける。

そして、紫電はその視線に少したじろぎながらも、

「あ、ああ。別にいいが……」

と言って、静音の同行を許可した。

その瞬間、静音の顔が嬉しそうに輝いた。

「ありがとうございます！では、今から準備をして参りますね！」

静音は、そう言いながら、手早くお茶のセットをなおすと、足早にその場から立ち去ろうとして、ふと思ったことを紫電に聞く。

「ところで、紫電様はその村とどのような関わりが？」

それを聞いて、紫電は遠くを見るような視線で、こう答えた。

「俺が……幼少時代、五歳頃まで住んでいた村だ」

それからしばらくして、紫電と静音は、馬に乗って紫電の故郷の村へと向かっていた。

ただし、そこにはもう一人同行者がいた。

「俺の実力を考えると護衛なんて必要ないだろうに……」

そう溜息を吐きながら、紫電はもう一人の同行者　名を何進、字

を遂高こと真名を火穂に視線を向けた。

「いえ、どんな強者でも、油断すれば命を落とします。例え紫電様でもです。それに、紫電様に怪我でもされたら劉宏様に顔向けが出来ません」

だが、火穂は頑なに付いていくと言う。

ところで、何故火穂が付いてきているかと言うと、静音が上機嫌に自分の前を横切っていったのを見て、呼び止めて何か嬉しい事があったのかと問いただしたところ、静音は嬉しそうに、そして自慢するように東屋での内容を話した。

それを聞いて、火穂は少し苛立ったのか、強めの口調で自分も付いていくと言い出した。

流石に、静音は二人きりの遠乗りを期待していたので、拒否しようとしたが、そこに残りの『天龍』の武将二人が現れ、自分達も付いていくと言い出したが、流石に長安の守りを薄くすることはよろしくないなので、ジャンケンすることになり、拒否できぬまま、女の戦いへと発展した。

まあ、結局は静音と火穂が勝って、同行の権利を得たのだが。

閑話休題。

そんな事もあり、火穂も同行することになった。護衛として。

「まあ、火穂の言葉も一理あるか」

そう言つて、紫電は半ば無理矢理自分を納得させた。

「そうですよ。火穂の意見は好々です。それに、紫電様は帰った後のことを心配したほうがよろしいかと」

そんな少し笑いを含んだ静音の言葉に、紫電は「そうだな」と小さい溜息を吐く。

実は、長安を出るとき、留守を任された二人に帰ってきてからの残りの時間を二人と過ごすことを約束させられたのだ。

紫電も流石に残される二人の事を不憫に思ってしまったのか、二つ返事でその事を了承してしまったのだ。

「とりあえず、約束は守らないとな。気落ちしても仕方ないな」

紫電がそう言つと、静音も火穂も少し苦笑いになった。

そして、三人は村への道を急ぐ事にした。

陽が沈もつかというころ。紫電一行は、紫電の故郷の村の前へ来ていた。

そこは、かなり栄えているのか、もう村ではなく、一つの町になっていた。

「へえ。あの村が、ここまで成長していたとはな」

そう言っつて、昔の村の風景と違う感じに紫電は感嘆の溜息を吐いた。

「ここが……かつて紫電様が住んでいた村」

「村というよりは、本当に町のようになっているな」

そう静音と火穂はそれぞれの感想を言う。

そして、三人は村　いや、町の中に入ろうとした。

だが、

「その者たち止まれ！」

そう見張りを担当している男に言われたので、足を止めた。

「貴様ら、何者だ？」

そう言っつて、見張りの男は警戒しながら聞いてきた。

流石に隠していても仕方ないので、素直に自分の正体を明かした。

「俺は、禁軍特殊警護部隊『天龍』の隊長の雷覇龍だ。そして、こ
っちは仲間の……」

「司馬徳操です」

「何遂高だ」

そう紹介すると、見張りの男はそれを聞いて、若干顔を青くする。

「し、失礼しました！」

そう言つて、膝を突いて礼をする。

そして、体は若干震えていた。

「いいよ。実際、君は見張りとしての仕事をしたに過ぎないんだから」

そう言つて、紫電は見張りの男を立たせる。

「あ、ありがとうございます。あ、あのところでこの町に何の御用で？」

若干緊張しつつも、そう言つ見張りの男はそう紫電たちに問いかける。

「ああ。俺が元々この町の出身でな。久々に顔を出しに来たんだ。つてことで、中に入っても良いか？」

紫電がそう言つと、見張りの男は「長老に確認してきます」と言つて町の中へと消えていった。

半刻後、先程の見張りの男が戻つてきて、

「長老がお会いすることなので、長老の宅へと案内します」

と言ったので、その男について長老の家へと向かった。

そして、長老の家に着くと、結構年のいった老人が家の前で頭を下げていた。

「これはこれは雷覇龍様。こんな田舎にようこそ御越しくださいました」

「いや、故郷だからな。それと、長老。前みたいに紫電って呼んでくれ」

紫電はそう言って、長老の顔を上げさせた。

すると、長老は紫電の顔を見た瞬間涙を浮かべてこう言った。

「久しぶりじゃのう、紫電。元気で、無事で何よりじゃ」

「なるほどのう。お主らが村を出た後、そんな事になったのか」

その後、長老の家に入り、広めの部屋で、これまでの経緯を長老に話していた。

「とても苦しい思いをしたじゃろう、紫電。だが、ここまで育ったのだ。雷鳳も雷麗も満足していると思っぞ」

そう言つて、紫電に慰めの言葉を投げかける。

「ああ。俺もそう思う。父さんと母さんに誇りを持って、ありがとうつて前に墓参りしたときに言つてきたよ」

紫電は、そう言つて、遠くを見つめる。

「ところで、今日はここに泊まつていくのか？」

「ああ。日も落ちたしな。それに、二、三日は滞在するつもりだ」

「そうか。なら、ワシの家に泊まつていつてくれ」

そう長老の問いに答えたら、長老にそう勧められたので、お言葉に甘えて泊まる事になった。

翌日、紫電は一人で町の中を歩いていた。

「あの村がここまで発展したとはな」

そう言つて、紫電は町を眺める。

そこには、多くの人が笑顔で暮らしていた。

（この笑顔が賊とかで消えないようにしないとな）

そう改めて色々決意した紫電は、しばらく街中を歩いて、長老の家へと戻った。

昼。

昼餉も終わり、紫電は静音と火穂と一緒に中庭でお茶をしていた。するとそこに、一人の少女が歩いてきた。

「おや？君どうしたのかな？迷子？」

紫電がそう聞くと、少女は頭を横に振り、

「爺様おじいさまを探してたの」

そう言つて、若干不機嫌に答えた。

どうやら、長老に関係した少女のようで、相当な時間屋敷の中で長老を探したが見つからず、少しすねている様だ。

「そうか。なら、一緒に探そうか？」

紫電がそう言つと、少女は顔を上げ、「いいの？」とでも言つように首をかしげた。

「ああ。いいよ」

紫電がそう言うのと、少女は笑顔になり、紫電の手を引つ張った。

紫電は、静音と火穂にその旨を伝えたと、少女に引つ張られながらその場を後にした。

その後、四半刻程探したが長老は見つからず、ちょうど近くにいた侍女に聞くと、長老は今出かけており、しばらく帰ってこないとのこと。

ただ、夕餉には帰ってくるらしい。

だが、少女はそれを聞くと、頬を膨らませ、

「爺様の嘔吐き。遊んでくれるって言ったのに……」

そう呟いた。

「君は、長老と遊ぶ約束をしていたのか？」

紫電がそう聞くと、少女は頷いた。

そして、しばらく紫電は考え事をしたかと思うと、

「じゃあ、お兄ちゃんと遊ぼうか？」

目線を少女と同じにした後、そう言った。

少女はそれを聞くと、少し驚いた顔になった後、輝くような笑顔になり、勢い良く頷いた。

それを見た紫電は笑顔になり、しばらくの間少女と遊んだのだった。

途中から、静音や火穂もそれに加わり、屋敷の中は笑い声でいっぱいになった。

ちなみに、後で聞いた話だが、その少女は、長老の孫だったのと。

それから、二日後。

紫電一行が帰る日となり、長老と少女、それに少女の両親が見送りに町の門まで来ていた。

「見送りなんていいのに」

紫電がそう言うと、長老は首を横に振り、

「いや、流石に劉宏様の弟君を見送らんわけにもいかん。それに孫の世話までして貰ったしの」

そう言った。

その答えに、紫電は苦笑いになった。

すると、少女が紫電の傍にやってきた。

「どうしたの？」

紫電は、少女と同じ目線になり、問いかけた。

「また、遊びに来てくれる？」

少女はそう寂びそうに聞いてきた。

「ああ。また、遊びに来るよ」

紫電はそう微笑み、頭をなでてあげながら少女に言った。

「本当？約束だからね！」

それを聞くと、少女は笑顔になりそう言った。

そして、少しもじもじしたと思うと、

「これは、一緒に遊んでくれたお礼！」

チュ。

そんな効果音が聞こえてきそうな感じに紫電の頬にキスをした。

少女は流石に恥ずかしかったのか、顔を赤くしながら足早に両親の

許へと戻っていった。

紫電たちは突然の事に少々呆然としたが、微笑ましい展開だったので、自然と笑顔になった。

「ふおっふおっふお。孫にあれだけのことをさせたんじゃ。必ず来てあげるんじゃぞ」

長老はそう言って、紫電たち（主に紫電だが）に念を押しした。

それを聞いて、紫電達の顔は苦笑いになった。

その後、紫電、静音、火穂の三人は長安に帰っていった。

紫電が帰った後の長老の家でのこと。

「紫電のこと、深く気に入ったようじゃな？」

「うん！私、大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになりたい！」

「そうかそうか！」

そんな会話が成り立っていたそうなの。

「お前には才もあるしの。是非とも娶ってもらわなければな。のう」

文姫よ！

10万アクセス記念（後書き）

以上です。

どうだったでしょうか？

今回は、『天龍』ができてすぐの頃の話を書いてみました。

コラボ方はいいものか思いつかなかったもので、今回はこんな感じにしました。

そして、出しました！出してしまった！新しいオリキャラ！

その名も、蔡文姫！（本名は、名が蔡？で、字が文姫）

しかも、史実とは違って長安に住んでるし！

とりあえず、今後出す予定のオリキャラとの話でした。

楽しんでもらえたなら幸いです。

さて、次回からは本編に戻ります。

今回は、許昌での話です。

どんな内容になるのか？

楽しみに！

第十三話（前書き）

やっと出来上がりましたので、投稿いたします。

今回は、二つ同時投稿です。

と言っても、片方はコラボ作品です。

まずは、十二話から投稿いたします。

今回は、許昌での話です。

どんな出会いがあるのか？

では、どうぞ。

第十三話

襄陽を出て、数日後。紫電は、豫州よしゅうの許昌きょしょうを訪れていた。

「ほう。ここが許昌ね。それなりに賑やかだな。まあ、漢でも有数の都市だから当たり前か」

そう言いながら、町の中を見回る紫電。

「さて、食料や薬品が少なくなってきたから、買い足さないとな」

そうここに訪れたのは、旅に必要な物が少なくなってきたからである。

それから、紫電はしばらくの間、食料や薬品を買って回った。

一刻後、買った物を先にとっていた宿屋の自分の部屋に置き、再度許昌の町並みを見て回った。

そして、今は、たまたま目に入った本屋の中にいた。

「ふむ。それなりに品揃えは良いな。まあ、洛陽が近いからな」

そう言って、棚に並んでいる本を順に手にとって読んでいた。

すると、とある本が目に入った。

「お？これは……そういえば、静音が新しい本を出したって言ったな」

その本には、「著・水鏡」と書いていた。

そして、その本を取ろうと手を伸ばすと……

「ん？」

「あら？」

誰かの手とぶつかった。

紫電は、すぐにその手を引っ込め、ぶつけた相手の方を見た。

そこには、小柄で金髪を両側にまとめてクルクルに巻いた少女がいた。

だが、その者が醸し出す雰囲気は、およそ凡人では出せないような感じがした。

それは、気高いと言うか、近寄り難いと言うか……とにかく、相当の身分の者であることは予想がついた。

そして、少女の後ろには、護衛なのだろう、二人の女性が立っていた。

「あなたもこの本を買いに来たの？」

少女は手に取った本をかざした。

「いや、えっと……」

紫電は、「買う気はない」と言おうとしたが、それを言う前に、後ろに控えていた二人の護衛の内、短い水色髪的女性が少女に話しかけた。

「華琳様^{かりん}。どうやらその本は、それ一冊しかないようです」

「そう困ったわね……………」

「いや、だから……………」

再度「買う気はない」と言おうとしたが、それを今度は、長い黒髪的女性が口を挟んで遮った。

「残念だったな。その本は、華琳さまがお買いになられるのだ。だから、諦めて他をあたると良い」

その言葉に、紫電は少しむっとなったが、顔には出さなかった。

「おやめなさい、春蘭^{しゅんらん}。どちらかと言えば、この者の方が私より先に手を出していたのだから、彼に買う権利があるわ」

「だから、俺は……………」

「流石です、華琳様！その寛大なお心遣い、この夏侯元讓^{かこうげんじょう}、感服いたしました！！」

三度「違うと」言いたかった紫電だったが、また黒髪的女性に遮られ、少しいらつとしたが、その女性の言葉に自分の知っている名が出てきたので、抑えることが出来た。

（夏侯元讓……ってことは、あの黒髪の女は、夏侯惇かこうとんか。なら、もう一人の水色髪の女は、夏侯淵かこうえんか？そうになると、目の前の金髪の少女は……）

そう紫電が考えていると、華琳と呼ばれた少女が話しかけてきた。

「それにしても、この本を選ぶなんて、あなた男にしては中々見る目があるわね」

そう言つて、挑戦的な視線を紫電に向けてくる少女。

「ん？ああ。いや、それは知り合いの本だからな」

「知り合い？あなた、水鏡と知り合いなの？」

「ああ。だから、興味本位で手にしようとしただけだ。買うつもりはない」

「ふうん……あなた、名は？」

「……雷霸だ」

紫電は、名を聞かれたとこに少し疑問を持ちながらも、その少女に名乗った。

覚えている方もいらつしやると思うが、紫電は、自身の名を知っている者に正体がばれないように、偽名である「雷霸」を名乗っている。

「そう。雷霸。あなた、私に仕えないかしら？」

「……………は？」

「な！？華琳様！？そんな男を引き入れるのですか！？」

少女の言葉に、紫電は一瞬呆け、黒髪の女性　夏侯惇が驚いた声を上げる。

「水鏡と友と言うことは、男と言えどもそれなりの才があっても可笑しくないもの。なら、それを私の元で役に立ててみないかと聞いているの」

そう言つて、紫電にそう提案してくる。

「どう？才ある者なら、男でも歓迎するわ」

再度、少女は紫電に問いかけた。

だが、紫電の心はもう決まっていた。

「せっかくの申し出だが、お断りさせてもらう」

紫電は、そうきっぱりと断った。

「貴様！せっかくの華琳様の申し入れを断ると言うのか！！」

「落ち着け、姉者。理由も聞かずにいきり立つのはよくない」

夏侯惇が声を荒げて怒りを表すと、水色髪の女性が諫めた。

（姉者……ということは、やはり夏侯淵か……演戯でだが、夏侯惇の弟として登場していたしな。と言うことは、やはりこの少女は、曹操そうそうか）

紫電は、そう自分の中で結論を出した。

「そうね。理由を聞かせてもらえないかしら？」

少女　おそらくは曹操　はそう言って、断られた理由を聞いてきた。

「理由は二つある。まず一つ。俺はあなたのことを知らない。一応予想は立てているが、それでも確信じゃない。だから、名も素性も知らない奴についていくなんて子供でもない」

「そう言えば名乗ってなかったわね。でも、予想は立てているのでしょう？一応、言ってみなさいな」

そう言って、試すような目を向けてくる曹操。

「んじゃ、失礼して。あなたの名は曹操、字は孟徳もつとく。そして、後ろの二人。黒髪の女は、先程も名乗っていたが、名は夏侯惇、字は元讓。そして、二人目の水色髪の女は、さっき夏侯惇のことを姉者と呼んでいた。なら、その妹の夏侯淵、字は妙才みょうさい。ちなみに、曹操。あなたのことが分かったのは、この二人が分かってからだ」

そう言って、三人の名だけでなく、字まで言い当てた紫電。

これには、三人とも心底驚いた顔をしていた。

「字まで言い当てるなんて。それにその推理力。やはり惜しいわね。それは良いとして、二つ目の理由は？」

そう言つて、曹操は、驚いた顔をすぐに戻し、二つ目の理由を促した。

「二つ目の理由は、もう仕える主がいるからだ。まあ、それでも見聞を広げるために旅をしてるんだがな」

そう言つて、肩をすくめる紫電。

「そう……その者から乗り換える気は？」

「ないな」

「放浪しているあなたを呼び戻しもしないのに？」

「まあ、それは自分から戻るって言ってるからな」

そう言つて、遠い目をする紫電。

すると……

「貴様！華琳様がそいつよりも劣つていと言いたいのか！？」

「だから、落ち着けといっているだろう、姉者」

夏侯惇が怒り、それを夏侯淵が止めていた。

「しかし、秋蘭しゅうらん！この男は、華琳様を侮辱しこうしたのだぞ！？」

そう言つて憤る夏侯惇。

「落ち着きなさい、春蘭。この男の言っていることは本気よ。決して私をけなすために言つたわけではないわ」

「はあ……華琳様がそう仰るなら……」

曹操にも諫められて、夏侯惇は不承不承といった感じに引き下がった。

「ところで、俺からも一つ良いか？」

そう言つて、先程から気になっていたことを聞いてみた。

「何かしら？答えられることなら良いわよ」

「なんであんたがここ、許昌にいるんだ？今のあんたは、陳留の刺史だつたはずだが？」

そう、曹操は陳留の刺史なのだ。なので、この許昌の町にいることは確かにおかしかった。

唯一考えられるのは、ここの太守と知り合いで、その人に会いに来たとかだが、それでも、護衛の二人だけを連れてここにいることはないだろう。

紫電の言いたいことがわかったのか、曹操は不敵な笑みを浮かべた。

「ああ。そのことね。別に大したことではないわ。ただ、視察に来ているだけよ」

「ただの視察………ね」

「そうただの視察。でも、確かにここは私の領土ではないわ。『今は』………ね」

そう言つて、不敵な笑みを深める。

「ふーん。なるほどね」

「関心が少ないわね。でも、やはり頭は回るようね。惜しいわ。その才が手に入らないなんて」

そう言つて、曹操は紫電に先程の本を差し出した。

「ん？なんだ？」

「この本に興味あつたのでしょうか？」

「いや？単に、知り合いの本だから手に取ろうとしただけだよ。それはあんたに譲るよ」

「手に取ろうとしただけでも、興味あるでしょうに。良いわ。譲ってもらうわ」

そう言つて、曹操は会計をしに入り口の方へと歩き出す。

だが、少し止まり。

「雷覇。気が向いたならいつでも来なさい。そうすれば、あなたに天下と言つ物を見せてあげるわ」

そう言つて、再び歩き出す。

その背が見えなくなり、紫電は少し息を吐き出した。

「天下………ね」

そう言つて、紫電は少し笑つた。

曹操 Side

私は今、少し上機嫌だつた。

原因は、先程本屋で遭つた男だろう。

最初は、欲しい本に手を伸ばした時、あの男の手に当たり、少し嫌な気持ちでその男のほうを向いた。

しかし、その男の顔を見た瞬間、そんな気持ちは消えうせた。

なぜなら、その男の纏う雰囲気は只者ではなかったからである。

少し興味を持った私は、彼に話しかけた。

すると、私が手に取ろうとした本 表紙に「著・水鏡」と書かれ

ていた　　を取ろうとした理由を聞くと、水鏡と知り合いだというのだ。

これは、非凡な才能がその男　雷霸の中に眠っていると思い、その才がほしくなった私は、彼を誘った。

だが、彼はきっぱりとそれを断った。

「なぜ？」と聞くと、二つの理由を言ってきた。

一つ目は、私の名を知らないこと。これは、私が名乗ってなかったことが悪い。なので、名乗ろうとしたが、彼の言葉の中に「一応予想は立てている」と言う言葉があり、それを試してやろうと思い、興味本位で聞いてみた。

すると、雷霸は私の名どころか、字と、それに護衛でついてきていた二人　春蘭と秋蘭の名と字も言い当てた。

これには、流石の私も驚きを隠せなかった。しかも、分かった理由が、最初に春蘭をいさめたとき、春蘭が姓と字を言ったところから推測したのだと言う。

その後、私は、彼の才がどうしても欲しくなったが、二つ目の理由を言うように促した。

すると、二つ目の理由は、「自分にはもう仕える主がいる」というのだ。

こんな才ある者を野放しにする主なんて、どうってことないと思い、乗り換える気はないかと聞いたら、即答で「ない」と言われた。

自身をほうつていることも引き合いに出したが、「自分から戻ると言った」と言われた。

これは、彼がどれだけその主を信頼しているかがわかった。

これが原因で、春蘭は私が侮辱されたと思い、憤ったが、むしろ、彼の目は綺麗だったので、私は、彼が私のことを侮辱するつもりで言ったのではないということも分かっていた。なので、今回は春蘭を諫めた。

その後、今度は雷霸から「なぜこの許昌にいるのか？」と問われた。

その質問は、至極当然だ。なぜなら、私は陳留の刺史だからである。

ここの太守に招かれたのならまだしも、招かれてもない私がこの町にいることはおかしいと思っただろう。

だから、私は彼に挑戦的な眼差しで、ここに来ている理由を教えてくださいあげた。

するとそれを聞いた、彼は不敵な笑みを浮かべた。

そして、その後、私は彼が先に手を出していた先程の本を差し出そうとしたが、彼は欲しくて手を出したわけではないと言い、その本を私に譲ってくれた。

私は、それを受け取り、最後に彼をまだ諦めていない旨を告げ、本の勘定をした後、その店を出た。

「ふふふ」

其処まで、思い出し、私は後のことが楽しくなり、笑ってしまった。

「ご機嫌良いですね。華琳様」

それに気付いたのか、秋蘭が声をかけてきた。

「ええ。とても気分が良いわ」

「やはり、あの男の事ですか？」

「ええ。あの才は、このままずっと眠っていることはないでしょう。この先、いつかその才が花開き、どこかで名を上げると思うわ。それが私のところだったら、とても嬉しいんだけどね」

そう言って、秋蘭の方を向いた。

「そうですか。それは、楽しみですわね」

「ええ」

そう言って、いつかあの雷霸という男がこの世に名を上げることが待ちどろしくなった。

曹操 Side Out

紫電 Side

紫電は、その後、宿屋に戻り、地図を確認していた。

「さてと、この先は、濮陽ぼくようを通って、南皮なんびに向かうか」

そう言っ、て、紫電は、地図の上を指でなぞりながら、次の目的地への道順を決めた。

「しかし、あれが曹操か……なんというか、まさに未来の霸王だな。あれは」

そう言いながら、紫電は先程であつた少女のことを思い出していた。

その後、寝台の中に入り、明日に向け眠った。

翌日、紫電は許昌を出て、白竜を呼び、濮陽經由南皮への道を進んでいった。

この先に彼を待っているのは何なのか？

それは、誰にも分からない。

第十三話（後書き）

あとがきは、コラボの後に書いております。

コラボ作品　く白き錬装士との出会い（前書き）

こちらは、コラボ作品です。

コラボのお相手は、フオウルさんが投稿しておられる『白き錬装士、恋姫世界に旅立つ』です。

なので、そちらを読んでからお読みになる方が良いでしょう。

時系列は、こちらの世界　『紫雷の龍』側は、雷魔こと紫電が洛陽を追放されて、すぐの時です。

そして、あちらの世界　『白き錬装士』側は、「デス　ランディの日記」という話の直後あたりのようです。

初のコラボで、少々苦戦しましたが、フオウルさんと力を合わせて作ったので、楽しんでみてください。

では、どうぞ！

コラボ作品　く白き錬装士との出会い

月や星の明かりが痛く感じられるほどに降りそそぐ、そんな夜。

すっかり冷たくなった風が、何の遮蔽物もない荒野に佇む人物に容赦無く吹き付け、唸りをあげる。

全身を風に弄ばれているのを気にもとめず、その人物　頭から
スッポリと被っている外套から、旅人と察せられる　夜天を仰
いでいた。

旅人自体はそう珍しいものではないが、一人きりというのは考えものだった。

このご時世に一人旅をするような者は、よほど世間を知らない愚者か、腕に自信のある強者かのどちらかなのだ。

しかし、その点でいえば、この人物は後者に当たるようである。

体格の良さや何気ない一つ一つの挙動が洗練されたものであることから察するに、只者ではないことは明らか。

夜の闇と月明かりで彩られた蒼色の視界に混じり合うかのように、フードの端から覗いている髪。

そして、月明かりを反射するたびに黒光りする色眼鏡。サングラス

どこか不気味でいて厳か。

一種の幻想世界の住人のような雰囲気放つ旅人の口がゆっくりと開かれていく。

「世界が……動き出そうとしている。もう一つの大きな世界に向かつて……いや、これは引き寄せられているのか……」

空には十六夜が輝き、他の光を打ち消してしまいそうなほどの光度を誇っているにもかかわらず、澄んだ空には星の海が漂っていた。

これだけでも十分綺麗な光景なのだが、旅人には何か別のモノが見えているようだ。

「そうか、お前にはまだ往くべき道が……交わりし運命が待っているのだな」

そう言つて、旅人は微笑を浮かべたようだった。

目元と口元の力を抜いただけの、あまり人間らしくはない笑み。

しかし、そこに万感めいた想いを乗せて旅人は詠う。

託宣を告げる預言者のごとき静謐さをもって。

「行くがいい、天の御遣い。

一億の原初を連れて、一億の終焉を連れて、一億の邂逅を遂げるために！」

旅人の声に呼応したかのように、星は輝きを更に強め、流れ星となつて過ぎ去つていった。

* * * *

「……流れ星が、随分大きかったな」

遙か遠い夜空 世界は違えども同じ時間に を、ひとすじ
の流れ星が翔けていく。

その様子をしばらく見つめ続ける少年たちの心は、徐々に重なり始めていこうとしていた。

* * * *

「 どこだよ、ここは……? 」

百日の旅団長であり、天の御遣いと認知されつつある少年 ハ
セヲは、気がついたら森の中にいた。

鬱蒼^{うつそう}と生い茂る木々の隙間から、若干茜色が混じった木漏れ日が差し込んでいる。
太陽の位置をハッキリとは確認できないが、どうやら夕刻が近づいているようだ。

ひとまず周囲の状況を把握し、直前までの経緯を振り返るハセヲ。

一連の行動が手慣れているのは、（悲しいことに）こういった事態

に慣れつつあるからだろう。

目が覚めたら、全く知らない場所にいたという経験はこれまでもあったし、ただでさえ、いま自分が置かれている状況
0年前の異世界にいる
が状況なのだ。
180

何が起こしても不思議ではないのだから。

事実、普通なら取り乱すのが当たり前前の状況であっても、ハセヲは比較的落ち着けていると自覚していた。

（カイトのせいでお開きになった、アイテムのお披露目を始めようとしたところで……）

ギルド倉庫へと繋がる穴をデス ランディに開いてもらい、そこに手をつ込んだ途端、”逆に引きずり込まれてしまった”のだ。

いくら力を込めて抗おうとも、徐々に飲みこまれていく身体。

朱里や雛里が大慌てで叫びたてていることと、まさかの事態に驚くタイミングを逸してしまったハセヲはどこか呆然としながら、すっかり飲みこまれてしまった右半身を見つめていた。

「これは……ギルド倉庫に繋がっている穴じゃないブヒ!? なんだってこんな……とにかくいいブヒか、ハセヲ! 必ず助けてやるブヒから、出口となった場所からあまり離れずに待ってるブヒよ!」

珍しいデス ランディの心配そうなセリフを聞きながら、ハセヲの身体は完全に飲み込まれ、意識も落ちてしまった
というわけなのである。

「助けを待つつつつても、どれだけ時間がかかるんだか。とりあえず、飲み水は大丈夫そうみてーだが……」

木々のそよぐ音に混じって聞こえる水のせせらざらしき音にハセヲは気付いていた。

少しかかり草をかき分けながら進んでみれば、予想通り川を発見。山魚も泳いでいるのを確認したハセヲは、気持ち的に大分楽になった。

風たちから教えてもらった食べられる山菜などを見繕えば、数日程度なら何とかなるだろうと見立てたところで……

「ん？ 煙が立ってんな……こんな山奥に誰かいんのか？」

多少景色が開けたことで覗いている橙色に染まった空に、ひとすじの煙が立ち昇っているのを見つけた。

俗世から身を離れた隠者が住んでいると言われても信じられそうな場所に、誰がいるというのか。

まさか、本当に隠遁者がいるとは思えないが、狩猟で生計を立てている者でも、こんな場所に住んでいるのかは疑問である。

「……よし」

外界から切り離されたような世界。
歓迎も拒絶もない、ただそこに広がる森

その中を、煙の方へと向かう決心をしたハセヲは、ゆっくりと歩き出した。

目算でも見当がついていた通り、ほどなくハセヲは目的地に辿り着いた。

どうやら河原のスペースを利用して、生活をしている者たちがいるらしい。

近づくにつれて強くなっていた香ばしい匂いから予想はできていたが、焚火の周りに川で採ったのであろう山魚が突き刺されている。

二十本はあることから、四、五人はいるのだらうと推測された。

大木の裏に身を隠して息を潜めつつ、続いてハセヲは人の気配を探り始める。

（静かだよな……この近くには誰もいねーのか？）

時折、火が爆ぜる音や野鳥の鳴き声が聞こえる以外には、気配らしい気配は感じられない。

なので、誰かが戻ってくるまでこのまま待機し、様子を見るかと判断した。

神経を研ぎ澄まし、ささいな変化にも反応できるよう、五感を周囲に溶け込ませていく。

（さあ、鬼が出るか蛇が出るか……）

とはいえ、長時間これを維持できるほどの錬度は持ち合わせていないハセヲ。

しかし、魚の焼け具合を見るに、間もなく誰かは戻ってくるだろうという希望的観測を抱いての判断だった。

そしてそれは 最悪の形で、現実のものとなる。

「 動くな」

「!？」

突如、背後に生まれた声。

直前まで全く感じ取れなかった強大な気配を受け、ハセヲの目が大きく見開かれる。

次いで、声にならない悲鳴 実際はのどが震えただけ を
あげて硬直した。

胸を剣で貫かれたかのような衝撃。

体中の毛穴という毛穴が開き、そこから冷たい汗が噴き出ていく。

相手は感情さえも殺しきったかのような冷たい声で静止を促してきたが、それ以前に全身が訴える寒気でほとんど動けそうにもない。

（嘘だろ……？）

呻くことしかできない。

訳が分からなかったが どうか、自分は鬼や蛇どころか『龍』にでも出くわしてしまっただかのような、軽く泣きだしたいような心境に陥っていた。

無論、諦めているわけではないが…… やすやすと背後を取られた事実に愕然としながらも、必死で次の行動を考え始める。

「お前は何者だ？ 俺を消すために送られてきた刺客にしては穩行がなっていないが…… とはいえ、かなりの実力はあるようだな。

警戒はしても殺気は出していないあたり、『本物』ならかなりの曲者だが……」

「……」

ハセヲが必死に心を落ち着かせつつ、状況を打開するための方策を考えていたところで、相手から声がかかる。

少しだけ露わになった声音は、若い男のものだと察せられた。

男も若干迷っているのか、先ほどまで叩きつけられていた覇気が和らいではいる。

しかしながら、依然として予断は許されない。

刺客に狙われていると零しているあたり、男にも相応以上の事情があるようだ。

まあ、こんなところに住んでいる時点で『訳あり』なのは確定だが。

「俺は怪しい者じゃない。それを証明する手立てはねーが、信じてもらえると思う。ああ、それとな……」

「……？」

男がこちらを刺客の類だと思って処断を迷っているのなら、その意気を挫く必要があった。

「わりと腹が減っててよ、よかつたら分けてもらえねーか？」

「……」

上手い手とゆーか、正直ビミョ　な気の逸らし方ではあったが。

ハセヲの発言　まんざら嘘と言つ訳でもない　により、張り詰めていた空気は弛緩しはじめていた。

目論見通りの結果を得られたものの、何かを喪失した感が否めないハセヲであった。

とにも、二人は出会いを果たす。

「それで？　ここはどこなんだ、雷魔？」

軽く自己紹介をしているうちに、完全に夜の闇に覆われてしまった森。

そこで結局、御相伴に預かれることになったハセヲは、一息ついたところで問いかけた。

視線の先で、姓を雷、名を魔、字を霸龍と名乗った　　しかも同年齡らしい　　少年が、どこにそんなに入るんだと思えるほどの魚を平らげている。

背は高い。

筋肉質ではあるが、締りの良い肉つきをしているおかげか、細い印象さえ受ける。

顔は目つきが少しキツイが、端正なもの。
髪の色は紫。瞳も濃い目の紫色をしている。

また、初めて正面から向き合った際に違和感を感じたハセヲは、ほどなくその正体に気付くことができた。

彼の瞳孔が、龍の目のように縦に割れていたのだ。

どこか浮世離れた風貌の持ち主ではあるが、圧倒的な存在感を放っている少年。

彼は手にしていた魚を平らげると、答えを返してくれた。

「ここは泰山のふもとに広がっている森だ。少し前からここで修行を始めててな、今夜の晩飯を調達してたところにハセヲの気配を感じ

じて、様子を窺ってたんだ」

一人で山籠りをしているという雷魔。

初めこそ、他にも誰かいるのではと思っていたハセヲであったが、
ほぼ全ての魚を平らげてしまった様子を見て納得させられた。

何でも冤罪をかけられて追放処分を受けた末に、ここに落ち着いたらしい。

洛陽でそれなりの身分に就いていたようだが、本人はそんなことを
気にかけるでもなく、気楽に接してくれることに、ハセヲは好感を
覚えた。

「泰山つてのがどの辺にあるのかよく分かんねーんだが、幽州から
だと遠いのか？」

「そりや遠いに決まってるだろ。幽州からみりや、ずっと東方にあ
たるんだ。なんだって用があるわけでもないのに、こんなとこまで
やって来たんだよ、ハセヲ？」

「いや、それは俺の方が聞きたいことだな。……って、そんな視線
向けんな！俺にだって意味分かんねーことなんだよー！」

ジトーっという音が聞こえてきそうな半眼でこちらを見据える雷魔
の視線がちくちくと突き刺さる。

ハセヲとしても、同じようなことを言われれば同様の反応を返すで
あろうから気持ちは分かるのだが、それでも事実なのだからと開き
直るしかなかった。

「それでも助けが来るアテはあるから、しばらくはここで待機するつもりなんだが……」

「ならよ、俺の修行に付き合う気はないか？」

「……ふーん」

何をしようと考えていた訳でもなかったハセヲの意識に、その誘いは大変魅力的　　後のハセヲは、この時の自分を殴り倒してでも止めたであろう　　に聞こえた。

気のないような空返事を返しつつも、表情に興味を滲ませつつ口を開く。

「山でする修行ってーと、滝に打たれたりとか瞑想したりとか崖登りとかか？」

「そうだな、そういったこともする。肉体的強化はともかく、精神的強化を行うなら、ここみたいな場所は最適なんだ。

具体的にどんなものかは……体感する方が分かりやすいな。ちよっと立ってくれ、ハセヲ」

言われた通りに立ちあがり、5mほどの距離をとって対峙する。

そのまま雷魔は何でもなしのように言ってきた。

「よし、いつでもいいから打ち込んでこいよ。全力で構わないぜ」

特に構えらしい構えもとらず、精々いつでも動けるよう踵を浮かし

ている程度。

舐めているわけではない　雷魔の真剣な顔からそう判断したハセヲは、拳を固く握りこんだ。

（いいぜ、そこまで自信があるならやってやろうじゃねえか！）

好戦的な思考とは裏腹に、ハセヲは火照り始めていた身体を落ちつけようと呼吸を整える。

新鮮な空気を肺に満たし、動悸が正常近くに戻ったことを、雷魔に向けていた大部分の意識の片隅で把握した瞬間、

（　いけ！）

雷魔が変わらず静止しているのを目に収めつつ。

全身の力を弾けさせ、渾身の踏み込みからの正拳を繰り出したが、

「……え？」

次の瞬間には、雷魔がハセヲの懷に潜り込んでいた。

同時に優しく触れるようにみぞおちにあてがわれた拳。

それは、これまでのどんな武器よりも恐ろしい凶器に感じられる。

身体の勢いは止められそうにないため、回避も防御も不可。

未だ相手に届いていないハセヲの拳と、こちらのみぞおちに触れている雷魔の拳。

どちらが先手をとれるなど考えるまでもない。

覚悟を決めることしかできないハセヲに、その一撃は放たれた。

「っだああー！？」

派手に後ろに吹き飛ばされ、大地に口づけすることになってしまったハセヲだった。

「戦闘を行うに当たって効果的な方法の一つとして、さっきみたいな相手の意識の外　　瞬きした瞬間とか、息を呑んだ瞬間だな　　を突くって技術がある。先手の意気を潰して、結果として先に攻撃するってわけだ。

どんな相手だって、初動の際には僅かなり意識に空白ができるもんだ。そこを突ければ勝ちの可能性はかなり高まるぜ」

思いのほか、ダメージが少なかったハセヲはほどなくして立ちあがり、雷魔から先ほどの講釈を受けていた。

踏み込んだ足をそのままに軽く拳を押しこんだだけの一撃（ようするに自分の突撃の威力で自滅しただけ）ですませたので、雷魔としては十分に配慮していたのである

といっても、雷魔が言う技術は理論上有効な手だということはあるが、実践するとすれば難易度は激高なものだ。

そう考えていた心境が顔に出ていたのか、雷魔はニヤリと笑みを深めながら、人差し指をたててのたまった。

「誰かが言っただろ。こーいうのは、考えるんじゃなくて感じるもんだ。考えてからじゃ間にあわないからな」

（その元ネタは、こんなに昔からあったのか……）

ハセヲが場違いな感銘を受けているとはつゆ知らず、雷魔は説明を続ける。

「相手の呼吸、重心の移動、筋肉の収縮。これらを意識しなくても自然と把握できるようになれば完璧だな。向き不向きもあるから完全習得できるかどうかは別としても、やってみて損はない。」

そもそも、本気で強くなりたいんなら無理だろうが無謀だろうがやるしかないだろ？ 死ぬほど頑張ってみて、それでも駄目だったらそこで諦めりゃいい。

別にそこまでハセヲに求めているわけじゃないが……それでも一緒に修行すれば今よりは確実に強くなれることは保障するぞ！

自分でも今日初めてあった男に執着しすぎでは、という意識が雷魔にはあった。

嘘はついていないようではあるが、それでも隠しごとがあるのは明らかにハセヲ。

しかし、それは自分も同じことだと雷魔は分かっていたし、詮索するつもりもなかった。

それでも、ハセヲの瞳に宿る意志を^{ちから}目にした雷魔は、ハセヲに対し

て興味を持ち始めていたのだ。

己の利益を何よりも優先する役人たちの浅ましさを嫌というほど見せられた雷魔。

沈みゆく漢王朝^{ふね}の舵取り争奪戦の犠牲者といえる雷魔にとって、ハセヲという存在は暗闇の中で道標を示す灯火のように思えた。

未だ、荒削りの原石のような獲物^{ハセヲ}を前にして、同じ『武』を抱く者としての心が躍る。

自分もどれだけの力を身につけられたかは実戦を通してみないと分からない点もあり、雷魔から見ればハセヲへの勧誘は自然なことであつたのだ。

「そうだな、確かに他にすることも思いつかねーし……世話になる、雷魔。それとも師匠って呼んだ方がいいのか？」

「やめとけ。そんな殊勝なタマかよ、お前は。まだ全然お前のことは知らねえが、それくらいは想像つくぞ」

「ああ、そりゃあ助かるぜ。じゃあ雷魔、よろしく頼む」

「おう、こちらこそだ、ハセヲ」

二人は拳を挨拶代わりとばかりに打ち付け、どちらともなく微笑をこぼす。

ここにきて、ようやく穏やかな夜が始まりを迎えたようだった。

しかし、ハセヲは気付いていなかった。

雷魔の『龍』を彷彿とさせる厳かな瞳孔が、この瞬間に限って『猫』のような悪戯めいた光を宿していたことに。

そんな事もあり、雷魔とハセヲは、雷魔の提案通り一緒に修行を始めた。

その内容は、手合わせや崖登り、それに滝修行などを行っていた。

しかし、その様子は雷魔がハセヲを弄って楽しんでいるように思えた。

例えば

崖修行にて、

「ほれほれ。早く登って来ないと切っちまうぞ?」

「うるせ! 少し黙って……!」

「……ほう、そんな口利くか。じゃあ、この綱を……」

「ま、待て！ 今登るから、切らないでください……」

そんな風に、崖修行ではなくてはならない（というか命に関わる）命綱を先に登った雷魔が手に「短刀」を持って、切ろうとしたりして、ハセヲの焦る姿を見たりして楽しんでいたり。

滝修行にて、

「どうしたどうした、足が震えてるぞ？ もう限界か？」

「震えてねえ！ まだいけるー！」

「……………」

「うお！？ ちょー！？ やめ……おわあ！？」

ドパアアアアアアン！！

岩の上に立って滝に打たれるのだが、少し限界が近づいてきたハセヲの足を蹴ったり、払ったりしてハセヲを滝壺に落としたり。

手合わせでは、

「秘奥義・重装甲破！」
ひくおくぎ じゅうそうこうは

ドガアアアアアアアアン！！

「おい！　今は受けても喰らってもヤバかったんじゃないか！？」

「ちゃんと避けてんだから気にすんな。それよか次いくぞ、次」

「ハセヲ……、少し現実を知ってもらおうか」

「うつせー！　見た目のわりに大人気ね　奴だな」

「大人気ないも何も、俺らはタメだろうがつー！」

「嘘だつー！！！！　絶対サバ読んでるだろ、お前！　どう考えても、十代の雰囲気じゃねーんだよ！」

「ハセヲ……お前の負けだ。お前は　俺を怒らせた。敗因はただそれだけだ」

ヒュン……

「な！？」

ドガ！！　ドサアアア！！

「ぐは！？」

「よしよし、これで通算97勝無敗。100勝まであと3つだな」

「つち、く……しょう……」

「さあ、ハセヲ。敗者は勝者に従うのが道理だ。では、手始めに…

…「ごめんなさいは？」

ハセヲの無茶な攻撃と、年齢に対する暴言にキレて一撃でのすと、倒れているハセヲの頭を踏みながら、ハセヲに謝罪を求めたり。

そんな事をしながら、彼らの修行は恙無く（？）進んでいった。

そして、彼らが出会って数週間後。

今日も今日とて修行に励んでいた。

「てんかむそついつなま天下無双飯綱舞い！！」

ハセヲはバク転の勢いを借りての蹴りで雷魔を空中に打ち上げた後、地に足をつけるやいなや追撃を仕掛け、『こくう虚空ノ双牙そうが』で怒涛の六連撃を無防備な雷魔に叩き込もうとした。

しかし、雷魔はハセヲが追撃しに来た瞬間「空中で」体勢を立て直し、技を放つ。

「せんくうれっは閃空裂破！！」

横回転で上昇しながら雷魔は、ハセヲを切りつける。

ガキン！

「ぐっ……！」

ハセヲは咄嗟ではあるが何とか防ぐものの、空中であるため踏ん張ることは出来ず、そのまま吹き飛ばされてしまう。

だがそれでも、なんとか受身を取り雷魔の方を向くと、目の前に雷魔の剣先が向かってきており、慌てて横に転がって回避する。

雷魔はそれを見て、剣先を戻し、着地した後すぐにハセヲの方に向く。

するとハセヲは遠めに距離を開け、武器を『シラード』に変えていた。

「うおおおおおおお！！」

ハセヲはそう叫びながら突っ込んできた。

そして、突っ込んだ勢いのまま『シラード』を振り下ろす。

だが、次の瞬間

ガアアアン！！

何か光ったと思ったら、そんな音と共に『シラード』諸共思いっきり吹き飛ばされるハセヲ。

その顔には驚きの表情が張り付いていた。

なぜなら、雷魔が使っている二本の剣では、防がれるならまだしも

吹き飛ばされるとは思わなかったからだ。

実際、雷魔が現在使っている武器は、片方は日本刀のような剣である『黄竜』^{「くわうりゅう」}で、もう片方は鏢のない片刃の直刀である『飛竜』^{「ひりゅう」}を使っている。

この二つでは、大剣である『シラード』を弾いて、自身をも吹き飛ばすことは難しいだろう。

では、どうやって？

答えの出てこない事を考えていると、いつの間にか自分は倒れており、その首には雷魔の『黄竜』が突きつけられていた。

「これで99戦99勝だな。100勝まであと1勝つと」

「……ハア……ハア……ち……ちくしょう……」

雷魔はそう言いながら、顔をにやけさせ、ハセヲは悔しそうに顔をしかめる。

「さて、ハセヲ。俺が勝ったから……わかってるよな」

「はあ……わかってるよ……」

雷魔の言葉に溜息を吐きながらも、ハセヲは起き上がり大きな目の桶を二つ持って歩き始めた。

「んじゃ、水汲みよろしく」

その後姿に雷魔は機嫌良く声をかけた。

ハセヲの姿が見えなくなると雷魔は焚き火の準備を始めた。

「……さっきは少し危なかったな」

そうつぶやきながら手ごろの石を拾う。

（まさか、アレを使って防ぐ事になるとは……ハセヲが成長してる証拠かね？）

そんなことを考えながらも、囲いを作り、次は薪となった。

「さて、薪を拾いにいかないとな」

そう言って、近くの茂みに入ろうとする雷魔。

すると……

ガサガサ……

いきなり向かおうとした茂みが揺れた。

「なんだ？」

雷魔は若干警戒しつつ、『黄竜』の柄に手をかけながら近づく。

その瞬間

「アアアアアアアアアア！」

そんな叫び声と共に橙色の何かが飛び出し、雷魔に襲い掛かってきた。

「な！？」

いきなりの事で驚きつつも、相手の攻撃を横に回転しながら避け、相手の腕を掴み、回避の勢いと相手の勢いを利用し、投げ飛ばす。

襲撃者は、投げ飛ばされても空中で受身を取り、着地したと同時に雷魔に突っ込んできた。

「ちっ！」

そう舌打ちしつつも、『黄竜』と『飛竜』を抜き応戦する。

ギン！……ギン！ガン！ガガガガガ！ガアン！！

それから、しばらくの間金属のぶつかり合う音だけがあたりに響く。

だが、流石に襲撃者の猛攻に焦れてきたのか、雷魔は相手の攻撃を弾いた後、自身の技を使う。

「一旦吹っ飛べ！ 獅吼翔破陣！！」
しほこうはくじん

雷魔は隙の出来た相手の身体に肩から突っ込み、そこから腕を振り

ぬくと同時に獅子の形をした気をぶつけ、少し相手を浮き上がらせた後、空中に飛び上がりそこから地面を叩きつけ、その中心から衝撃波を発し相手を吹き飛ばした。

これには、先程まで猛攻を仕掛けてきた襲撃者もそのまま地面に叩きつけられた。

襲撃者は、しばらく倒れていたが、すぐに立ち上がり、構えを取る。

だが、今は先程のようにすぐに襲い掛かって来ず、様子を見ているように感じる。

雷魔はそうなって初めて相手の容姿や武器を確認できるようになった。

そして、相手の姿を見て驚く雷魔。

その姿は、人の形をしているが、異形な感じがした。

その理由は、全身が継ぎ接ぎだらけで、また目に生氣があるのか分からない。

だが、もっと驚くべき物が襲撃者の手に握られていた。

（あれは……ハセヲが使っている双剣に似ている……いや、それ以上だ。まさに瓜二つ……）

そう襲撃者の武器が、ハセヲの使っている双剣『虚空ノ双牙』と瓜二つだったのだ。

（となると、ハセヲの世界の関係者か？）

そう考える雷魔。

ハセヲには言っていないが、雷魔はハセヲが異世界人かと思っていた。

今まで追及しなかったのは、確信がなかったのと、詮索する気はなかったからだ。

「お前は何者だ？」

雷魔は無駄だと思いながらも襲撃者にそう質問する。

「アアアアアアア………」

無反応とまではいかないが、相手の反応は質問に対してではないとわかった。

「……だんまりか」

予想はしていたが、流星に少し気落ちする雷魔。

すると、襲撃者は足に力を入れ、突撃の構えを取る。

「来るか………」

それを見て雷魔も応戦の構えを取る。

「アアアアアアアアアアア！！」

それを見て、突っ込んでくる襲撃者。

その瞬間

「やめろ！ カイト！！」

そんな雷魔にとってここ最近聞きまくっている声が響き渡った。

すると、襲撃者の動きがその場で突っ込んだままの体勢で止まり。

しばらくして、ゆっくりと直立になっていった。

そして、雷魔はそれを確認した後、ハセヲに振り向いた。

「お前の仲間か、ハセヲ？」

両手に水の入った桶を持ちながら、こちらに向かってくるハセヲに
そう聞く雷魔。

「ああ、そうだ」

ハセヲは水汲みか、それとも先程の事でなのか若干疲れたような返
事をする。

「なるほど。 ハセヲと同じく、この世界の人間ではないんだな」

ハセヲはその雷魔の言葉に「そうだ」と答えそうになるが、彼の言
葉の中に聞き逃せない言葉があったのですぐに聞き返す。

「雷魔。今、『この世界の人間』って言ったか？」

そのハセヲの質問に雷魔はしまったといった顔をする。

だが、すぐに顔を元に戻し、ハセヲに面と向かって言い放った。

「……ああ」

ハセヲはその雷魔の返事に少し混乱するが、気を落ち着かせ、さらに質問をした。

「どこから気付いてたんだ？」

「ほぼ最初から。この世界の地名を使っではいるが、明らかにこの世界のものではない服装。それに、武器を隠し持つかのような技術。そして、気ではない何か特別な技の発動。これらのことがあって疑わない方がおかしい」

雷魔の分析力に少々驚くハセヲ。

それでも、納得のいく内容だった。

「雷魔。あんた……本当に何者だ？」

ハセヲはここであえてそういう質問をした。

「……そうだな。ハセヲの正体も少しわかってきたし、俺自身についても話しておくか」

そう言って、雷魔は真剣な顔をする。

その様子にはセヲの背筋もなぜか伸びる。

「俺はこの世界では、最強部隊として名高い禁軍特殊警護部隊『天龍』の元隊長であり、現皇帝である、漢王朝第十二代皇帝劉宏の義弟だ」

雷魔の言葉に心底驚いた顔をするハセヲ。

それから、雷魔は自身の過去の経歴を話し始めた。

半刻後。

雷魔の話が終わり、ハセヲは少々難しい顔をしていた。

「じゃあ、次はハセヲの番だな」

「……………は？」

その雷魔の言葉に少し気の抜けた返事をするハセヲ。

「だから、俺が話したんだから、次はお前ってことだよ」

「はい？ え？ ……はい？」

少々混乱しているのか、雷魔の言葉に返事をするハセヲの言葉は変になっていた。

だが、すぐに落ち着き、覚悟を決めたのか顔を真剣な表情に変えた。

「……わかったよ」

そう言っただけは、ハセヲのこれまでの経緯についての話が始まった。

さらに、半刻後。

雷魔は何か納得したように頷いていた。

「なるほどな。そんなことがあったのか……しかも、こことは違う外史があるとはな……」

そうつぶやいた後、何かを考えるそぶりを見せ、何か思いついたかのような感じに顔を上げた。

この時、ハセヲの中では嫌な予感がしていた。

「んじゃ、あいつ　カイトだけ？　あいつが来たってことは帰るってことか？」

「まあ、そうなるな」

雷魔の質問に素直に答えるハセヲ。

ちなみに、カイトは現在ハセヲの傍で直立不動で立っている。

「んじゃ、帰る記念に１００戦目をこれからするか！」

「は？ …… はああああ！？」

突然の雷魔の発言にハセヲの叫び声が周辺に木霊した。

雷魔の突然の発言から、四半刻後。

二人は距離を開けて立っていた。

あの後ハセヲは、色々反論して断ろうとしていたが、雷魔に氣による回復術で体力を回復させられ、初めて出会った時並みの圧力を受け、頭を縦に振ってしまい、今に至るわけである。

閑話休題

すると、雷魔がある提案をしてきた。

「この１戦はお互い隠し玉とかをすべて出して、全力で、本気で闘^やろっぜ」

「……は？」

そう言った瞬間、雷魔の周りに紫色の雷が走ったかと思うと、彼からものすごい圧力がハセヲに襲い掛かり、若干下がってしまう。

（なんつー圧力だよ！？　これがこいつ　　雷魔の本気かよ！？）

ハセヲはいきなりの圧力に内心震え上がっていたが、雷魔はそんなことに気付かずに次の行動に移っていた。

それは、右掌をハセヲに向けていたのだ。

「さつき手合わせで最後の方にお前を大剣ごと吹き飛ばしただろ？
あれはな……この武器を使ったからなんだよ」

バシユウウン！

雷魔がそう言った瞬間、右掌が一瞬光り、その手には今までどこにもなかった大鎌が握られていた。

「これが俺の隠し玉。大鎌『天竜』だ」

このことには流石に心底驚いたハセヲ。

だが、雷魔の次の言葉で現実に戻される。

「さあ、ハセヲ。お前の隠し玉。出せよ」

そう言われ、ハセヲも自身の隠し玉　　大鎌『万死ヲ刻ム影』を
換装し、『武獣覚醒』を行使して朱金のオーラを身に纏った。

「なるほど。それがお前の隠し玉か」

「ああ。『万死ヲ刻ム影』だ」

「なるほど……だから、俺の中にあつたこいつがざわついていたのか」

ハセヲの答えに何か納得した様子の雷魔。

すると、そのまま構えを取る。

「さあ、構えろハセヲ。これが最後の手合わせだ」

ハセヲもそれに合わせ、構えを取る。

しばらくの間、両者とも動かないで居たが、木から葉が落ち、それが地面についた瞬間

「ハアアアアアアアアアアア！！」

「オオオオオオオオオアアアアアアア！！」

両者とも相手に対して突っ込んだ。

数刻後。

初めは、お互いの手の内が分からなかったためか、拮抗した戦いになつていた。

しかし、段々と雷魔が押し始め。最終的には、ハセヲの悪いところを指摘しながら、手合わせをしていた。

そして現在、日が沈み、二人は焚き火を囲み、夕食を食べていた。

「なあ、話があるんだろ？」

そう言うのはハセヲ。

雷魔は、ハセヲがバテバテになって倒れた後、手合わせを終了し、最近ハセヲばかりに行かせていた水汲みを済ませた後、ハセヲを起こし、話があると言って、現在に至るわけである。

「ああ」

一方雷魔は、真剣な表情でハセヲを真っ直ぐ見た。

「お前に……真名を預けようと思ってな」

その言葉に、驚きの表情をするハセヲ。

「なんだっていきなり？」

「理由は三つ。俺の予想以上の成長を見せてくれたお礼と、カイトを止めてくれたお礼。そして、前から思っていたことだが、お前の目が澄んでいるからだ」

ハセヲの質問に対しての雷魔の回答に、一瞬目が点になるハセヲだが、次の瞬間には吹き出し大笑いしていた。

「ぶふ！？　クククク……　ハハハハハハハハハハハハ！！」

「なんだよ？　なんかおかしいなことも言っただか？」

そのハセヲの大笑いに心外のような表情をする雷魔。

「い、いや……　ククク……　現実になんな事をいう奴が居るとは思っていなかったからな……　クククク」

まだ、笑いが収まらないのか、少し笑いながらも意見を言うハセヲ。

「俺にはわかるんだよ。これまで色んな奴の目を見てきたからな。本当に善行を積んでいる者はお前のように目が澄んでいる。逆に、悪行ばかりしている者は、本当に暗く濁っていて見るに耐えない」

そう自身の体験談を話す雷魔。

その真剣な言葉を聞き、流石にまじめな顔になるハセヲ。

「だからこそ分かる。お前の目はとても澄んでいて、表では色々反発していても根はいい奴だってことがな」

それを聞いて、ハセヲはなんだか恥ずかしくなった。

「だから、預ける。この世界では命よりも大切な真名を」

「……わかった。受け取ろう」

雷魔の真剣な発言を受け、受け取る決心をしたハセヲ。

何より、ここで断れば雷魔の先の発言をないがしろにしたことになる。

それだけは、ハセヲは許せなかった。

「ありがとう。俺の姓は雷、名は魔、字は霸龍、そして、真名は紫^し電^{でん}だ」

「確かに受け取った。……………これまで色々ありがとな。い、一応お礼は言っとくぞ……………紫電」

翌日。

いよいよハセヲが別の外史へと帰ることになり、カイトの案内でその外史へと繋がっている場所に向かう一行。

「あゝあ、弄れる奴が居なくなるってのはある意味寂しいな」

「やっぱ俺のこと弄ってたのかよお前は!？」

「ハハハ……………冗談」

「ハア……………なんか星がここにいるようだ」

そんな会話をしつつ向かっていると。

前方に異様な裂け目と、誰かが立っていた。

その者の姿がはっきり見えるところまで来ると、ハセヲの顔が引きつる。

「ハセヲちゃん。迎えに来たわよ」

そこには、筋骨隆々で、禿げているのか剃っているのか分からない頭部と、両端に一本ずつ三つ編をして、オネエ言葉でしゃべるおっさんが居た。

「なあ、アレも知り合いか？」

「……ああ。知り合いたくもなかった知り合いだ」

紫電の質問に溜息を吐きながらそういうハセヲ。

「だけれが、知り合ったその日から夢にでも出てきそうなバケモノですってー!？」

「誰もそこまで言っただけだ!」

ハセヲの言葉が聞こえていたのか、ハセヲの言葉よりも悪化したこと言うおっさんにツツコミを入れるハセヲ。

そんな様子になんか苦笑いをする紫電。

「それで？ こいつは誰なんだ？」

苦笑しつつも、おっさんの事について聞く紫電。

「ああ。こいつは……」

「んまあ、カツコイ男の子ねえ。あなたがハセヲちゃんを助けてくれたの？ だったら、お礼のチッスを……!!」

紫電の質問に対して答えようとしたハセヲの言葉を遮って、いきなり近づいてくるおっさん。

「ちょ!?! やめろ! 俺にはそんな趣味はない!!」

これには流石の紫電も慌てる。

「そんなこと言わずに! シムチュウ……」

紫電の言葉を見殺して、尚も近づいてくるおっさん。

「やめろつつてるだろうが!!!!」

ドガアアアア!!!!!

「ぶるうううう あああああ!!!!!!」

流石に、自身の身の危険が最大域に入ったのか、強烈な右フックをおっさん……もとい、化け物の顎にヒットさせ、化け物は数十メートル吹き飛んだ。

「ハア……ハア……で? あの化け物は誰なんだ?」

まだ、動揺しているのか言葉が乱暴になっている紫電。

「ああ……あいつはな……驚くなよ？」

「なんだよ？ 早く言えよ」

もったいぶっていると思ったのか、まだ荒い口調で急かす紫電。

「あいつの名はな……貂蟬すいせんって言うんだ」

「……………は？」

ハセヲの言葉が相当予想外だったのか、少し思考停止する紫電。

「え？ あ？ ……はあ！？」

前世の記憶があるため、その名に対して心底驚く紫電。

「いや、嘘だ……絶対嘘だ……そんなの誰が信じるか……」

紫電はそつぶつとつぶやきだした。

まあ、所謂現実逃避だ。

その後、なんとか紫電を現実に戻し、貂蟬が戻ったところで、本題に入る。

「……というわけで、管理者である私が来る事になって、ハセヲちゃんになにかあったときのためにカイトちゃんを連れてきたわけ」

他にも来たい奴が居たそうだが、流石に幹部クラスだったのでその辺は説得したらしい。

「さて、ハセヲちゃん。そろそろ帰らないといけないんだけど。なにかこの子 雷魔ちゃんに言いたいことはないの？」

その言葉を聞いて、少し考えた後、ハセヲは紫電の方へ向く。

「紫電。短い間だったが色々楽しかったぜ。紫電に色々と教わったこと、向こうでも生かせるように頑張ってみるな」

その言葉に紫電は笑顔になる。

「おう。こつちも色々楽しかったぜ。もう会う事はないだろうが、もし次にあったときは俺の仲間も紹介する。その時もまた一緒に修行とかしような」

紫電がそう言うとハセヲはなんだか照れくさそうな顔をしつつも笑顔になる。

そして、お互いに静かに手を握り合った後、

「じゃあ、元気で」

そう同時に言っつて、ハセヲは帰るために裂け目の中に、紫電はその場から少し後ろに足を向けた。

その様子を見て、若干貂蟬が興奮していたが、紫電に蹴られ裂け目の中に入っつていった。

そして、二人は裂け目が閉じられるまで、手を上げ続けていた。

おまけ（白き錬装士側の世界）

裂け目に入りしばらく歩くと明かりが見え、それが段々と大きくなり、次の瞬間には光に包まれた。

そして、光りが収まったと思うと、目の前には見知った連中が立ち並んでいた。

「あゝ…えゝと……」

いきなりの事で、何を言っているのか分からなくなったハセヲ。

その様子を見て、目の前の三人は明らかにあきれた表情をして、溜息を吐いた。

「な、なんだよ？」

その三人の様子に若干戸惑うハセヲ。

その質問に頭に人形？を乗せた金髪の少女が答える。

「お兄さん。帰ってきたのなら、まず言う事がありますよね？」

その少女の発言にハツとなり、苦笑いをするハセヲ。

（そうだな。「帰ってきた」んだからこれを言わないとな）

そう思い、三人の顔を確り見て、

「ただいま。星、風、稟」

「「「おかえり（なさい）主（ハセヲ殿）（お兄さん）」」」

目の前のこの世界に来て初めて出会い、自分のことを主と認めてくれている大事な大事な仲間にハセヲは確りと帰還の報告をした。

おまけ2（紫雷の龍の世界）

裂け目が消えた後の紫電。

「あゝあ。弄り甲斐がある奴だったんだが、まあ、仕方ないか」

そう言つて、青く広がった空を見上げる。

すると、遠くから蹄の音が聞こえ、その方向に目を向ける紫電。

そこには、それはもう見事な白馬が立っていた。

その体毛は、白というよりも白銀に近く、目や鬣、それに尻尾は青い。それにその身体は通常の馬よりも一回りも大きかった。

その馬は、紫電にとって掛け替えのない戦友であり、大事な仲間

「『白竜』……お前、俺を追いかけてきたのか？」

紫電に『白竜』と呼ばれたその馬は、彼に近づき、鼻をこすりつける。

「そうか……ありがとう」

白銀の錬装士が帰った後、紫電は掛け替えのない友と再会を果たした。

コラボ作品　く白き錬装士との出会い（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

初めてのコラボだったので、どういう感想を頂くのかドキドキします。

とりあえず、楽しんでいただけたら、万々歳です。

さて、本編のほうですが。

今回は許昌で霸王・曹孟徳こと華琳との出会いでした。

紫電ほどの能力があれば、華琳にも目を付けれるのではない、この内容にいたしました。

まあ、色々おかしかったらご意見をください。

次回は、南皮でのお話になります。

では、次回もお楽しみに！

第十四話（前書き）

出来上がりましたので、投稿いたします。

今回は、南皮での話です。

どんな出会いがあるのか？

では、どうぞ……。

第十四話

許昌を出て、一週間後。紫電は、袁紹こと麗羽の治めている冀州・南皮の近くまで来ていた。

「ふう……やつと南皮が見えてきたか。しかし、ここまでの道中、黄色の布を巻いた賊　黄巾党が町や村を襲っていたな。ってことは、黄巾の乱が活性化してきてるってことか」

そう言っつて、これまでの道のりを振り返っていた。

ここに来るまでに、紫電は何度か黄色い布を巻いた賊に襲われていた村や町に出くわした。

その度、紫電がその村や町を守り、少なくともお礼をもらっていたりする。

「いよいよ洛陽に戻らないといけない次期が近づいているようだな。そうなると、南皮には長居出来ないな。なんとかして、朝廷から黄巾党討伐令が出るまでに、幽州まで行きたいしな」

そう言いながら、黄巾党討伐令が出されるまでの計画を頭の中で作る。

「しかたない。南皮では、情報収集だけして、その後、幽州の公孫賛が治めている北平に向かうか」

そう言っつて、白竜に南皮に向かうように伝えた後、再度考え込む。

「しかし、昨日見たあの流星……南の方に落ちて行つたな。あの方角は荊州か揚州の辺りだな。それに最近、巷で噂されているあの占い……確か『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星。その流星は天の御使いを乗せ、乱世を沈静す』だったか？これは偶然か？いや、それにしても出来すぎている……」

そう言つて、思考の海へと入る。

しばらくして、考えがまとまつたのか、顔を上げる。

「しかし、『天の御使い』……それに『乱世を沈静』、ね。本当にその『天の御使い』とやらが落ちてきたのなら、何か起こるかもな」

そう言いながら、紫電はその整つた顔に笑みを浮かべる。

「っと、とりあえず。まずは、南皮へ急がないとな」

そう言つと、紫電は白竜を南皮へ走らせた。

それから、半刻後、紫電は南皮に入っていた。今回は情報収集のみなので、町の人達に南皮の様子などを聞いて回っていた。

「やはり予想通り。麗羽のところもあまり良いとはいえない治安のようだな」

そう言つて、今まで集めた情報を整理する。

「麗羽自身もなんか前にも増して我俣らしいしな。これは、城に行つても話を聞き入れるかどうか」

以前、洛陽で期間限定で学問を教えていたときも、麗羽は文句を言つたりしていた。美羽は、素直な性格なので、紫電の言うことは聞いていたが、麗羽は、真つ向から紫電に食いかかつてきていた。

「しかたない。情報収集だけにしようかと思つたが、一応教え子なんだし、城に出向いてみるか」

そう言つて、紫電は麗羽がいる城へ足を向けた。

一刻後、紫電は町の茶屋でなぜかお茶を飲んでいた。

「……………まさか、門前払いとは」

そう言つて、先程の出来事を思い出す。

とりあえず、紫電は城へと着き、城門の警備の兵に「袁紹に先生が来たと言つてくれ」と頼んだ。

兵は少し訝しげな表情をしたが、すぐに取り次ぐと言つて、中に入つて行つた。

そして、四半刻後、兵が戻ってきた時、驚きの返答があった。

「私には、先生なんて知り合いはいない」と麗羽が言ったらしい。

そんなことはないと言い、再度取り次いでもらおうと思ったが、聞く耳を持たれなかった。

これでは、仕方ないと思い、諦めて現在に至るわけである。

「さて、これじゃ、ここに来た意味がないと言っかなんと言っか。時間が無いし、今回は諦めるか。今度、また来ることにしようかね」

そう言っつて、湯のみに残っていたお茶を飲み干し、勘定を机の上において、宿屋に向かって歩いていった。

麗羽 Side

今日、庭の東屋でお茶をしますと、驚きの情報、というか報告が城門を守る兵からもたらされました。

「城の前に、袁紹さまの「先生」を名乗る男が来ている」と言っつのです。

これには、流石の私も驚きましたわ。なぜなら、洛陽から追放され、行方不明になっているはずの「先生」が今、この城の前に来ていると言っつんですもの。

最初は、丁重に招きいれようと思いました。ですが、今の私を見て「先生」はどう思うだろうか？と思うと、怖くなり、咄嗟に、「私には「先生」なんて知り合いません。その者を追いつきなさい」といつてしまいました。

兵は、それを間に受け、そのまま報告に行つてしまいました。

流石に、これは後悔しました。もし、あの「先生」だったらどうしましよう？と悩んだりもしました。

ですが、また来てくれたら、今度はちゃんとお招きしようと思いましたが、

ですが、それ以降、「先生」を名乗る物が来た、という情報は私に上がって来ませんでした。

翌日も、その報を待ちましたが、それでも上がってくることはありませんでした。

その時、私は思いました。

昨日現れた「先生」が本物なら、自分は見捨てられたのではないかと。

そして、その日は後悔だけが心を埋め尽くし、何もやる気が起きませんでした。

その時、ふと思ったのです。見捨てられてしまったのなら、今度は、見直されることをすればまた遭いに来てくれるのでは？と。

なので、私は、その日から、一生懸命頑張ることにしました。

「先生」に見直してもらえるように。

麗羽 Side Out

紫電 Side

袁紹こと麗羽がそんなこと思っているとき、紫電は、既に南皮から出て、幽州への道のりに乗っていた。

「さて、もう時間がない。急いで幽州に行つて、最後の英雄、劉備りゅうへい、そして、幽州の太守、公孫瓚を見ないとな」

そう言つて、紫電は、幽州への道のりを急いでいった。

すれ違ふ思いと、ある決意をする袁紹こと麗羽。

だが、この決意が今後、更なる悲劇を起こす原因となるとは、誰にも分からなかった。

第十四話（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

今回は、南皮ということで、こつこつ感じにしました。

変なところがあれば言ってください。

そして、あの占い（予言？）と流星が出てきました！

その正体とは！？……まあ、バレバレでしょうが……（苦笑）

さて、次回は幽州にいきます。

そこで、何があるのか？

お楽しみに！

第十五話（前書き）

お待たせしました！

やっところさ更新です！

大学が始まって少し忙しかったので遅れました！！

さて、今回は幽州の？県にある村へと訪れます。

そこでどんな出会いが待ってるのか？

では、どうぞ……

第十五話

南皮を出て、数日後。紫電は、ゆうしゅうたくけん幽州？県にある、とある村を訪れていた。

「さてと、ここに嶺れいが居るはずなんだが」

そう言つて、辺りを見回す。

「しかし、のどかな所だな。やはり結構北の方だから、黄巾党も少ないのかね」

そうこの村は、世間が黄巾党で騒がれ始めているのに、とてものかだった。

「うーん……どの家が嶺の家かわかんねえな。……仕方ない。村人にでも聞いてみるか」

そう言つて、紫電は、今回、この村を訪れた目的の人の家を探すため、村人に聞いて回った。

半刻後、紫電は、村人に聞いて回り、目的の家を見つけて、その家の前に居た。

「ここか……」

そこは、この村でもそれなりに大きい家だった。

「そっぴゃ、嶺も私塾を開いていたんだっぴゃ」

その目的の人も静音と同じく、私塾を開いている人物だった。

「さて、お邪魔しますかね」

紫電は、そう言っぴゃ、目的の人物　姓を慮、名を植、字を子幹、真名を嶺が居るという家に入っぴゃいった。

嶺　Side

私は、今、書斎で書を書いているところであっぴゃた。

だが、あるお方のことが頭を過ぎり、集中できなくなり筆を置いた。

「はあ……」

そのお方のことを考えると、自然とため息が出っぴゃまう。

「……………紫電様」

私は、そう呟いて、そのお方　紫電様との出会いなどを思っぴゃ出した。

私は、紫電様に会う前は、洛陽で軍部に所属していた。

日々、民のためには、鍛錬などを怠らずにやっていた。

しかし、軍部の自分の上司が、賄賂を受け取っているところを目撃してしまい。少しこの軍部に疑問を抱くようになってしまった。

それからと言うもの、度々そう言った出来事目撃してしまい。上司たちが腐っていることに気が付き、その現実には、とてもない絶望感を感じてしまったのだ。

そして、最終的には、この軍部を辞めてしまおうかと思ったりもした。実際、私は、学問にも精通しており、文官のような仕事も少しばかりはできていた。

そんな時、同じ軍部に所属していた、顔馴染みの者から、その当時、発足したての特殊部隊『天龍』への誘いを受けた。なんでも、その隊の指揮官に私の話をしたら是非とも連れてきてくれと言われたようだ。

私は、最初は断ろうと思っていた。しかし、その者の後ろから現れた少年を見たことにより、少し考えてみようと思った。

その者が言うには、その少年が『天龍』を率いている方だということだ。

その少年は、とても綺麗な目をしており、自分の上司たちとは違って、誠実な雰囲気を感じ出していた。

しかし、どう見ても齡が十八にもいって無さそうな少年だったため、一部隊を率いる事に疑問が出てきてしまった。

さらに、話を聞くと、その少年は、あの劉宏様の義弟であればと聞き、少し驚きを隠せなかった。

そして、その後、劉宏様の義弟の誘いなら、断ることは出来ないと言って、その少年　紫電様が率いる『天龍』への移籍を承った。

その時は、単に「劉宏様の義弟だから」という理由で、所属を決めてしまったが、それでも、その少年が率いることには疑問を持っていた。

しかし、度重なる修練や賊などの討伐、それに会話などを通して、紫電様の実力や、その性格に次第に心が惹かれていった。

そして、最終的には、紫電様に対しての恋心が芽生えるほどであった。

しかし、彼は劉宏様の義弟。なので、手を出すのは無礼だと自分に言い聞かせ、ずっと自分の気持ちを押し殺していた。

しかし、とある日、仲間の策略により、紫電様と二人きりの時間が出来てしまい、その日は紫電様と町に出かけたり、そこでお茶を飲んだりして、まるで逢引のようなことをした。

そして、その日の晩、意を決して、紫電様に自分の気持ちを打ち明けたところ、紫電様は、快く受け止めてくださった。そして、その後、私と紫電様は……………。

その翌日からは、とても輝いた日々を過ごした。恋敵はたくさん居たが、それでも、互いに応援しあったりして、毎日が楽しい日々だった。

しかし、『天龍』が発足してからわずか二年後。その事件は起こった。

紫電様が、謀反と言う濡れ衣を着せられ、洛陽を追放されてしまったのだ。流石の私も、その時は怒りにとらわれ、猛抗議をした。

だが、私の意見は却下され、さらには、私も官位などを剥奪され、この？県へと追いやられた。

そして、それから六年。紫電様のことを思いつつも現在に至るわけである。

そうして、昔のことを思い出し、再度溜息を吐いた。

「はあ……………」

その時、

「なんだ？溜息なんて吐いて。幸せが逃げて行っちまうぞ？」

そう言った、懐かしいお方の声を聞いたと同時に、誰かが抱きついてきた。

嶺 Side Out

紫電 Side

紫電は、家の中に入り、嶺の姿を探していた。

「おい。れーい？……いないのか？」

そう呼びかけても出てこないの、色々部屋などを探し回っていた。

すると、書斎らしき部屋の扉が開いてるのが目に入った。

「ここにいるのか？」

そう言つて、紫電はその部屋の中を覗き込んだ。

「はあ………」

すると其処には、何か書物を開きながらも筆を置いて、窓から遠くを見ながら溜息を吐く、短髪で茶色の髪の毛の女性 嶺が居た。

それを見て、少し悪戯心が芽生えた紫電は、そつとその背中に近づき、抱きついてこう言った。

「なんだ？溜息なんて吐いて。幸せが逃げて行っちゃまうぞ？」

その瞬間、嶺の体がびくりと反応し、その端正な顔が驚いた表情を

つけながら、こちらを向いた。

「し、紫電……さま？」

「なんだ？お前も静音と同じで、俺じゃないって言いたいのか？」

紫電は、そう言って、嶺の質問に答えながらも、少し顔をにやけさせた。

「い、いえ！そう言うつもりでは！！」

そんな慌てた様子の嶺を見ながら、さらに笑みを深める紫電。

「冗談だよ……久しぶりだな、嶺」

そう言って、紫電は、今度はとても優しい笑みを浮かべた。

「え？……あ、はい。お久しぶりです」

嶺はそう言って、紫電のほうに向き直り、彼に抱き付いた。

紫電は、抱き付いてきた嶺の頭を撫でた。

それから、しばらく和やかな雰囲気の流れた後、嶺はふと疑問に思ったことを紫電に聞いた。

「ところで、紫電様。なぜこちらに？」

「ん？ああ。ちょうど、北平に向かう途中に？県を通るから、ついでに寄ったんだよ。ここで、嶺が私塾を開いているって、襄陽を訪れた時に静音に聞いたからな」

「そうなんですか」

そう紫電のここに来た理由を普通に受け止めた。

「……………それに、嶺に会いたかったしな」

紫電がそう言っただとたん、嶺の顔が少し赤くなった。

「そ、そうですか……………」

嶺は、その赤くなった顔を隠そうとそっぽを向いた。

「そういえば、この六年間、紫電様は何をしてらしたのですか？」

そう言っただ、紫電に追放されてからの出来事を聞いた。

「ああ。あれから、俺はな……………」

そうして、紫電は、嶺にこれまでのことを話した。

一刻後、紫電の話が終わった。

「そうですか。麗羽が……」

「ああ。だが、また今度訪ねてみようと思ってる」

「ええ。そうしたほうが良いと思います」

そう言っで、これまでの出来事のことを振り返った。

嶺は以前、紫電と共に麗羽や美羽に学問を教えた先生の一人でもある。なので、南皮での出来事は、それなりに意外だった。

「しかし、最近は、賊が増えてきたようですね」

「ああ。洛陽を中心に、黄色の布を身に着けた賊 黄巾党が徘徊し始めている。近々、一気に勢力を拡大して、この大陸に危機が迫るだろう」

「そうですか。そうになると、もしかしたら私や静音、それに風璃ふうりと、さらには紫電様にも上洛令が来るかもしれませんね」

そう言っで、嶺は、今後のことについて予測を立てた。

「何でそう思う？」

紫電は、嶺が言ったことに対して質問を投げかける。

「考えても見てください。それが起これば、中央が腐敗している漢王朝では、その乱を止めるのは難しいと思います。そうになると、各地の諸侯が討伐を行うことになり、漢王朝の衰退が世に知られてしまうことになります」

紫電は、その嶺の言葉を黙って聞いていた。

「そう考えると、そういう事態を引き起こさないために、『天龍』の力が必要になってしまいます。流石に、最初は張讓たちが渋るでしょうが、そこに現皇帝の劉宏様が、一声入れば、正式に呼び戻すことが出来ます。これらを踏まえて、我々『天龍』が再結集することになると考えたのです」

そう言つて、少し疲れたのか溜息を吐く嶺。

「なるほどな。確かにそうしないと、朝廷の力は戻らんだろうな。しかし、俺たちにその報を届けるのはどうするんだろうか？」

「そこは、火穂や劉宏様のことから、もうその辺は、査定なさっているのでは？」

「そうかもな」

そう言つて、お互いに微笑み合う。

「……さてと、そろそろ北平の方へ向かうことにしますかね」

そう言つて、椅子に座っていた紫電は、立ち上がり伸びをする。

「もう行つてしまわれるのですか？」

「ん？ああ。黄巾の乱が近づいてるって事は、もうすぐ呼び戻されるって事だしな」

「そう……ですか」

そう言って、少しさびしそうな顔をする嶺。

「おう。……んじゃ、嶺。また、洛陽でな」

そう言って、紫電はその場から出て行こうとした。

しかし、何かに後ろに引つ張られる感じがした。

後ろを振り返れば、赤くした顔を下に向けながら、服の裾を握っている嶺の姿が目に入った。

「……………これじゃ、出て行けないんだけど？」

そう言って、少し笑みを浮かべる紫電。

「あ、あの……………もう暗くなりますし、その……………よかったら、ここに泊まっていきませんか？」

そう言いながら、赤くした顔を上げた。

そこには、瞳を揺らすあどけない女性の顔をした嶺がいた。

「……………いいのか？」

「はい」

紫電がそう聞くと、嶺はきっぱりと答えた。

「……わかった」

紫電がそう言ったとたん、嶺の顔が少し明るくなった。

その後、二人は夕餉を取り、これまでの話や、昔の話をして、盛り上がった。

その時に、北平の太守、公孫賛は嶺の教え子だから、紹介状を書こうかと嶺が行ってきたので、一応、お願いした。

そして、その夜。

「……紫電様」

「……嶺」

其処には、寝台の上でお互いを見詰め合う二人の姿があった。

その後、何があったかは……読者の皆様の想像にお任せします。

翌朝、紫電は、嶺と別れの挨拶をした後、白竜を呼び、北平へと向かっていった。

そこにいる、まだ見ぬ英雄たちのことを思いながら。

第十五話（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

いよいよ元『天龍』四武将の三人目登場です。

その名は、慮植。

そう。彼の公孫賛や劉備を育て上げた人です。

まあ、詳しい紹介はこの次に載せてあるので、そちらをご覧ください。

そして、次回はいよいよ最終目的地。幽州・北平。

そこではどのような出会いがあるのか？

次回もお楽しみに！！

オリキャラ紹介三（前書き）

今回登場した慮植こと嶺です。

色々、史実とは違いかもしれませんが、それは外史ということをお願いします。

オリキャラ紹介三

姓：慮る

名：植しよく

字：子幹しかん

真名：嶺れい

性別：女

年齢：27歳

身長：159cm

体重：49kg

武器：不動ふどう（盾弓）

能力値：武力4、統率力3、知力4、政治4、魅力3

『天龍』が発足してすぐの時に、その時期に『天龍』に入隊したある人物が推挙した女性。

その者と共に、軍に所属しており、その者とは顔馴染み。腐敗している軍の内情を知り、辞めようかなどと考えていたとき、その者の誘いで『天龍』に来る。

最初は、若輩な紫電に率いることができるのかと疑っていた。しかし、話したり、一緒に訓練したりして、その人柄や実力に徐々に惹かれていく。

『天龍』解散後は、幽州啄郡で私塾を開き、劉備や公孫賛などを育てる。

『天龍』では、主に防衛を得意としていた。

容姿

綺麗な部類に入る顔立ちをしている。少し目つきがキツ目。髪は、茶髪で、ショートヘア。目も茶色である。

体型は、胸は大き目だが、スレンダーな体つきをしている。作者的に顔のイメージは「エヴァンゲリオン」の「綾波レイ」。

性格

冷静で、感情が顔に出ないタイプ。どんなことがあっても動揺しない屈強な精神の持ち主だが『天龍』の解散の原因となった事件のことに關しては、さすがの彼女でも怒りを抑えられなかった。

しかし、そんな彼女も可愛い物（者）には目が無い。

服装・装備

魏の楽進と同じような服装。違いがあるとすれば、下はホットパンツではなく完全なスカートである。色は、黄と茶の二色を基調としている。

戦闘では、その服の上から、胴当てをし、右手に籠手を付け、左手に盾弓『不動』を持って戦う。その弓腕は、『曲張比肩』の黄忠に勝るとも劣らない実力を持っている。

また、戦闘時、何事にも動じず、また防御も硬いことから、『不動龜』と呼ばれる。さらに、防御戦では、『天龍』一の実力を持っている。

・陣形

方円陣、魚鱗陣、鶴翼陣、雁行陣、偃月陣

・奥義

LEVEL 1・不動の精神

味方士気＋、奥義＋、敵士気－

彼の者に動揺という言葉は無い。

LEVEL 2・不動龜

射撃、味方士気＋、味方攻撃＋、敵士気－、敵攻撃－

不動龜が率いる弓兵隊は、どのような部隊でも崩すことは出

来ない。

LEVEL 3・剛破烈弓

射撃、味方士気＋、味方攻撃＋、奥義＋、敵士気－
彼女の弓技は、多くの者を貫く威力を持つ。

第十六話（前書き）

お待たせしました！

やっところさ更新です。

大学が忙しかったので、遅くなりました。

それはさておき。

今回は、北平近郊での話です。

何が彼、紫電を待っているのか？

では、どうぞ。

第十六話

？県を出て、数日後。紫電は、北平^{ほくへい}への道のりの途中の、山の中に居た。

「……なんかこの辺は平和だねえ」

そう言いながら、空を見上げる紫電。

ここまで、目立った賊の襲撃などはほとんどなかった。

「この辺の統治がうまくいつている証拠かな？」

そう言って、視線を前に戻した。

その時、

フーーーーー！！！！

「ん？」

その視線の先、若干開けた場所の方から、多くの人の雄叫びが聞こえた。

「なんだ？」

そう言って、白竜をその場所に急がせた。

その開けた場所の先は、崖になっていた。

「この下の方からか？」

そう言っつて、紫電は白竜から降りて、崖の上から下を覗き込んだ。

すると、目に入っただのは、黄色い軍団が円を描き、その中心で、何か戦っているような光景だった。

「あの中心で、黄色い軍団……黄巾党か？……と、誰かが戦ってるみたいだな」

そう言いながら、中心のほうに集中する。

すると、そこには、刃先が二股になっている槍を振り回して、黄巾党と戦っている、白い服を着た、見知った人物を発見した。

「あれは……星じゃねえか」

そう、今、その中心で戦っているのは、趙子龍こと星であった。

「あの戦い方は……結構まずいんじゃないか？……それにまだ相当数の黄巾党が居るし」

紫電は冷静にその戦況を見る。よく見ると、彼女の足元には多数の死体が転がっており、どれだけの時間戦っていたかが分かる。

そして、その死体が足場をなくしつつあるのか、彼女の動きも少し鈍くなっていつているように見えた。

「……仕方ない。助けられないわけにはいかねえな」

そう言って、紫電は、再び白竜に乗り、目の前の崖から飛び降りた。

星 Side

「ハアアアアア!!」

ブン!ズバ!!

「ぎゃああ!!」

私は、そう叫びながら、目の前に居た賊を一閃した。

しかし、これはマズイな。

弱腰に策の実行を優先する伯珪殿はくけいとの問答の末、単騎敵陣へと乗り込んだまではよかった。

己が槍を一閃振るえば一人を殺し、もう一閃振るえば二人を殺す。

やはり武人はこうでなくては!

そう思いつつ、稲穂を刈るが如く敵を蹴散らし、屠ってきたのだが、ここに至って状況が変わってしまった。

なぜなら、私が殺した賊徒共の骸が折り重なり、足場を埋め始め、

動きを阻害し始めたからだ。

「えええい！！」

ブン！ザシュ！！

「ぐはあ！！」

苛立ちの声を上げ、脱出を試みるが、敵も私の動きが鈍ってきている原因に気付いてきたのか、脱出させじという様に垣を作って行く手を遮る。

それでも、私は脱出のために群がる賊徒共を殺していくが、その骸が無常にも、さらに私の足場をつぶしていく。

そんな悪循環にとらわれてしまっていた。

「ちいっ！！」

そんな、殺しても殺しても活路を見出すことのできない状況に、私は高らかに舌打ちをした。

そんな私の心に焦りと苛立ちが浮かび上がってくる。

今までにない、限りなく近い死の予感。

「だが、そんな道理、我が武で捻じ伏せてくれるわ！！」

脳裏に走った、そんな死の予感を振り払うように私は吼えた。

しかし、気付けば骸の沼は腰の高さまで迫ろうとしていた。

だが、そんなものなど何する物ぞと思い、私は目の前に迫る賊徒に必殺の一閃を放とうとした。

その時、

ズル

「！？しまった！！」

不覚にも血塗られた地に足を取られ、大いに態勢を崩した。

いつもならば足を取られた程度では、どういふこともなかった。

敵の攻撃をあしらい、返す刃で命を刈り取るなど造作もないこと。

しかし、今、私を取り巻くのは、動きを阻害する骸の沼。

ここで、一度態勢を崩してしまえば、それは致命傷となってしまう。

そう認識した私の目に、剣を大きく振りかぶった賊徒の姿が映った。

（ああ。これは間に合うまい……）

私の鍛え抜かれた戦闘思考が、そう告げる。

時間にして数秒……その未来に私はあの剣に斬られて死ぬ。

その未来視じみた光景に、笑いが湧き出てくる。

そうして、私は槍を持つ手に力をこめる。

（だが、ただでは私の命をやらん！道連れにしてくれる！！）

その気迫を胸に、今まさに私に斬りかかろうとしている賊徒に目を向けた瞬間、

「ぎゃああ！！」

私が居る場所から離れたところから悲鳴が上がった。

「っ！？」

いきなりのに、私を殺そうとした賊徒は剣を振り下ろす手を止めて、悲鳴が上がったほうを向く。

「な、なんだ！？」

「公孫賛こうそんさんの軍が来たのか！？」

私を取り囲んでいた賊徒共も断続的に聞こえる悲鳴に動揺が走った。

そのお陰か、私を包囲していた垣が、僅かだが緩む。

そして、その好機を逃す私ではない。

足を取られた格好から態勢を立て直した私は、今度はしっかりと地に足を踏みしめる。

「はあああああー!!」

ダン!!

そして、裂帛の気合と共に上空へと跳躍した。

空へと舞い上がり、骸の沼から逃れた私は、滞空の時間を利用して悲鳴が上がっている元へと目を向ける。

すると、そこには

「な!?!あれは……紫電殿!?!」

そうそこには、見事な白馬に乗って、賊徒共を屠る紫電殿の姿があった。

その姿は、まさに紫色の嵐。

両の手に持った、二振りの剣を馬上から縦横無尽に振り回す紫電殿。紫電殿が振るう二つの銀閃に触れた先から賊徒共の命が刈り取られていく。

しかし、何よりも驚いたのは彼の武だ。

以前にも見たことがあるが、それでも、前は手加減をしていたとしか言いようがないほどの武を彼は披露している。

あれこそまさに、天下無双、絶対無敵、万夫不当、国土無双。

私が、そんな紫電殿を見る中、不意に彼は私が見つめていることに気が付くと、私と視線を交わす。

（合流して蹴散らすぞ。全滅させるつもりだが、ついて来れるか？）

（承知！そちらこそ、遅れることのなきよう）

まるで、長年付き合った夫婦が主従のように、紫電殿と意を交し合った私は、落下点に居る賊徒共に向けて愛槍の『龍牙』を大きく振りかぶった。

「せえええええい！！」

ドガアアアアア！！

気合一閃。

地面をも揺らす一撃に、そこに立っていた賊徒共をまとめて吹き飛ばして着地すると、その場に残った賊徒共を一閃に内に屠った。

紫電殿も、私の作った空間に馬に乗りながら入ってくると、馬から飛び降り、両手に持った二振りの剣で、次々に賊徒の首を跳ね飛ばしていく。

足場が賊徒共の骸で溢れてくると、私は飛び上がり、別の地点に再度流星じみた突撃を加える。

ドガアアン！！

そこに紫電殿が続き、二人でその地点の賊徒を殲滅する。

そんな戦いを繰り広げているうちに、知らず知らずの間に、私は紫電殿と背中を合わせて戦っていた。

久しぶりに背を預け合うというのに、それを意識しないほどに同調していたのである。

（以前、一緒に戦った時もあったが、やはり紫電殿とは相性がいいのかもしれない）

そんな軽口まで心の中でつけるまでに、余裕を回復した私は、今まで私を殺そうと躍起になっていた賊徒共が一転して怯みを見せていることに気が付いた。

私と紫電殿から円を描くように取り囲む賊徒共だが、誰一人としてその円の中に入ってこようとはしない。

まるで、その円のこちら側が、現世と冥界を分かつ境界線であるかのように。

そんな賊徒共の心変わりの早さに私は笑みを漏らすと同時に、先程見せた自分自身の情けなさに対して少々腹が立つてくる。

（私は、こんなつまらない奴らに打ち取られようとしていたのか！……まったく。この様では、伯珪殿に言い訳は出来ないな。ならば、せめて賊徒共を殲滅することで差し引きぬきにしてもらおう）

そう思って、息を一つついた私は、今一度、賊徒共に高らかな名乗りを上げた。

「卑しき賊徒共よ！今一度聞けい！！我が名は趙子龍！そなたらを黄泉路に誘う死の槍だ！卑しき賊徒に身を落としてもなお、男の矜持が残っているならば、かかって来るが良い！！」

星 Side Out

紫電 Side

（何とか間に合ったようだな）

紫電は、背中合わせに立つ星の気配を感じながら、一つ安堵の息を吐いた。

紫電が崖の上で見た時は、いつ討ち取られてもおかしくないような、危なげな戦いだったから、間に合うかどうかは微妙だったのだ。

だが、流石は、後世に名を残すほどの武人。

紫電の作った隙からものの見事に離脱。

戦況を振り出しに戻した。

（それは良いとして。なんで、一人で突っ込んだのか後で聞かないとな）

そう思いつつも、回りの黄巾賊の動きに気を抜かない紫電。

すると……

「卑しき賊徒共よ！今一度聞けい！！我が名は趙子龍！そなたらを黄泉路に誘う死の槍だ！卑しき賊徒に身を落としてもなお、男の矜持^{うじ}が残っているならば、かかって来るが良い！！」

紫電の背後に居る星が、そう高らかに名乗りを上げた。

「今更名乗りっすか……」

紫電は、少し呆れ、短い溜息を吐きながらそう言う。

「何を言われる。今こそ、名乗りの時ではないか」

そう星が返す。

「まあ、そうかもしれないけどな……」

「それよりも、紫電殿。貴殿もここで一つ名乗りを上げてはいかがか？」

そう星が、紫電に提案した。

「いや、俺は……」

「なに、遠慮することはない。実際、私も紫電殿がどんな名乗り方をするのか楽しみで仕方ないのだ」

紫電は、一瞬遠慮しようと思ったが、星にそう言われ、考え直した。

「わかった。んじゃ、いくぞ！」

そう言って、息を吸い。

「我が前に立つ賊どもよ、刮目せよ！我が名は……雷霸！！究極にして至高の武の具現なり！！我は龍となりて、汝らを屠り、黄泉路へと送らん！！それでも、臆することがないのなら、かかって来るが良い！！」

ドン！！！！

紫電がそう名乗りを上げたたん、彼から、途轍もない覇気と殺気、それに闘気が発せられた。

それらは、大気を揺らし、衝撃波となつて賊たちの間を駆け抜ける。

そして、それらをともに受けた賊どもは、徐々に後退りし始めている。

以前とは全く違うその気迫に、星は、目を丸くして、紫電の方を見ている。

「ほう。まさか、それほどまでの力を隠し持っていたとは……これほど驚いたのは、初めてですぞ。紫電殿」

そう言って、紫電のことを誉める星。

「まあ、隠していたわけじゃねえんだけどな。とりあえず、お褒めに預かり光荣……だな」

そう言って、星の方へ向き、笑みを向ける紫電。

「さて、賊の士気もそれなりに挫けた。あとは……狩るのみだ。星ちゃんと付いて来いよ?」

「そちらこそ。あれだけの名乗りをしておきながら、私に遅れるとあつては、末代までの恥じですぞ、紫電殿?」

そう戦場にありながらも、笑顔で軽口を叩き合つた紫電と星は、合わせていた背を離し、黄巾賊の群れへと飛び込んでいった。

第十六話（後書き）

以上です。

如何だったでしょうか？

今回は、久しぶりの趙雲こと星の登場。

そして、彼女との共同戦線の話でした。

おかしなところがあればおっしゃってください。

さて、次回は公孫贇軍と合流します。

そこで何が待っているのか？

次回もお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210p/>

真・恋姫†無双～紫雷の龍～

2011年10月9日00時50分発行